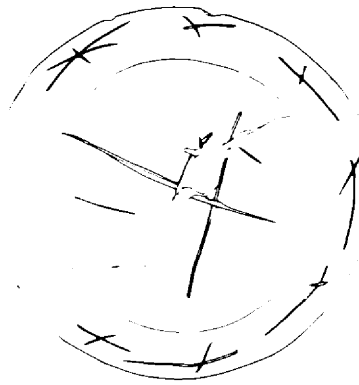


太宰府・吉松地区遺跡群 1

- 神ノ前遺跡第2次調査 —
- 島本遺跡第1・2次調査 —
- 吉松松本遺跡第1次調査 —



平成17年

太宰府市教育委員会

太宰府・吉松地区遺跡群 1

- － 神ノ前遺跡第2次調査－
- － 島本遺跡第1・2次調査－
- － 吉松松本遺跡第1次調査－

平成17年

太宰府市教育委員会

『太宰府・吉松地区遺跡群1』 正誤表

頁・行	誤(下線部)	正
53頁 11～12行	原因者負担で発掘調査を実施することで協議を行い、また官道という重要意向が検出されるため、調査費の一部に補助金を使用することで県文化課と調整を行った。	原因者負担で発掘調査を実施した。

※なお、CD-ROM所収の表データについて不具合が認められ、Macintoshで開くが、Windowsでは開かないことが判明した。

ただ、CD-ROM所収の表は全て冊子に掲載しているので、冊子をご参照いただきたい。



神ノ前4・5号窯完掘状況（北から）



島本遺跡第2次調査区と水城西門（南東から）

序

本書は、太宰府市西部の吉松地区に所在する神ノ前遺跡・島本遺跡・吉松松本遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

吉松地区は、古代大宰府を防衛した水城跡の南西側に位置し、水城土塁の南東側に隣接しています。水城に関連する遺跡も多く、水城西門や門礎などが知られており、発掘調査では木樋による導水施設なども見つかっています。また日本最古の瓦窯跡として知られる神ノ前遺跡もこの地区に所在しています。周辺では古代を中心として近世に至るまでの遺構が点在しており、本書でも飛鳥～奈良時代の須恵器窯跡、水城西門を通る官道跡など古代の主要な遺跡を報告することができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

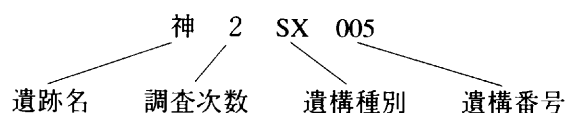
平成17年 3 月

太宰府市教育委員会

教育長 關 敏治

例言

1. 本書は、太宰府市大字吉松にて実施した、神ノ前遺跡第2次調査、島本遺跡第1次調査、島本遺跡第2次調査、吉松松本遺跡第1次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、神ノ前遺跡第2次調査については平成13年度に市道神ノ前-狭間線の拡幅に伴って、島本遺跡第1次調査については平成2年度に市道宮脇-土居線の拡幅に伴って、島本遺跡第2次調査は平成5年度に共同住宅建築に伴って、吉松松本遺跡第1次調査については平成8年度に共同住宅建築に伴って実施した。その経緯等については、各報告冒頭に記す。
3. 調査は、神ノ前遺跡第2次調査・島本遺跡第2次調査を井上信正が、島本遺跡第1次調査・吉松松本遺跡第1次調査を城戸康利が担当した。整理報告は、いずれも井上が担当した。
4. 神ノ前遺跡第2次調査では舟山良一、石木秀啓、林潤也（以上、大野城市教育委員会）、吉村靖徳（福岡県教育委員会）の各氏に、島本遺跡第2次調査では栗原和彦、横田賢次郎（以上、九州歴史資料館）の各氏に、現地にてご指導・ご教示をいただいた。
5. 調査時の測量は、以下の者が行った。
神ノ前遺跡第2次調査・・・井上信正、深江暁子
島本遺跡第1次調査・・・城戸康利
島本遺跡第2次調査・・・河田聡（現、豊浦町教育委員会）、塩地潤一（現、大分市教育委員会）
吉松松本遺跡第1次調査・・・城戸康利、上村英士（現、筑後市教育委員会）、谷由紀子
6. 遺構実測図および遺構配置図は、全て国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。したがって、図中に記載される方位は、特に注記のない限り座標北（G.N.）を指している。
7. 遺構実測図作成および個別写真撮影は、以下の者が行った。
神ノ前遺跡第2次調査・・・井上信正、深江暁子、
埋蔵文化財サポートシステム（遺構全体図作成のみ）
島本遺跡第1次調査・・・城戸康利
島本遺跡第2次調査・・・井上信正、谷由紀子、柴田剛（現、伊万里市教育委員会）
吉松松本遺跡第1次調査・・・城戸康利、上村英士、谷由紀子
8. 神ノ前遺跡第2次調査・島本遺跡第2次調査の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表 檀睦夫）が行った。
9. 遺構全体図・遺構配置図および各遺構図はデジタルトレースを行い、図版とした。これを井上が行った。
10. 遺物実測は、森若知子、酒井三保子、久味木理恵、長直信、井上が行った。
11. 遺物図の浄書は、井上、森若が行った。
12. 遺物の写真撮影は、フォトハウスおか（代表 岡紀久夫）が行った。
13. 作表は、森若、井上が行った。
14. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお報告の中では、内容が明らかなものについて、その遺跡名・調査次数を略するものもある。



遺跡名については、「神」は神ノ前遺跡、「島」は島本遺跡、「吉松」は吉松松本遺跡である。

15. 本書に使用した分類は、基本的に以下のものによっている。
土器 『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第7集 太宰府市教育委員会 1983年
『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡編－』 太宰府市の文化財第10集 太宰府市教育委員会 1992年
陶磁器 『大宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会 2000年
16. 須恵器の分類及び陶磁器の分類は、井上、森若が行った。
17. 出土した金属製品の応急処置は、下川可容子が担当し、安芸朋江、鈴木弘江が補助した。
18. 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社がを行い、本書の体裁に整えるため、編集者が内容を損なわないよう一部編集した。
19. 本書の執筆について、神ノ前遺跡第2次調査・島本遺跡第2次調査の遺物については、井上の指示のもとに森若知子が行った。自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。それ以外については井上が行った。編集は井上信正が行った。
20. 出土遺物、及び図面、写真、デジタルデータ等の記録類は、太宰府市教育委員会が保管している。

目次

I. 調査地の位置と歴史	1
II. 調査組織	3
III. 調査整理の方法	7
IV. 各調査の概要	
IV-1. 神ノ前遺跡第2次調査	
1. 調査に至る経緯	7
2. 地形・層位等	8
3. 遺構	8
4. 遺物	(森若知子) 20
5. 小結	43
付表	45
IV-2. 島本遺跡第1次調査	51

IV-3. 島本遺跡第2次調査

1. 調査に至る経緯	53
2. 層位	53
3. 遺構	53
4. 遺物	(森若知子) 61
5. 自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ) 82
6. 小結	88
付表	91

IV-4. 吉松松本遺跡第1次調査

96

写真図版

- 神ノ前遺跡第2次調査 PL.1～8
- 島本遺跡第1次調査 PL.9
- 島本遺跡第2次調査 PL.10～16
- 吉松松本遺跡第1次調査 PL.17
- 分析写真 PL.18・19

CD-ROM

- 遺構・遺物写真
- 出土遺物一覧表（全調査分）
- 溝・道路の座標方位一覧（島本遺跡第2次調査）
- 遺構番号台帳（全調査分）
- 須恵器蓋・坏 分類・計測表（神ノ前遺跡第2次調査）
- 土師器・瓦器計測表（島本遺跡第2次調査・吉松松本遺跡第1次調査）

I.調査の位置と歴史

福岡平野の南東部に位置する太宰府市は、福岡平野を形成した河川の一つである御笠川の上流に位置する。ここは北から東にかけては三郡山系、西から南にかけては背振山系と、両山系に囲まれた狭い盆地状の平野で、この南東は筑紫平野と接している。こうした地理的条件のため、ここは古来より福岡平野と筑紫平野を結ぶ交通路上に位置しており、それは現在も同様に、九州を縦断する主要幹線・鉄道が通っている。

こうした地理環境にある太宰府市域では、後期旧石器時代から近現代までの遺跡が確認されているが、水城・大野城、そして律令官衙「太宰府」が置かれた古代以降、この地は広く知られることとなり、そ



図1 太宰府市とその周辺遺跡(1/30,000)

れに伴う遺跡・文化財の数も多い。

大和朝廷は、663年の白村江での敗戦により、防人・烽を設置し、また北部九州から瀬戸内・畿内にかけて古代山城を築き、国内防衛を図った。ここ太宰府市周辺でも、664年に水城を築造、また665年には大野城そして基肄城といった軍事防衛施設が相次いで築かれたと日本書紀は記し、その遺跡は現在にも伝えられている。

その後7世紀末～8世紀初頭になると、古代の西海道九国二島を統括し外交機能も有した地方最大の律令官衙「大宰府」がこの地に置かれた。大宰府官衙は、水城・大野城・基肄城などからなる防衛ラインの内側にあり、大宰府官衙の周辺および南面には、都城のように都市計画に従った計画地割を持つ、いわゆる「大宰府条坊」という古代都市が作られ、大宰府政庁の前面には、幅36mもの中央大路が南北

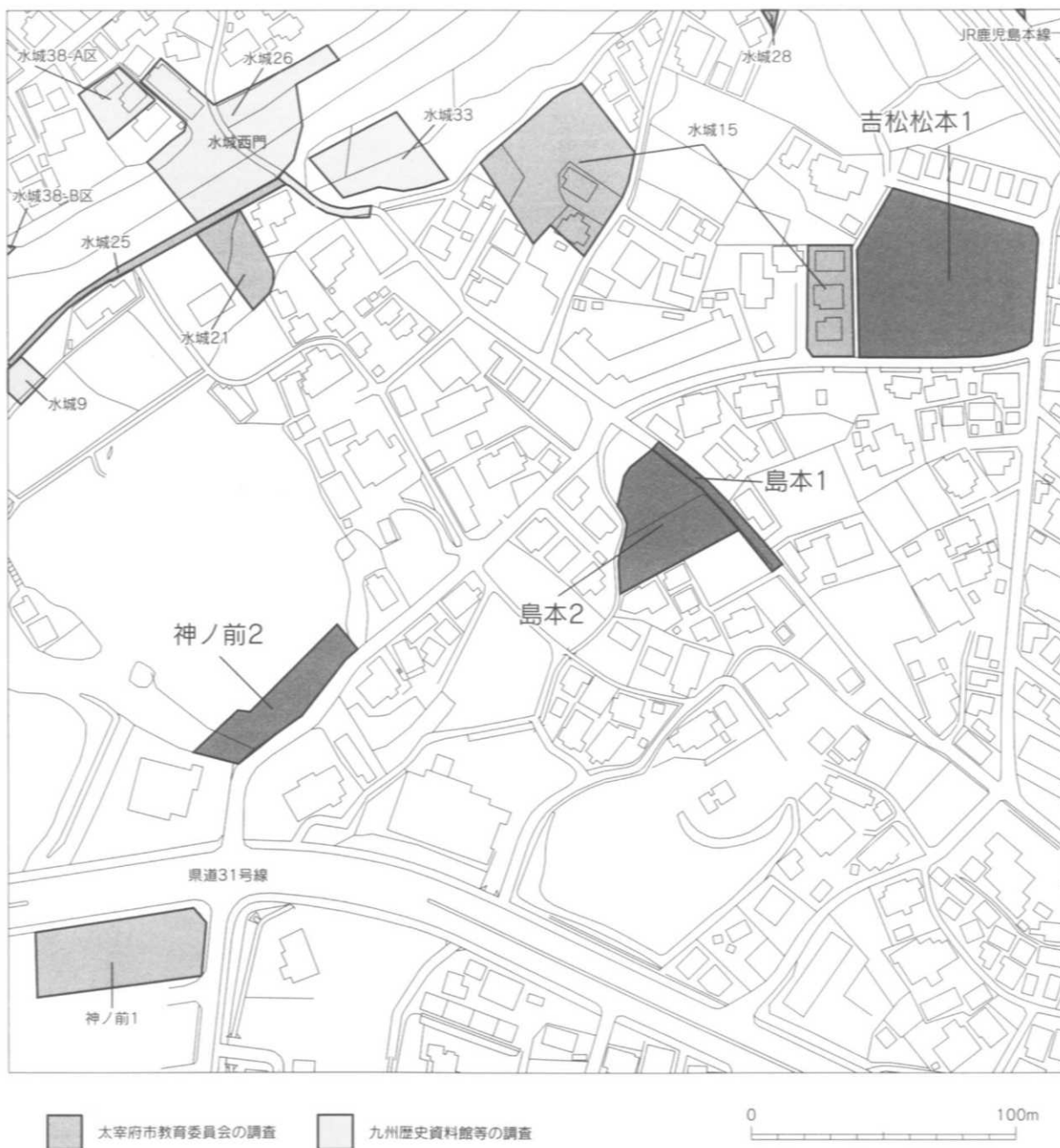


図2 報告調査地と周辺調査 (1/5,000)

に伸びていた。大宰府と各地を結ぶ交通網も整備され、水城の東西二つの門をそれぞれ通って北西-南東へ一直線に伸びる、幅約12mの官道も設けられた。水城東門を通る官道は「長官」の墨書土器を検出するなど官的施設があった可能性がある博多遺跡群（福岡市）へ向かって、また水城西門を通る官道は筑紫館・鴻臚館（福岡市）へ向かって直線的に伸びていることも知られるようになってきた。このように発掘調査成果によって、大宰府造営、防衛施設の整備、官道敷設などが、一体的かつ計画的に整備されたことが次第に明らかになりつつある。

本報告の吉松地区は太宰府市西部にあり、水城跡の南西部の太宰府側に位置する。水城に関連する遺跡も多く、水城西門跡や門礎などを見ることができる。また日本最古の瓦窯跡として知られる神ノ前2号窯も、この吉松地区に所在する。

この地区で行われた発掘調査は水城跡に関連したものが多く、九州歴史資料館や当市教育委員会が調査を実施し、その一部は既刊報告書等により内容を知ることができる。ただこの周辺は、水城跡以外はあまり発掘調査は行われておらず、神ノ前1・2号窯を検出した神ノ前遺跡第1次調査を除いては、現在でも本報告の4ヶ所に留まっている。調査の詳細は各報告に委ねるが、今回、水城に西門を通る官道の検出（島本遺跡第2次調査）、須恵器窯の検出（神ノ前遺跡第2次調査）など、注目すべき調査成果もあった。また周辺では少ない縄文時代中期の土器片をはじめ、縄文時代の遺物もわずかながら出土している。

なお今回の調査成果から、この地区の歴史経過や各遺跡との関連を述べるには、資料不足が否めない。これについては後考を待ち、本報告では各調査毎に成果をまとめることとする。

Ⅱ.調査組織

各調査実施年度の調査組織、および整理報告を主体的に行った平成16年度の調査組織は、以下のとおりである。

平成2／1990年度・・・島本遺跡第1次調査実施

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡 勉
	文化財係長	鬼木富士夫
	主任主事	岡部大治
	主 事	白水伸司
調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利（2年7月1日～）
	技 師	城戸康利（調査担当） （～2年6月30日）
		緒方俊輔
		山村信榮
	技師（嘱託）	中島恒次郎
		狭川麻子

平成5／1993年度・・・島本遺跡第2次調査実施

総括 庶務	教育長	長野治己
	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷 豊
調査	技術主査	山本信夫（5年10月1日～）
	主任技師	山本信夫（～5年9月30日）
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
		山村信榮
		中島恒次郎
	技 師	塩地潤一
	技師（囑託）	田中克子
		重松麻里子（5年6月1日～）
		井上信正（調査担当）（5年7月1日～）

平成8／1996年度・・・吉松松本遺跡第1次調査実施

総括 庶務	教育長	長野治己
	教育部長	小田勝弥
	文化課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化振興係長	大田重信（～8年6月30日）
		田中利雄（8年7月1日～）
	主任主事	岡部大治
		川谷 豊
	主 事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利（調査担当）
		山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正
	技 師	高橋 学
		宮崎亮一
	技師（囑託）	下川可容子
		森田レイ子

平成13／2001年度・・・神ノ前遺跡第2次調査実施

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原 稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正（調査担当）
		高橋 学
		宮崎亮一
	技師（囑託）	下川可容子
		森田レイ子
		佐藤道文

（平成16／2004年度）・・・整理報告

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人（～6月30日）
		齋藤実貴男（7月1日～）
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮
		中島恒次郎
	主任技師	井上信正（整理担当）
		高橋 学
		宮崎亮一
	技師（囑託）	下川可容子
		森田レイ子
		柳 智子
		渡邊 仁
		長 直信
		松浦 智（7月1日～）

* 出現、■ 増加、□ 減少

2000.2補訂

紀年銘	AD.	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式（型式の上限）		標識磁器	準標識磁器
				灰釉	緑釉		
6	700	I	A B				
	725	II					
	750	III					
		IV					
	800	V		猿投O-10 井ヶ谷IG-78	長門?・畿内	白磁I類 越州窯系青磁I,II類 長沙窯系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	唐三彩・二彩 紋胎
	825	VI	A B	黒笹K-14 篠岡S-4 黒笹K-90	長門・洛北・(洛西) (黒笹K-14) 洛西 黒笹K-90		
	850	VII					青磁褐彩・褐釉 初期イスラム陶器
	900	VIII					
	925	IX		虎溪山I (折)・O-53	近江		
	950	X		新I・O-53		越州窯系青磁III類 白磁XI類	
1	1000	XI		東山H-72 (丸石2)			
	1050						
	1100	XII	A B	丸石2 百代寺 東山H-105 篠岡S-1		白磁碗II,III,VI~3,VI, XII,XIII類 皿II,IV,V,VI,VII類	初期龍泉窯系・同安窯系青磁0類 耀州窯系青磁 初期高麗青磁I,II,III類 青白磁
		XIII					白磁鉢III類、碗XIV類
	1150	XIV				龍泉窯系青磁碗I~4,6 皿I類 同安窯系青磁碗I~IV,皿I類	白磁碗VIII,V-4,皿III類増加
		XV					白磁碗VII,皿VIII-1類
	1200	XVI				龍泉窯系青磁碗II-a,b類	白磁皿VIII-2類
	1230	XVII				龍泉窯系青磁III類 白磁IX類	
	1250	XVIII					龍泉窯系青磁II-c類 白磁X類 黒釉陶器
	1300	XIX				龍泉窯系青磁IV類	
9	1330	XX				白磁B,C類 安南鉄絵	
1350							
7	1450						
	1500						

図3 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

- 紀年銘資料
- 1 A.D.927 延長5年,大宰府74次SD205A溝
 - 2 A.D.1091 寛治5年,平安京左京4条1坊SE8井戸
 - 3 A.D.1224 貞応3年,大宰府33次SD605溝
 - 4 A.D.1304 嘉元2年,大宰府109.111次SD3200溝
 - 5 A.D.1330 元徳2年,大宰府45次SX1200池
 - 6 A.D.784 延暦3年,長岡京102次SD10201溝
 - 7 A.D.1459・1465 長祿3・寛正5年,福岡市井相田CH・SG16池
 - 8 A.D.1501 文龜元年,大宰府70次SD1805溝
 - 9 A.D.1265 文永2年,博多62次713土壠

- 文献
- 1 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 - 2 田辺昭三・吉川義彦「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
 - 3 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
 - 4 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
 - 5 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
 - 6 長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
 - 7 福岡市教育委員会「井相田遺跡II」[福岡市埋蔵文化財調査報告書179]1988
 - 8 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 - 9 福岡市教育委員会「博多48」[福岡市埋蔵文化財調査報告書397]1995

Ⅲ.調査整理の方法

調査・整理方法については、基本的に『佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市の文化財第14集 1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会 2001年9月）の内容に準じている。

測量は、トラバース測量にて原点を設け、国土座標第Ⅱ座標系により、位置を明示した。

作図は、基本的には、遺物取り上げ用の遺構略測図（本書中の遺構配置図）を1/100で作成し、遺構個別図・土層図等を1/20で作図した。

なお、神ノ前遺跡第2次調査では、急傾斜地であったこと、また遺構の切り合いがほとんどなかったため、個別遺構図および遺構全体図を基に、遺構略測図を作成した。遺構全体図作成は埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

調査・整理で得られた図面・写真・台帳・出土遺物・自然分析試料等は、太宰府市教育委員会で保管している。

Ⅳ. 各調査の概要

Ⅳ-1. 神ノ前遺跡第2次調査

1. 調査に至る経緯

調査対象地は、太宰府市大字吉松458-3、457-3外に所在する。ここは水城西門のほぼ南約220mの地点にあり、南西約50mには6世紀末頃の瓦窯として知られる神ノ前2号窯を検出した神ノ前遺跡第1次調査が、北東約150mには島本遺跡第2次調査が位置する。

平成10（1998）年3月18日、太宰府市内を走るコミュニティバス「まほろば号」を運行するにあたり、ここの市道（神ノ前-狭間線）を拡幅し、今回7m幅に、後に10m幅にするという協議が、当市建設課（当時）より文化財課にあった。この時の工事はすぐに着工し一部切上を行うという内容であったため、急遽、切土部分について確認調査を実施することになった。3月20日に確認調査を行い、道路拡幅対象地西側の谷地形部分（神ノ前遺跡第2次調査区付近）に古代の遺物が含まれている可能性があることを確認したが、この時の工事の影響を特に受けない場所であった。またその他の部分については地山が露出しており、遺構・遺物とも見あたらなかった。このためこの時の拡幅工事は進められた。

その後、道路を10m幅に拡幅するための協議が、建設課そして道路用地課へと引継がれた。そして道路工事に先立って、遺構検出が予想される谷部周辺については樹木伐採後に発掘調査を、その他の部分についても確認調査を実施して遺構が見つければ発掘調査を行う、との内容で協議が進められた。なお最西端の県道31号線の交差点付近は明らかに削平を受けているため、これは調査対象外となった。

平成13（2001）年7月16日に、道路拡幅対象地東側（谷部東側）の確認調査を実施したが、遺構は検出されなかった。またこの日より谷部分の調査も開始し、同年10月1日に終了した。調査は井上信正が担当し、開発対象面積は1,053.45㎡で、発掘調査面積は366.3㎡である。調査終了後に道路拡幅工事が実施された。

なおその後、調査区の北隣接地については、特別史跡水城跡の史跡追加指定の協議が進められつつある。ここには須恵器窯跡とみられる遺構や谷底に堆積した灰原等が残っており、将来に亘って保存されることが期待される。

2. 地形・層位等

ここは東向きに馬蹄形状に開く谷地形で、今回の調査では谷の南半分を調査した。

このすぐ北には水城西門があり、西門から伸びる官道もすぐ横を通っている状況にある。ただ、調査区の北東側は谷を隠すように北からの丘陵が張り出していたことが調査区東側付近の試掘調査で確認しており（削平時期は不明）、官道から調査区が所在するこの谷ははっきりとは見えなかった可能性がある。

調査区内では、表土である腐植土層を除去すると、上位では黄灰色土系の地山が、下位では花崗岩風化土地山が露出する。遺構はこれを基盤として掘削されている。なお谷底（神2SX005の最下位）では、花崗岩の風化度合いが遅く、上位より固くしっかりした印象を受ける。

こうした基盤層の上に須恵器窯・灰原、そして谷の埋没土が展開する。

須恵器窯は、谷の南斜面で3基確認した。いずれも残存状況は悪かったが、5号窯については一部の灰原との関係を捉えることができた。また他窯と灰原の関係についてもある程度の想定が可能である。ただ北斜面にも窯跡があるようで、現状で表土の窪みを確認しており（fig. 1、調査区北側の推定窯跡）、谷部分（神2SX005）で検出した灰原はこうした未知の窯跡に伴う可能性も想定する必要がある。

3. 遺構

谷

神2SX005（fig. 1・3、PL. 8）

今回の調査区全体が谷地形の南側の斜面に位置するが、表土除去時に谷地形の最下部に堆積していた層をSX005として調査した。対象範囲は、長さ約22m、検出幅は最大約2.3mを測る。周囲の地形から、谷は西南西から東北東へ流下していることがわかる。

堆積順については、ほぼ全体を通して新旧関係を理解することができる。fig.3の25～30層については31層以下との相関関係が不明だが、28層が31層と類似していることから、同一層位とみて層序を捉えることも可能とみられる。なお31層からは遺物は出土しなかった。

まず、谷底およびその堆積物についてみる。調査区は対象地いっぱいに設定し、Y=-47,196付近のみ、谷の最下部まで調査できた。あとは谷の南斜面のみ調査したようである。Y=-47,196付近では、谷最下位に幅約2m程、深さ約1mほどの掘り込みがあるようで、谷底は幅1.1m程度の平坦面があることを確認した。ここには自然堆積とみられる腐植土系埋土で埋まり始めた箇所もみられるが（33層）、その下位には、流入した地山土層及びその直上に須恵器窯に伴うと見られる灰原層が広がる箇所（順に41・39層）を確認している。また谷底ではないものの、5号窯付近では灰原の炭灰を含む層が直接地山と接している箇所もある。通常、谷底には木枝・腐植土などの自然堆積物や谷を削るような流水作用に拠る層位が発達していると想定されるが、このように、木枝等を含まない単純な地山土や灰原といった層が地山に直接接しているのをみると、これが自然な状況とは言い難く、地山を露出させる人為的な掘削行為が、直前にあったと考えるのが妥当であろう。この状況から、①谷底や窯設置予定地付近を地山まで削る。②その後、地下式の須恵器登窯を掘削する。この際、窯体掘削排土の一部が谷底に流れ込む。③窯操業。灰原が谷に流れ込む。といった経緯をたどったことが想定される。つまり、谷底および斜面の一部は、須恵器窯設置に伴って人為的に掘削・成形され、その当初は地山が露出していたと判断している。

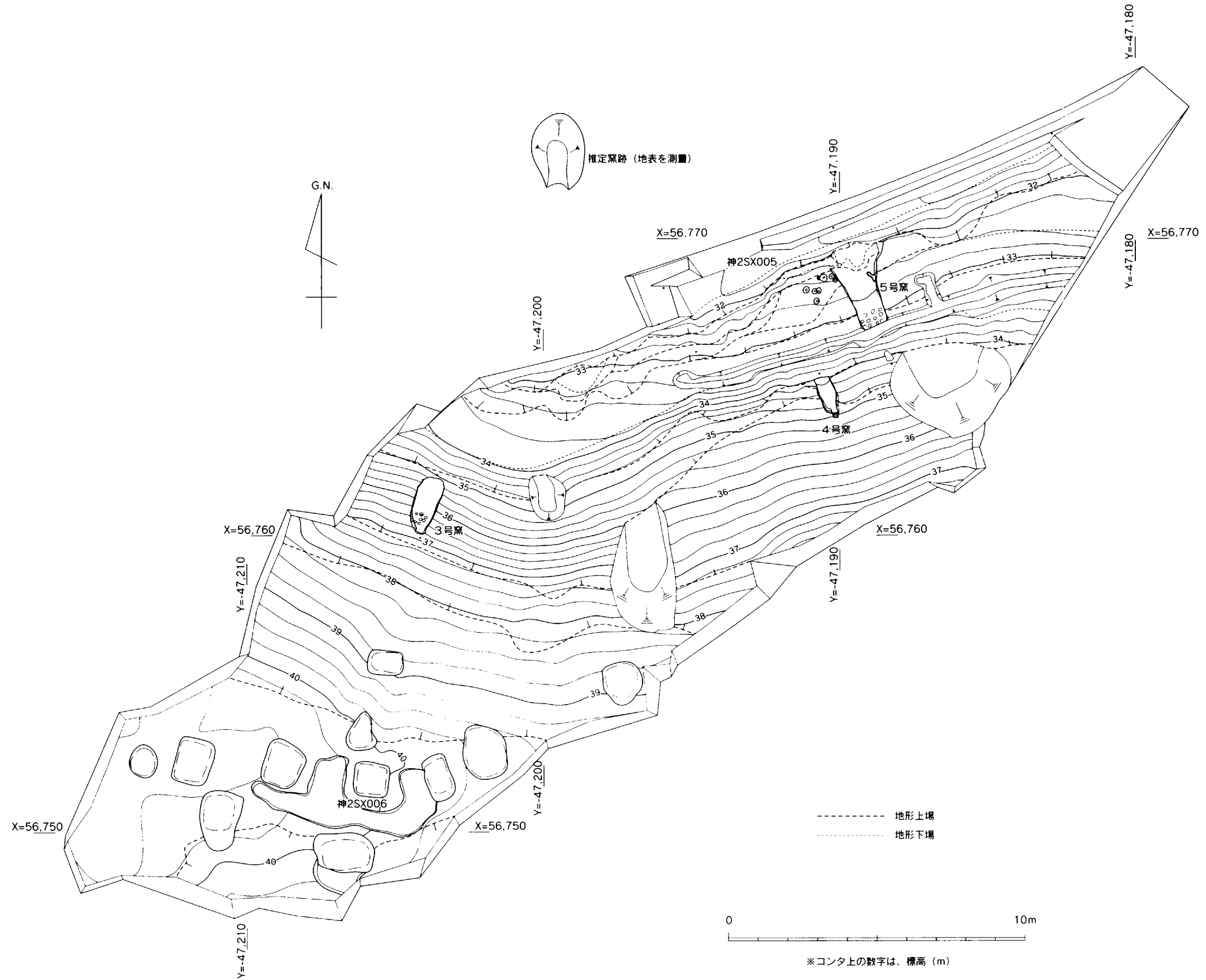


fig. 1 神ノ前遺跡第2次調査 遺構全体図 (1/150)

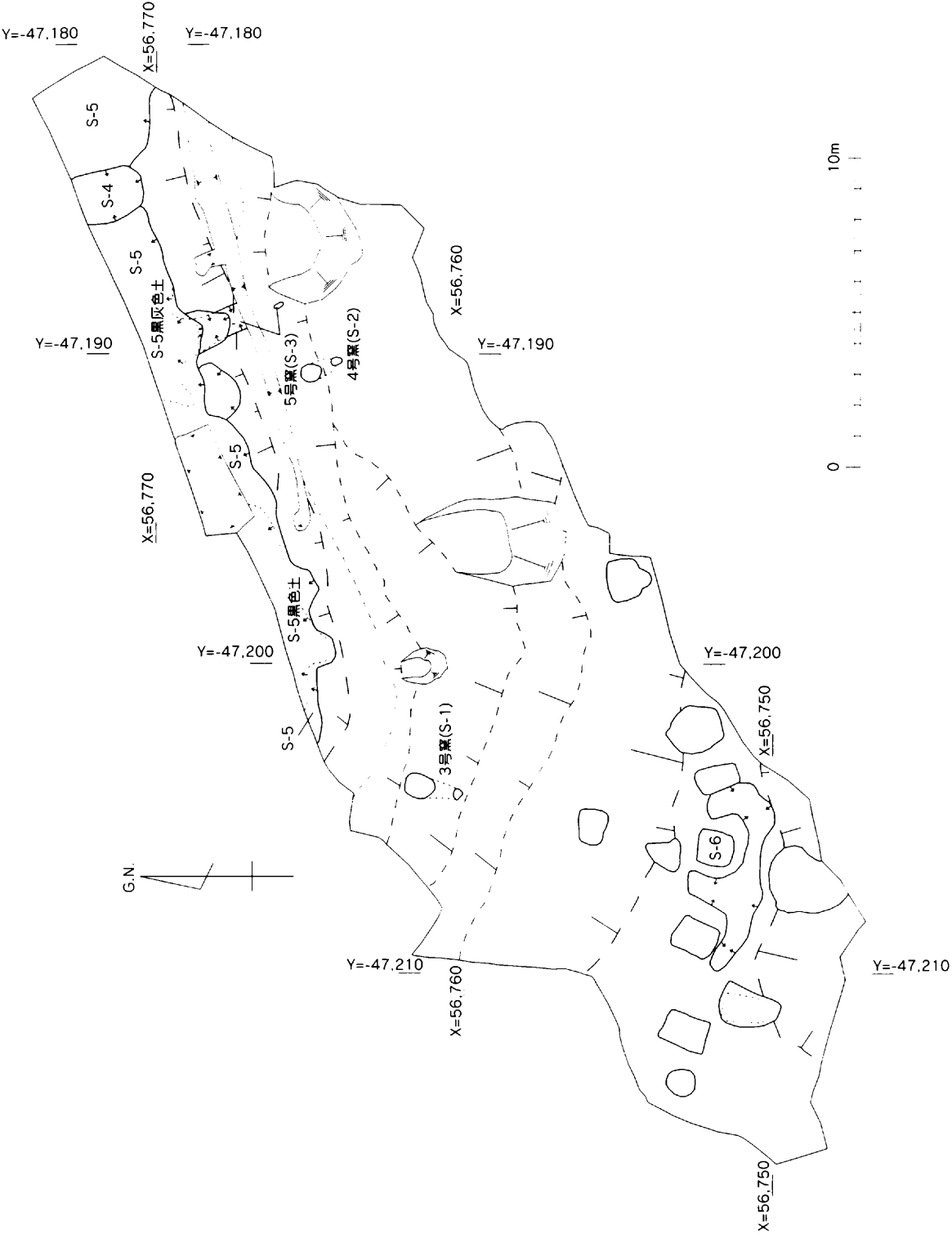


fig.2 神ノ前遺跡第2次調査 遺構配置図 (1/200)

ここに堆積した灰原層と地山流入層について少し詳しく見てみる。

灰原とみられる炭灰層は、fig. 3 の22・35・38・39・39'・43の6層が確認されている。遺構・小結の項で述べるように、38層（5号窯黒色土（灰原））は5号窯に伴うことが確実とみられ、22層（SX005黒色土）と3号窯、35層（SX005黒灰褐色土）と4号窯、39層（SX005灰黒褐色土）と5号窯がそれぞれ関連する可能性を想定している。39'層は39層と極めて類似しており、39層から出土した遺物は細片のみであったため、39層と同じSX005灰黒褐色土として遺物を取りあげている。ただ、両層はやや離れた位置で検出しているため、現在は別層の可能性を考えている。43層（SX005黒灰色土）に対応する窯は現時点では不明で、南斜面に窯跡が存在したが既に消失した、あるいは谷の北側斜面に窯跡が存在する、と想定される。22層は大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期（8世紀前半）を中心とする時期の遺物が主体として、35は大宰府編年IB期前後（7世紀第4四半期前後）の遺物が主体として、38・39層は大宰府編年IA～IB期の遺物が主体として出土している。43層はごく一部調査しただけであるが、大宰府編年IA期（7世紀第3四半期）頃とみられる遺物がわずかに出土している。谷全体の灰原堆積をみると、谷下流部には古い遺物を含む灰原が、谷上流部には新しい遺物を含む灰原が堆積しているようである。谷のわずかな部分の調査だけでは十分なことは言えないのではあるが、窯が時代を追って谷下流から上流に移っていった可能性もあるだろう。

灰原層の直下には、地山土が流入堆積している層を見かける。39層の下位の41層、また38・39層の下位の41層がこれに該当し、22・23層の下位の24層もこれに該当する可能性がある。これらの層は地山土の他にはほとんど混入物が無く、付近の地山を掘削した際の排土が堆積したものと見られる。当調査区で地山掘削といえば、谷部の掘削あるいは須恵器窯設置に伴う掘削が想定されるが、前者の場合は、谷の中に排土を残すことは意味が無いと考えられ、灰原層と密接に関わる後者の方が蓋然性があると考えられる。調査区北壁土層観察で、5号窯灰原と想定している38・39層とその直下の地山流入層である41層の堆積が5号窯を中心に広がっていることを見ると、この想定がより説得力を持つことがわかる。地山流入土層の直上に灰原層が堆積するというセット関係は5号窯内に流入した層でも見られ（fig. 6 の9・10層）、こうした関係が認められれば、地山土流入層の出土遺物から窯の操業開始時期にせまることができると考える。

さて、ここで32～34層の腐植土層（SX005腐植土）に注目してみる。この層は調査区内の谷東半部（下流域）で確認しており、大宰府編年Ⅱ期（8世紀初頭）頃を中心とする遺物が含まれている。35・38・39・39'・43層（いずれも灰原層）は、層位的にはこの腐植土層の直前に堆積したもので、大宰府編年Ⅰ期頃（7世紀後半）の遺物を含んでいる。当遺構の調査及び調査区北壁土層観察によると、この腐植土層はこれら灰原層の西側（上流側）に厚く堆積しており、その一部が灰原層を越えて東側（下流側）に伸びていることがわかる。この状況から、灰原層が谷上部から流れ込む水をせき止めていたため、上流側に水が溜まり、そこに腐植土層が自然に堆積・発達していったことが想定される。この腐植土層はよく発達していることから、7世紀末頃に灰原が堆積した後（5号窯及びその周辺の窯が廃絶した後）、22層（8世紀前半の灰原層）が堆積するまで、周辺では窯操業等がなかったことを示すとみられる。また、期間が空いているにもかかわらず上流から地山土が流入していないことは、谷上流部の地山はほとんど露出していなかった可能性がある。前述のように39層を39層とは別窯の灰原と考え、谷上流部に窯が無かったとは言い難いが、このことは、7世紀後半段階には谷上流部にそれほど多くの窯が操業されていたわけではなかったことを示す可能性があり、窯が谷下流から上流へ移っていったことを示す傍証として捉えている。

22層より上層に灰原はない。ここには流水作用に起因するとみられる砂堆積や地山土の堆積等が見ら

Y=-47,196付近西壁土層観察位置

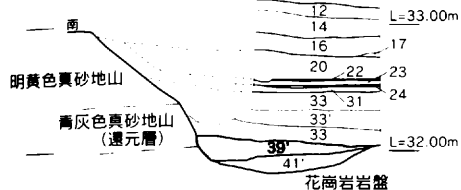
L=34.00m

L=33.00m

Y=-47,196付近西壁土層観察

A 北 B

灰原層

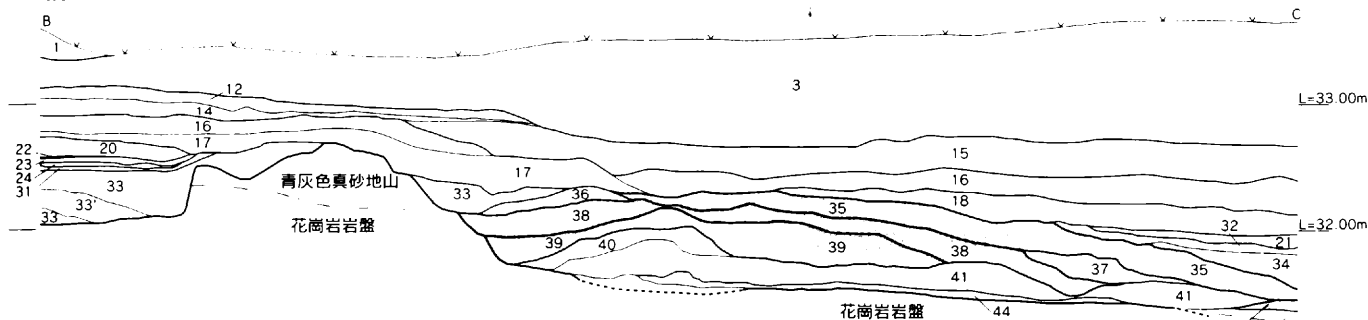


調査区北壁土層観察 (Y=-47,196付近以東)

5号窯土層観察位置

L=33.00m

L=32.00m



調査区壁土層図 ※<>内は遺物取り上げ土層名

- 1 腐植土 (第二次世界大戦後の堆積) <表土>
- 2 淡茶色土 (植物多く含む) <SX005灰黄色土>
- 3 淡黄褐色土 <SX005灰黄色土>
- 4 灰色土 (淡黄色粘土塊含む) <SX004>
- 5 茶褐色腐植土 <#>
- 6 茶褐色腐植土 <#>
- 7 淡茶褐色腐植土 <#>
- 8 黄褐色砂質土 (中粒~粗砂。下方は特に粗い) <SX005濃黄色土>
- 9 淡茶灰色土 (やや粘質) <SX005灰色土>
- 10 白灰色砂 (中粒~粗砂。上部の一部に細粒砂を含む) <#>
- 11 黒灰色土 (やや粘質。中央~上部にかけて橙色の細ブロック土をまばらに含む) <#>
- 12 淡灰色砂
- 13 白灰色粗砂
- 14 淡灰褐色砂質土 <#>
- 15 灰色土 (黄色土塊含む) <#>
- 16 灰褐色砂質土 <SX005灰黒色土>
- 17 暗褐色粘土 <SX005黒褐色土>
- 18 暗灰色粗砂 <SX005白灰色粗砂>
- 19 淡黄灰色砂 (地山真砂土) <SX005淡黄色砂>
- 20 淡黄灰色砂 (地山真砂土) <#>
- 21 黄灰色砂質土 (地山真砂土) <#>
- 22 灰層 (灰原) <SX005黒色土>
- 23 淡灰茶色粘土 <#>
- 24 淡黄灰色砂質土 (地山真砂土) <SX005黄色砂>
- 25 灰茶色砂 (中粒砂) <SX005黒色土>
- 26 黒色粘質土 (黄色土を粒状に含む) <#>
- 27 淡灰色土・黄白色土 (やや粘質。黄白色部分は砂質気味) <#>
- 28 暗茶色粘土 腐植土層 <#>
- 29 暗黄色粘土 <#>
- 30 暗灰色粘土 (かなり粘質) <#>
- 31 暗茶色粘土 28層に類似 <#>
- 32 暗茶褐色粘土 <SX005腐植土>
- 33 暗茶褐色粘土 (腐植土層) <#>
- 33' # (炭粒含む) <#>
- 34 灰茶色粗砂 (ラミナ状に堆積。木材等わずかに含む) <#>
- 35 黒色灰原 5号窯灰層に伴うと考えられる <SX005黒灰褐色土>
- 36 暗黄色粘土 (灰原をわずかに含む) <#>
- 37 灰茶色粗砂 窯内置台のような塊を一個体含む <#>
- 38 茶灰色灰原 <5号窯黒色土 灰原>
- 39 暗灰色灰原 灰・灰層・暗茶色粘土 <SX005灰黒褐色土>
- 39' 暗灰色灰原 39層とは類似。同一層の可能性もあるが、一応分けた。
- 40 淡白黄色砂質土 木材や多く含む。攪乱されたような堆積 <SX005淡黄灰色砂>
- 41 淡白黄色砂質土 (地山真砂土) <#>
- 41' 淡白黄色砂質土 41層とほぼ類似。同一層の可能性もあるが、一応分けた。
- 42 白灰色砂
- 43 灰褐色灰原 (調査区北側の斜面に窠が存在する可能性あり) <SX005黒灰色土>
- 44 茶色腐植土 灰原の灰をおすかに含む。43層と関係ありか?

0 2m

fig. 3 神ノ前遺跡第2次調査 調査区北壁土層図 (1/60)

れる。堆積物の中には平安時代後期～鎌倉期とみられる中国陶器や瓦質土器がごくわずかに出土している程度であり、奈良時代以降は人の活動はあまりなかったとみられる。

なお、第二次大戦頃、谷部付近に人家が建っていたとの地元の方の話があり、谷上層はそれに伴う整地層の可能性がある。

須恵器窯跡

神ノ前3号窯（神2SX001）（fig. 4、PL. 2～4）

調査区西側の丘陵中段で検出した。花崗岩風化土を削り抜いて構築した地下式無階無段登窯で、燃烧部(?)・焼成部・煙道部が残存している。残存長は2.61mで、煙道部を南南西に向けており、主軸はG.N.162° 49' 48" -Wである。床面は、焚口に近い部分から0.5m付近に傾斜変換部があり、その奥は煙道部に向かってゆるやかに傾斜がきつくなっている。窯体の谷側は後世の削平により消失している。

1) 燃烧部(?)

5号窯の状況から推測すると、焚口に近い部分から傾斜変換線までが燃烧部の可能性がある。ただ、壁面はコンクリートのように硬質で良く焼けており、燃烧部がこれほど還元炎を受けて硬化するのか、といった疑問は残る。この部分の床面は残存長0.5～0.6m、幅約0.9mで、傾斜変換部までは約10° 53'である。

2) 焼成部

傾斜変換部から煙道までで、長さ1.85m、最大幅0.78m、床面幅0.7～0.8mを測る。また煙道部直下は、煙道に向かって幅0.3m程度に狭くなっている。傾斜変換部からその約1m奥までは約29° 53'、そこから煙道部直下までは約45°で傾斜している。焼成部には天井が残存しており、垂直高は約0.4m、傾斜に対する垂直高は約0.3mを測る。壁面はコンクリートのように硬質に還元しており、その周囲を取り巻くように焼成の影響を受けて酸化（赤色化）した範囲が広がっているのを断面観察で確認できる。床面には円形の痕跡が14ヶ所確認された。このうち製品を置くための置台の跡と確實視できるものは上部の8ヶ所である。置台は15～20cmの間隔で傾斜に対して平行に並べられたことがわかる。なお置台痕跡を観察すると、酸化・還元の状態の違いが一部にみられ、当初あった置台をはずした後、補修土を入れて床面を平らにし、その後火入れをしたと推察されるものがある。このことから、最低2回、おそらく複数回の火入れがあったとみられる。

3) 煙道部

焼成部からはほぼ垂直に約0.5m程立ち上がっている。煙道口は径が0.31×0.35m程度の円形～ややいびつな隅丸方形を呈している。壁面はコンクリートのように硬質で良く焼けている。なお、煙道部中位には窯体とみられる塊が4個体、煙道部下位に模骨痕を有する格子目叩きの平瓦（おそらく老司式）が出土しているが、これらは煙道口からの流れ込みである。

神ノ前4号窯（神2SX002）（fig. 5、PL. 5）

調査区東側の丘陵中段で検出した、極めて小型の窯である。花崗岩風化土を削り抜いて構築した地下式無階無段登窯で、焼成部・煙道部が残存している。残存長は1.79mで、煙道部を南東に向けており、主軸はG.N.157° 47' 47" -Eである。窯体の谷側は後世の削平により消失している。検出した窯体下端は窯体の火のまわりも良いため焼成部として報告したが、傾斜角度が水平に近いことを考えると、燃烧部だった可能性もあろう。

1) 焼成部

床面の残存長1.33mで、最大幅0.59m、床面幅0.54mを計る。煙道部に向かって少しずつ狭くなり、煙道部直下で幅0.2mとなって煙道部に取り付く。焼成時の床面は、窯体下端から0.35～0.6mの範囲のみに

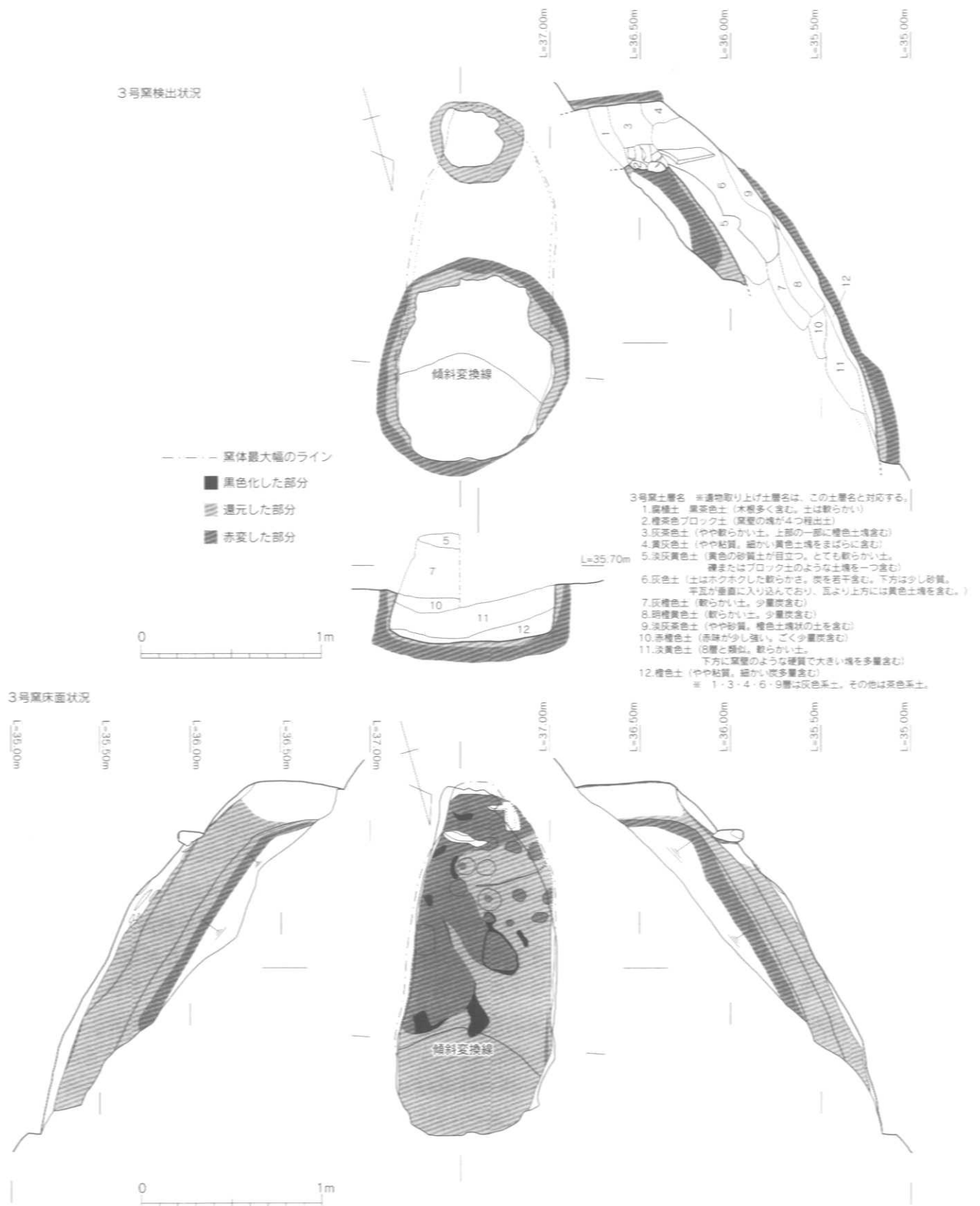


fig. 4 神ノ前遺跡第2次調査 3号窯実測図 (1/30)

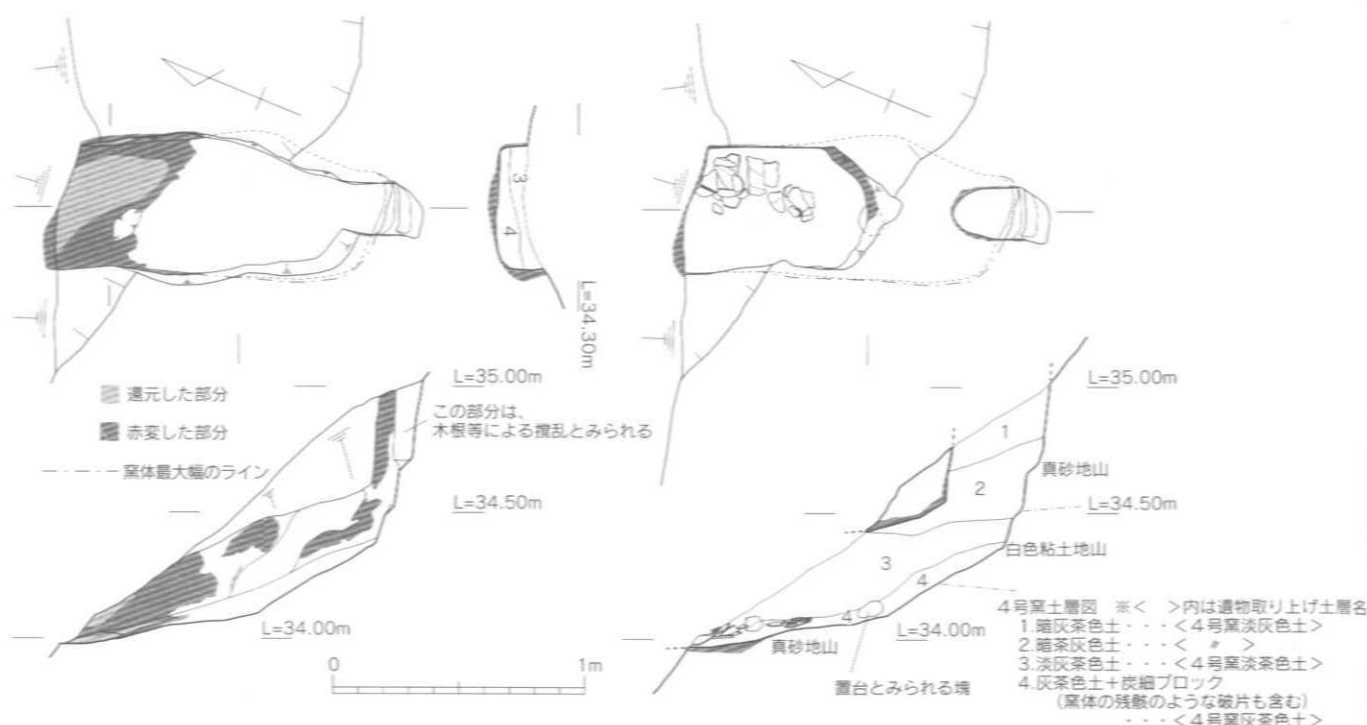


fig. 5 神ノ前遺跡第2次調査 4号窯実測図 (1/30)

残存しており、その傾斜角は約 $8^{\circ}58'$ である。その奥は花崗岩風化土が露出しており、当初の床面は残存していないようである。床面残存端と煙道取付部とを繋ぐと、約 $21^{\circ}7'$ 程度の傾斜が求められる。焼成部には、天井が残存しており、垂直高は0.3~0.35m、傾斜に対する垂直高は0.26~0.33mである。

須恵器窯としての利用があまりなかったのであろうか、窯体全体をみても還元を確認した部分はわずかで、しかもごく薄く観察される程度である。また、酸化した範囲もまばらであり、これが操業していた姿とするなら、十分に火が回っていたという印象は薄い。その上、床面・壁面とも残りが非常に悪い。奥側の床面は無く、壁面も場所によっては大きく抉れているところもある。その反面、埋土から窯体の出土はほとんどなく、壁の自然崩落等ではないとみられる。こうした状況を鑑みると、窯の操業回数が少なかったか、あるいは窯壁の剥ぎ取りが行われた可能性等が想定されるが、窯体下位の床面は火がまわっていることが観察されることから、後者の可能性がより高いと考えている。

2) 煙道部

約 $81^{\circ}30'$ の傾斜角で、約0.67m程立ち上がっている。煙道部は径が 0.3×0.2 mの楕円形を呈している。検出した状況では、煙道の途中に2段ほどテラスが設けられ、階段状を呈している。壁面には、酸化して赤変している部分は見られるが、還元している部分(硬化している部分)は見られなかった。

神ノ前5号窯(神2SX003)(fig. 6・7)

調査区東側の丘陵下段で検出した。花崗岩風化土を削り抜いて構築した地下式無階無段登窯とみられ、焚口部・燃焼部・焼成部、そして煙道部の一部が残存している。残存長は4.67mで、煙道部を南東に向けており、主軸はG.N. $156^{\circ}58'49''$ -Eである。焚口部と燃焼部の境には、ある時期に窯体から伸びる袖部が取り付けられている。燃焼部と焼成部の境では傾斜が急に変わっている。

1) 焚口部

焚口部と想定する袖部裾から谷部(神2SX005)までの範囲が想定される。平面形が台形を呈す上段部と、谷側に一段下がついて付属する下段部がある。

上段部については、軸に沿っての残存長は約1.1m、焚口袖部付近は幅1.1m、上段部と下段部との境

付近では1.76mを測り、傾斜角は約 $13^{\circ} 30'$ である。燃焼部との境には袖が両壁から伸びてきている。左側袖部の燃焼部側は窯壁と同じ土が廻りこんでおり、焼成の影響が多少見られることもあって、これが袖部と認識できたが、右側の袖部は粘土塊が置かれたという程度のもので、それほど焼成を受けている状況でもなかったため、窯体に付属するものと言い切れない面もある。ただ、左側袖部と同様、燃焼部床面に堆積する炭層（fig. 6 の11層）がここまで伸びていること、左側袖部と同様、この下位に炭層（fig. 6 の15層）があり、その取り付けの契機が同じと見られること、また後述する下段部の作業場との位置関係から、これを右側袖部と考えて報告することにした。両袖間は、幅約0.4mほど開いており、ここが「焚口」と考えている。なお、右袖およびその下位の炭層（fig. 6 の15層）を除去した床面で、焼成により還元している部分を確認した。これは、検出した両袖の設置以前に火入れがあったことを物語るものである。検出した袖部が設置される以前の焚口は、もう少し谷側にあったことが想定されよう。

下段部については、テラス状の平坦面がある。焚口部とは約0.1m程下がった位置にあり、長さ約0.5～0.8m、幅約1.5mの広さがある。前述の「焚口」の前に平坦面がくいでいるのが特徴的であり、窯焚きの際の作業場として当初設けていたと想定される。ただ、最後には当窯に伴うとみられる灰原（5号窯黒色土（灰原））で埋め尽くされている。

2) 燃焼部

焚口袖部から傾斜変換部までが燃焼部とみられる。この部分の床面は残存長0.8m、幅約1mで、傾斜変換部までは約 $7^{\circ} 36'$ である。窯壁は上部に向かうに連れて焼成の影響を受け、還元・酸化している部分が見られるが、床面については焼成の影響は少ないようで、壁のようなコンクリート状の硬化は見られない。

3) 焼成部

燃焼部との境である傾斜変換部から煙道が取り付くと想定される位置までで、長さ2.85m、床面幅約0.8～1.01mを測る。燃焼部との境から0.9mほど上位では、床面幅が0.8m程に狭くなりつつある状況が見られるが、攪乱溝により削平されており旧状は不明である。攪乱溝のさらに上位では、焼成による影響を受けた床面の範囲を痕跡として窺うことができたが、それ以外の状況は不明である。燃焼部との境からその0.9m奥までは約 $26^{\circ} 34'$ 程度で傾斜し、そこから上位は約 $43^{\circ} 39'$ で傾斜している。

壁面はコンクリートのように硬質に還元しており、その周囲を取り巻くように焼成の影響を受けて酸化（赤色化）した範囲が広がっているのを断面観察で確認できる。燃焼部と焼成部の境付近の両壁面には、壁材が付着しており、一度壁を補修したことが窺える。

床面も還元しており、部分的に還元部分が消失して酸化（赤色化）した部分が露出しているところも見受けられる。その中で円形に酸化（赤色化）範囲が露出した部分や、円形の痕跡が観察されるところが、11ヶ所確認された。いずれも製品を置くための置台が剥ぎ取られた痕跡とみられる。置台は10～15cmの間隔で、傾斜に対して平行に3～4個ずつ並べられており、現状では3段分確認したことになる。なお置台痕跡を観察すると、酸化・還元の状況の違いが一部にみられ、当初あった置台をはずした後、補修土を入れて床面を平らにし、その後火入れをしたため、そこが還元したと推察されるものがある。このことから、最低2回、おそらくそれ以上の火入れがあったことが窺える。

4) 煙道部

煙道部については残存していないため具体的には不明である。ただ、焼成部と煙道部が取り付くとみられる付近の床面に、 0.38×0.23 m程度の楕円形の痕跡がわずかに残存しているのを確認している。この部分について、還元範囲と同一検出面にもかかわらず、山側には酸化（赤色化）範囲が厚く広がっており、それは焼成部付近の窯体断面観察で確認される酸化（赤色化）範囲程度の厚さを有していること

から、ここで煙道部へと立ち上がっている可能性は十分にある。この範囲が焼けていることは重機による表土除去作業時より確認しており、この谷に窯跡が存在する確証を得たのであるが、遺構確認作業上、わずかではあるが当初検出した位置より削っている。この作業を通して窯体外形プランに変化がなかったことを考えると、ここが煙道部の下端だった可能性は十分にあると考える。

5) 灰原部

焚口部から谷部（神2SX005）にかけて炭灰層が広がっている。これらは3層に分かれることが確認された。上から順に「神2SX005黒灰褐色土」層・「5号窯黒色土（灰原）」層・「神2SX005灰黒褐色土」層である。このうちのいくつかは5号窯体内部で確認された炭灰層と一連のものと理解できる。

「神2SX005黒灰褐色土」（fig. 3の35層）は、「5号窯炭層」（fig. 6の9層）と一連の層位とみられる。検出時には、両層は「5号窯黄灰色土」により、わずかに分断されており、直接的な証拠は得られなかったが、埋土内容物の状況が極めて似通っていることや層の走向から、同一層位の可能性が極めて高いと判断している。内容物からこの層は灰原と判断されるが、窯内に流入した地山土層（fig. 6の10層）の上に堆積していることから、当窯とは別窯の灰原と考えられ、小結でも述べるように、4号窯あるいはその他未知の窯に伴うと推測している。

「5号窯黒色土（灰原）」（fig. 3の38層）は、「5号窯黒色土（窯内）」と同一層で、灰原と窯内の状況を見るため、便宜的に分層したものである。この層は窯の燃焼部から、焚口部・灰原部へと堆積しており、燃焼部では、当層が途切れる付近から窯体の酸化（赤色化）・還元範囲がはじまるなど、窯体と密接に関連していることから、5号窯最終操業時の炭灰層と考えている。当層の堆積範囲については、焚口部を中心に左右に広がっていることが、神2SX005の調査でも確認しており、確認した範囲だけでも幅約5.3m、厚さ約0.1～0.25mを測る。

「神2SX005灰黒褐色土」（fig. 3の39層）も、当窯焚口部下の谷地形下位に堆積する灰原層である。この層は、谷の北斜面に存在している可能性がある須恵器窯の灰原と考えることもでき、どの窯に帰属する灰原か判断は難しいが、5号窯直下から厚く堆積が始まっていること、また「5号窯黒色土（灰原）」との間に別層を挟まず、土層観察でも両者が一体となって堆積した状況が窺えることから、5号窯の灰原層と考えるのが妥当と考える。当層の堆積範囲が5号窯焚口部を中心に広がっていることも、その傍証となろう。その規模については、調査区北壁土層観察では幅約3.65m、厚さ約0.15～0.3mを測る。

なお、神2SX005灰黒色土の下位には、5号窯を中心とした幅約5.75mの範囲に地山流入土が堆積している（fig. 3の41層）。当調査区では、灰原層の下位に地山流入土層が堆積するケースがこの他にも見られ、この地山流入土を窯掘削に伴うものと想定している。推測の範疇ではあるが、この層も5号窯掘削に伴う排土の可能性を考えている。

その他の遺構

調査区南西端の丘陵頂部には、近年まで墓地があり、調査が始まる前までに改葬を行ったとのことである。墓坑は12基ほど確認したが、位置確認に留め、掘削は行っていない。このうち神2SX006のみ遺物が出土したため、報告を行っている。

神2SX006

隅丸方形に掘削されている。近現代墓の改葬により攪乱されているようで、埋土から陶磁器が出土している。

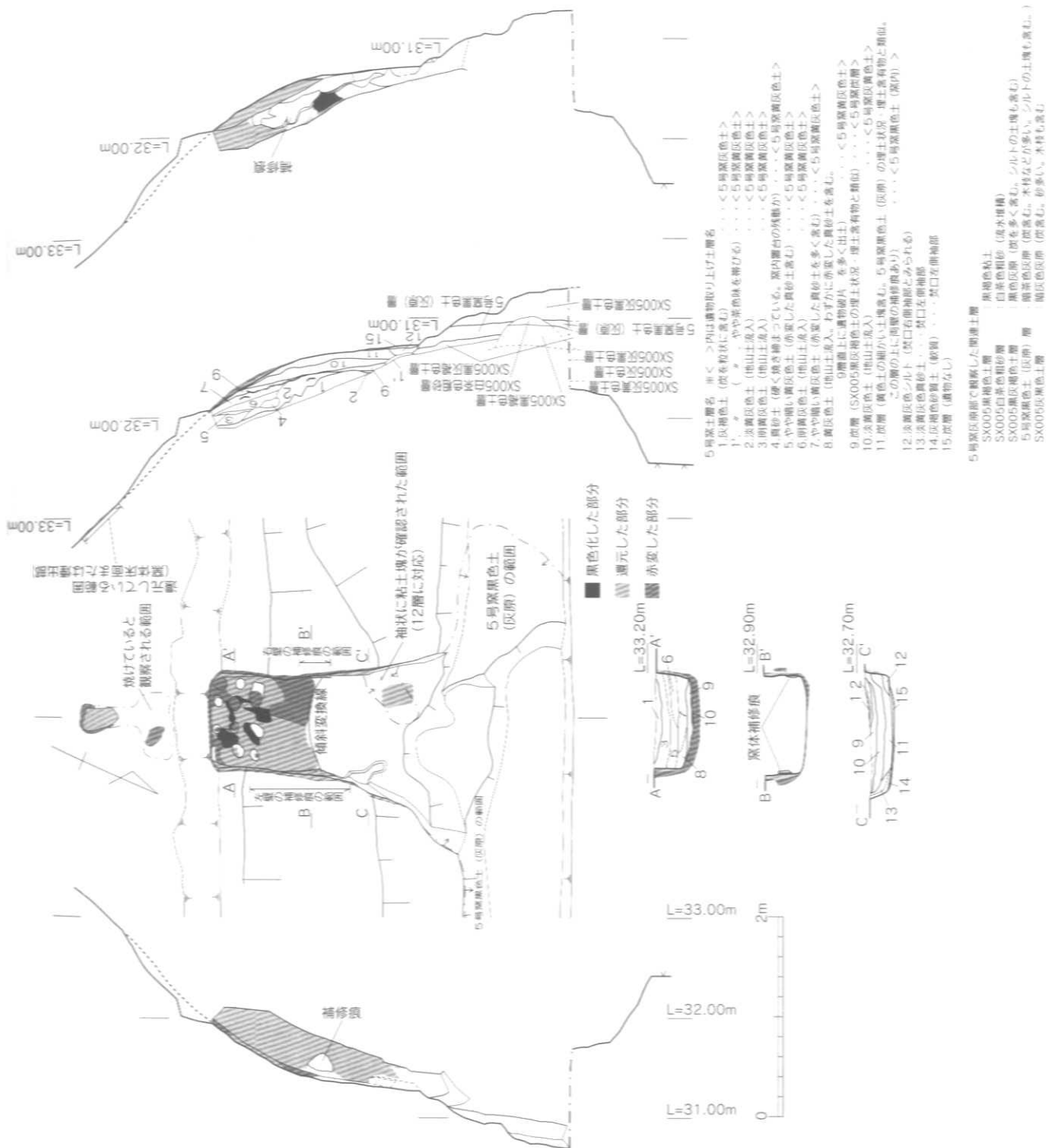


Fig. 6 神ノ前遺跡第2次調査 5号窯実測図 (1/60)

4. 遺物

1) 須恵器の分類について

本調査で出土した須恵器蓋・坏については、『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡編－』の須恵器の分類に従い、分類を試み、本文中および表中に記載した。

なお、『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡編－』に分類がなかった、断面凹形の須恵器蓋のつまみ（「蓋c×」）、及び、断面四角形の須恵器坏cの高台（坏cキ）について、本書中に限り、追加している。

1、須恵器蓋

法量に大小がある。形態によって次のように分類する。

〔口縁の断面形〕

- 1・・・口縁部内部にかえりをもつ。
- 3・・・端部が断面三角形の肥厚部となるもの。

〔口縁細別〕

【蓋3の口縁部形状】

- ア・・・大きくてしっかりした三角形で内面に稜がつく。
- イ・・・小さいがしっかりした三角形。
- ウ・・・大きい三角形だが端部が不明瞭。
- エ・・・三角形があまり肥厚せず内面にわずかな凹みをつける、退化的特色を有する。

【蓋1の口縁部と天井部形状】

- I・・・かえりはやや大きく、口縁端面よりも下方に突出する。天井部はやや突出みで丸みを有する。口径はⅡ・Ⅲよりも大きい。
- I'・・・かえりはIと同様であるが、天井部はIより平坦で広い。口径はⅡと同じ。
- Ⅱ・・・かえりはIよりやや後退するが、口縁端面よりわずかに下方へ出る。天井部と体部の境は稜をなし、天井径は小さい。
- Ⅱ'・・・かえりは口縁端面と同一面をなす。
- Ⅱ"・・・かえりはⅡ'と同じで天井部径が広い。
- Ⅲ・・・かえりは口縁端面よりも内側へ後退する。天井部と体部の境は稜をなすものと境が不明瞭で丸みをもつものがある。

〔つまみの有無〕

- a・・・つまみなし。
- c・・・つまみを有する。

〔つまみの形状〕

- | | |
|-------------|------------------|
| '・・・ひし形 | ×・・・断面凹形（※本書で追加） |
| "・・・偏平な擬宝珠状 | ▽・・・偏平なボタン状 |

2、須恵器坏

蓋の場合と同様、法量に大小がある。形態により次のように分類する。

[体部形態]

- 1・・・体部下半に大きく丸みを有する。
- 2・・・体部と底部境が角に近いが不明瞭（cでは断面四角に近い高台を伴う）
- 3・・・体部と底部境は角ばり稜をつくる。

[体部形態細分類]

- I・・・Ⅱ・Ⅲに較べて口径は大きく、体部上半は開き、底部は丸く突出ぎみである。
- Ⅱ・・・体部上半部は直立し、中位以下は丸い。中位に凹線や凸線帯を有する。底部は平坦である。
- Ⅱ'・・・器形はⅡと同様で、中位の凹線・凸線はない。
- Ⅲ・・・Ⅱより体部の丸みが下位に移る。

[高台の有無]

- a・・・無高台
- c・・・有高台（bは14世紀以降の土師器にのみ使用する記号である）

[高台形態細分類]

- ア・・・高く端部下面はやや広い平坦面をなす。
- イ・・・高く先端部をはね上げる。
- ウ・・・高く脚状をなす。端部は丸くつくる。
- エ・・・低く横に端部を拡張する。下面は広く平坦面をなす。
- オ・・・低く、エのように端部をはね上げない。
- カ・・・低く、端部は内側に拡張する。
- キ・・・断面四角形（※本書で追加）

2) 出土遺物

須恵器窯出土遺物

神ノ前3号窯出土遺物 (fig. 7)

神ノ前3号窯灰色土出土遺物

瓦

平瓦（1） 残存長27.9cm、幅15.0cm、厚さ1.85cmを測る。格子叩き。凹面には模骨痕がみられる。

神ノ前4号窯出土遺物 (fig. 7)

神ノ前4号窯煙道部淡茶色土出土遺物

須恵器

蓋1（2） 口縁部の破片で、残存高1.9cm。返りはわずかに下方へ突出する。本書分類の蓋－1Ⅰ×1Ⅱ類。

坏c（3） 底部の破片で、高台径は9.4cm。高台は低く端部をはね上げない。本書分類の坏－cオ類。

神ノ前4号窯淡茶色土出土遺物

須恵器

蓋1(4) 口縁部の破片で、残存高1.55cm。かえりはわずかに下方へ突出する。本書分類の蓋-1Ⅰ×1Ⅱ類。

神ノ前4号窯灰茶色土出土遺物

須恵器

甕a(5) 口縁部のみ残存する。口径は16.8cm。

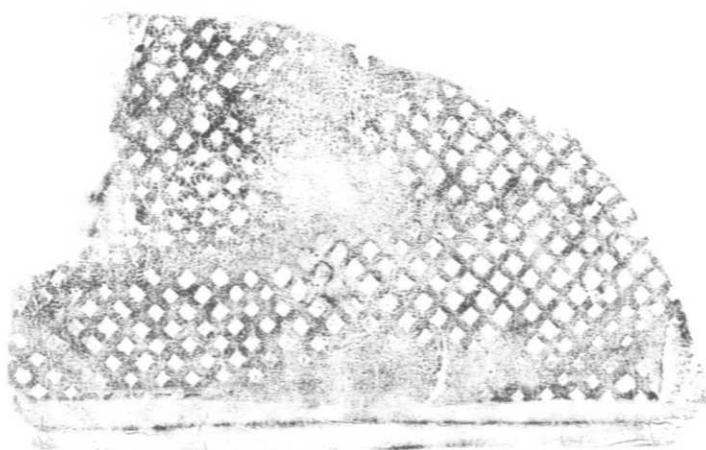
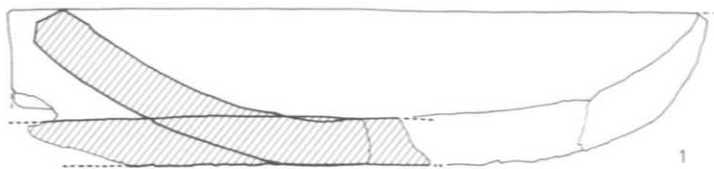
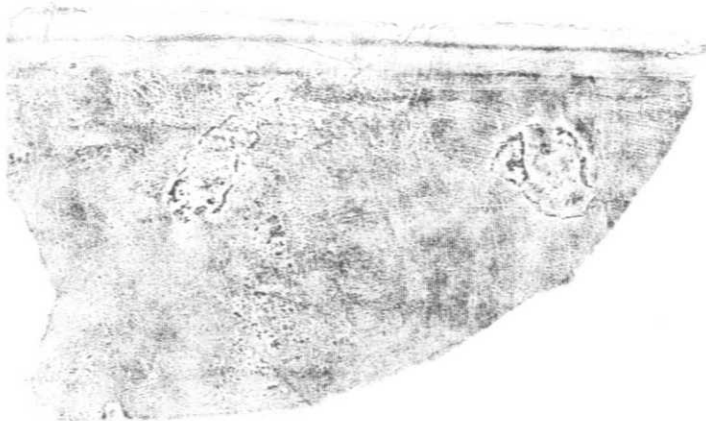
土師器

甕(6~8) 6は口縁部のみの破片で口縁部内外面は横ナデによって仕上げている。残存高3.6cm。7・8は頸部を「く」の字に屈曲させるもので、体部内面はケズリにより調整している。7は残存高4.2cmで、8は残存高4.3cm。

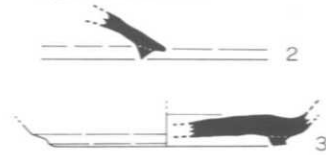
神ノ前5号窯出土遺物 (fig.8~10)

神ノ前5号窯灰色土出土遺物 (fig.8)

3号窯 灰色土



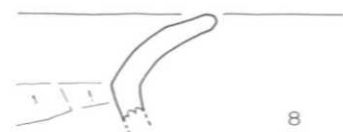
4号窯 煙道部淡茶色土



4号窯 淡茶色土



4号窯 灰茶色土



0 10cm

fig.7 神ノ前遺跡第2次調査 3号窯・4号窯出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

坏c (1・2) 1は口縁部が欠損する。残存高9.3cm、高台径は9.6cm。体部と底部の境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。高台は高く、端部下面はやや広い平坦面をなす。本書分類の坏-2Ⅲ-cア類。2は口径14.6cm、器高4.4cm、高台径7.0cm。体部と底部の境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。本書分類の坏-2Ⅲ-cエ。

神ノ前5号窯黄灰色土出土遺物 (fig. 8)

須恵器

蓋al (3・4) 3は口径15.0cm、器高2.55cm、天井径7.4cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを行う。4は口径16.0cm、器高2.9cm、天井径7.8cm。いずれもかえりは口縁端部よりわずかに下方へ

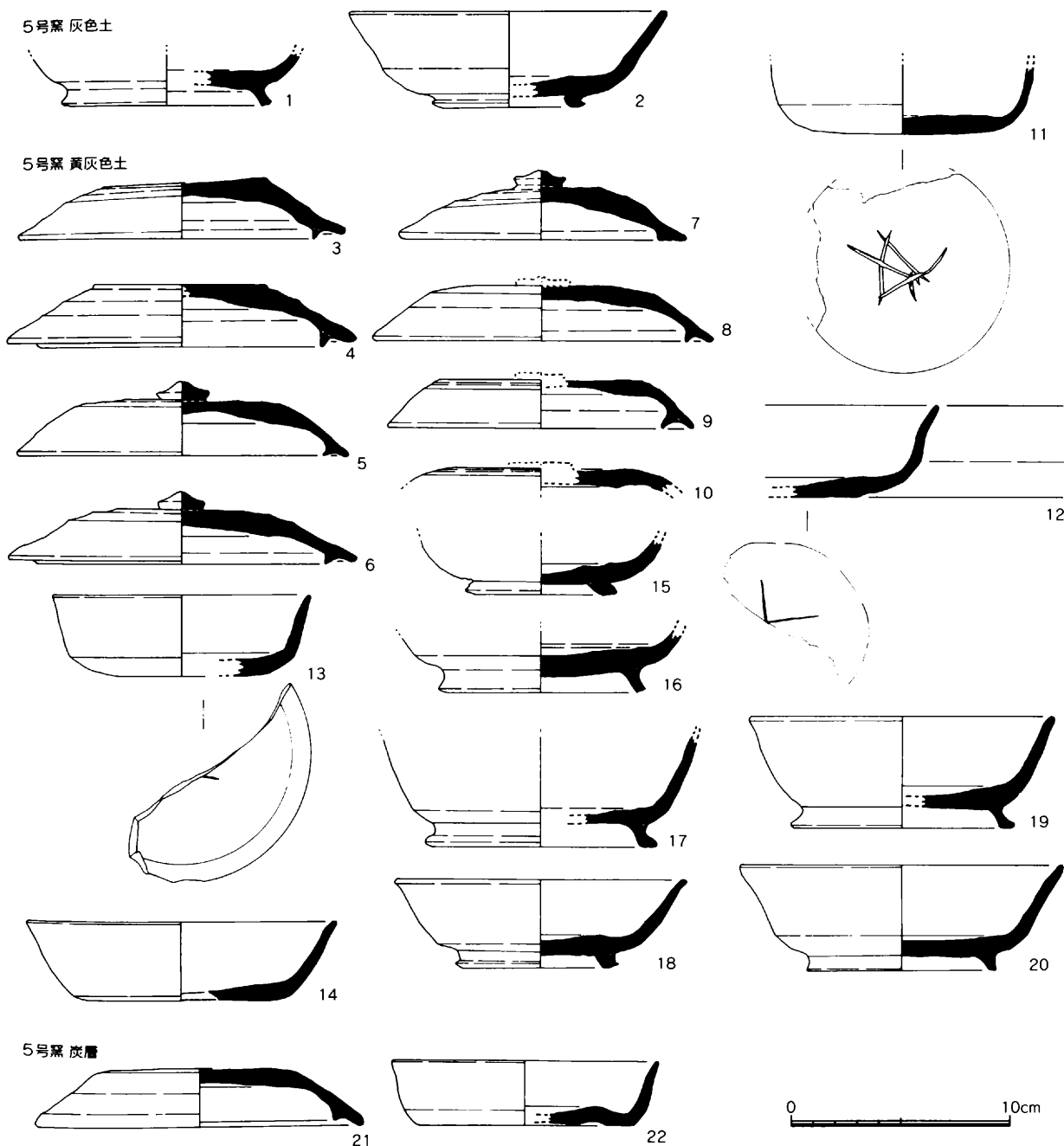


fig. 8 神ノ前遺跡第2次調査 5号窯出土遺物実測図 (1/3)

出る。外面の天井部と体部の境は稜をなし、天井径は小さい。本書分類の蓋－1Ⅱ－a類。

蓋c1（5～9） 5は口径15.2cm、器高3.4cm、天井径9.8cm、6は口径16.0cm、器高3.35cm、天井径10.2cmを測る。5・6ともかえりは口縁端部よりわずかに下方へ出る。外面の天井部と体部の境は稜をなし、天井径は小さい。つまみの形状はひし形。本書分類の蓋－1Ⅱ－c'類。7は口径13.2cm、器高3.2cm、天井径8.6cm。天井部外面全体に回転ヘラ削りを行い、かえりは口縁端部と同一面をなす。外面の天井部と体部の境は稜をし、天井径は小さい。つまみの形状はひし形。本書分類の蓋－1Ⅱ'－c'類。8は口径15.6cm、残存高2.5cm、天井径10.3cm。かえりは口縁端部と同一面をなす。外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井部外面全体に回転ヘラ削りを行う。つまみは欠損している。本書分類の蓋－1Ⅱ'－c類。9は口径14.0cm、残存高2.2cm、天井径10.8cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを行う。かえりは口縁端部と同一面をなし、天井径が広い。つまみは欠損している。本書分類の蓋－1Ⅱ''－c類。

蓋c（10） 口縁部とつまみが欠損し、残存高1.1cm、天井径11.0cmを測る。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを行う。

坏a（11～14） 11は口縁部が欠損し、残存高3.2cm、底径9.8cm。底部外面には焼成前に施したヘラ記号がある。12は歪みが大きく口径は不明で、残存高4.2cm。底部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。11・12とも体部上半は直立し、中位以下は丸みを有する。底部は平坦である。本書分類の坏－1Ⅱ'－a類。13は口径11.9cm、器高3.7cm、底径10.2cm。底部外面には焼成前に施したヘラ記号とみられる痕跡あり。14は口径14.2cm、器高3.6cm、底径10.0cm。焼成後に底部中央を穿孔する。置台か。13・14とも体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。本書分類の坏－2Ⅲ－a類。

坏c（15～20） 15は残存高2.55cm、高台径6.9cm。体部中位以下は丸みを有する。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。口縁部と体部上半を欠くため、体部の形状は定かではない。本書分類坏－1Ⅱ'－cエ類。16は残存高2.85cm、高台径9.4cm。17は残存高5.1cm、高台径10.6cm。口縁部が欠損しているため口径は不明。16・17は、いずれも体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。高台は高く、端部下面はやや広い平坦面をなす。本書分類の坏－2Ⅲ－cア類。18は口径13.4cm、器高4.05cm、高台径7.45cm、19は口径14.0cm、器高5.1cm、高台径10.2cmを測る。18・19は、いずれも体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。本書分類の坏－2Ⅲ－cエ類。20は口径14.8cm、器高4.85cm、高台径8.6cm。体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。高台は低く、端部をはね上げない。本書分類の坏－2Ⅲ－cオ類。

神ノ前5号窯炭層出土遺物（fig. 8）

須恵器

蓋a1（21） 口径15.0cm、器高2.7cm、天井径8.9cm。かえりは口縁端部よりも内側へ後退し、天井部と体部の境は不明瞭で丸みを有する。本書分類の蓋－1Ⅲ－a類。

坏a（22） 口径12.2cm、器高3.0cm、底径10.0cm。外面の体部と底部境は角ばり稜をつくる。本書分類の坏－3－a類。

神ノ前5号窯灰黄色土出土遺物（fig. 9）

須恵器

蓋a1（23） 口径13.2cm、器高2.6cm、天井径10.2cm。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号、板状圧痕あり。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施していると思われるが明確ではない。かえりは口縁端部と同一面をなす。外面の天井部と体部の境は稜をなし、天井径は広い。本書分類の蓋－1Ⅱ''－a類。

蓋c1 (24・25) 24は口径14.0cm、器高2.3cm、天井径10.3cmを測り、外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを行う。25は口径14.0cm、器高3.25cm、天井径10.0cmを測り、天井部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。24・25ともかえりは口縁端部と同一面をなす。外面の天井部と体部の境は稜をなす。つまみの形状はひし形。本書分類の蓋-1Ⅱ'-c類。

坏a (26・27) 26は口径12.2cm、器高4.0cm、底径7.6cm。底部外面に板状圧痕あり。27は口径13.0cm、器高3.6cm、底径8.6cm。いずれも体部上半は直立し、中位以下は丸みを有する。底部は平坦である。本書分類の坏-1Ⅱ'-a類。

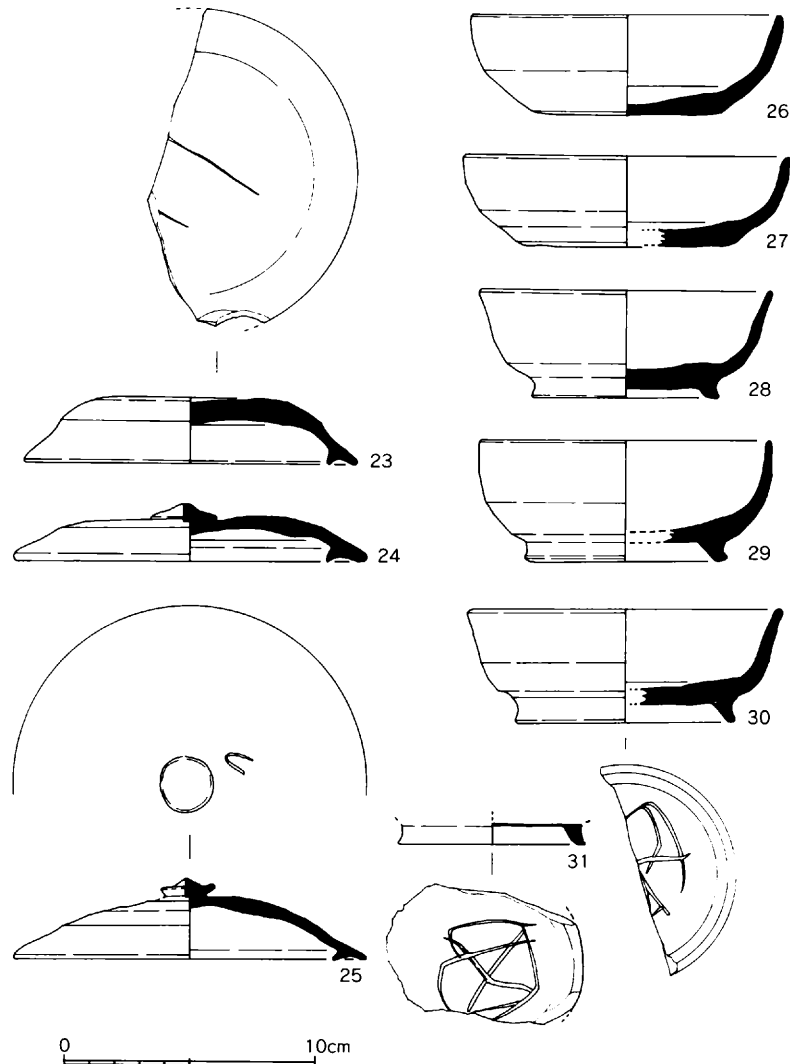


fig. 9 神ノ前遺跡第2次調査 5号窯灰黄色土出土遺物実測図 (1/3)

坏c (28～31) 28は口径11.6cm、器高4.3cm、高台径7.4cm。29は口径11.6cm、器高4.8cm、高台径7.9cmをそれぞれ測る。28・29は、いずれも体部上半は直立し、中位以下は丸みを有する。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。本書分類の坏-1Ⅱ'-cエ類。30は口径12.4cm、器高4.5cm、高台径8.7cm。体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。底部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。本書分類の坏-2Ⅲ-cエ類。31は底部の破片で、残存高0.7cm、高台径7.4cmを測る。底部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。高台は低く、端部をはね上げない。本書分類の坏-cオ類。

神ノ前5号窯黒色土（窯内）出土遺物 (fig.10)

須恵器

蓋c (32・33) いずれもつまみと天井部の一部が残存する破片で、内面が剥がれている。32は残存高0.9cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを行い、天井部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。33は残存高1.0cm。いずれもつまみの形状は断面凹形。本書分類の蓋-c×類。

坏a (34・35) 34は口径12.6cm、器高3.5cm、底径10.4cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを行い、底部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が

丸みを有する。本書分類の坏-2Ⅲ-a類。35は口径14.2cm、残存高3.6cm、底径8.9cm。底部の一部が欠損している。外面体部に沈線を有する。

坏c (36・37) 36は残存高3.6cm、高台径8.6cm。口縁部が欠損している。底部外面に焼成前に施したヘラ記号、板状圧痕がある。37は口径14.6cm、器高4.8cm、高台径10.2cm。底部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。いずれも体部上半は直立し、中位以下は丸みを有する。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。本書分類の坏-1Ⅱ'-cエ類。

神ノ前5号窯黒色土（灰原）出土遺物 (fig.10)

須恵器

小蓋a1 (38) 口径11.1cm、器高2.15cm、天井径7.4cm。かえりは口縁端部よりわずかに下方へ突出し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井径は広い。本書分類の小蓋-1Ⅱ"-a類。

蓋a1 (39) 口径12.1cm、器高2.7cm、天井径7.2cm。かえりは口縁端部よりも内側へ後退し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。本書分類の蓋-1Ⅲ-a類。

蓋c1 (40) 口径13.2cm、器高3.2cm、天井径6.9cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを行う。かえりは口縁端部と同一面をなし、外面の天井部と体部の境は稜をなす。つまみの形状は断面凹形。本書分類の蓋-1Ⅱ'-c×類。

蓋3 (41) 口縁部から体部の破片で、残存高1.95cm。体部外面に広い範囲で回転ヘラ削りを行い、口縁端部は小さいがしっかりした三角形を有する。本書分類の蓋-3イ類。

坏a (42) 底部付近の破片で、残存高1.2cm、底径8.7cm。底部中央を焼成前に穿孔する。置台とし

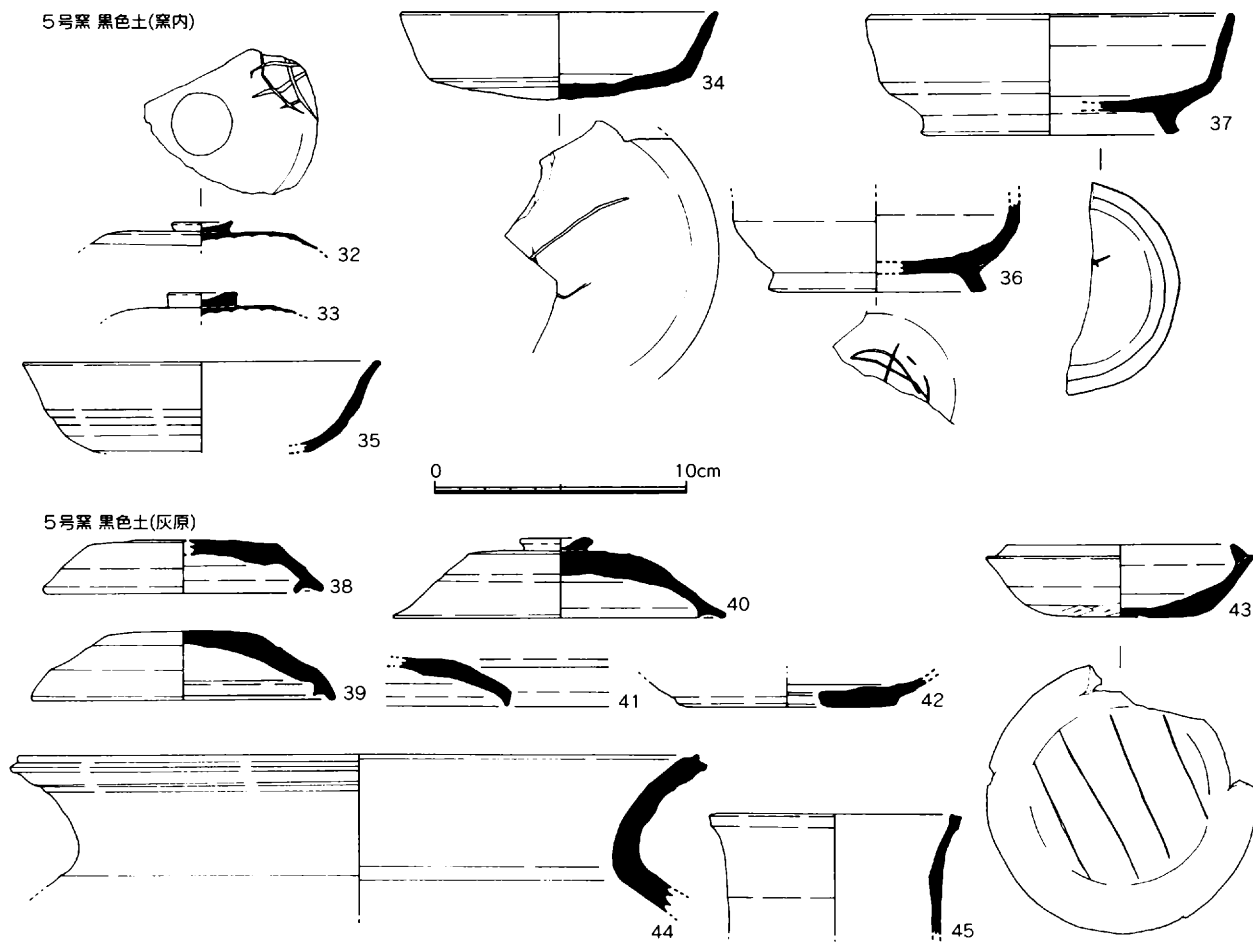


fig.10 神ノ前遺跡第2次調査 5号窯黒色土出土遺物実測図 (1/3)

て使用したものの
のか。

坏身(43)
口径10.6cm、器
高2.9cm、底径
7.4cm。底部外
面全体に手持ち
ヘラ削りを施
し、焼成前にヘ
ラ記号を刻む。

甕a(44) 口
径27.6cm、残存
高6.75cmを測る。
口縁端部の外側
が横に突出し、
粘土帯接合によ
る段がつく。

壺(45) 口
径10.0cm、残存
高4.8cmを測る。
内外面とも回転
ナデを施す。

谷出土遺物
神2SX005出
土遺物 (fig.11
~20)

神2SX005
灰黄色土出土
遺物 (fig.11)

瓦

平瓦(3)

残存長9.8cm、
残存幅9.8cm、
厚さ1.9cm。凸
面は縄目叩き
で、凹面は模
骨痕が残る。

神2SX005濃黄色土出土遺物 (fig.11)

瓦

平瓦(2) 残存長12.9cm、残存幅8.5cm、厚さ2.3cm。凸面は縄目叩き。

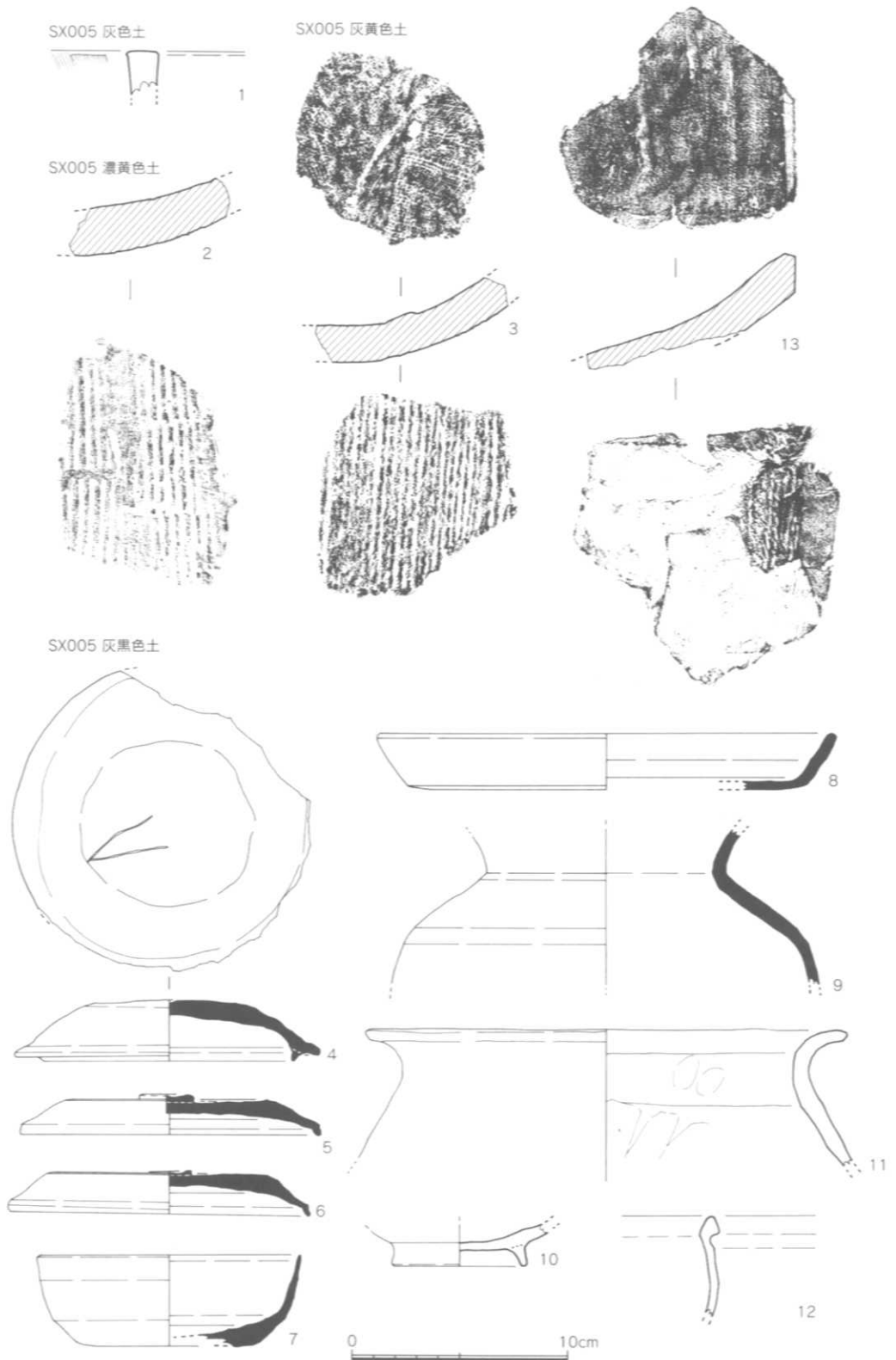


fig.11 神ノ前遺跡第2次調査 SX005出土遺物実測図 その1 (1/3)

神2SX005灰色土出土遺物 (fig.11)

瓦質土器

鉢(1) 口縁部の小破片で、残存高2.1cm。内面はハケによる調整、その他は回転ナデを施す。

神2SX005灰黒色土出土遺物 (fig.11)

須恵器

蓋a1(4) 口径14.2cm、器高2.8cm、天井径8.0cm。底部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。かえりは口縁端部よりわずかに下方へ出る。外面の天井部と体部の境は稜をなし、天井径は小さい。5号窯前付近で出土。本書分類の蓋-1Ⅱ-a類。

蓋c3(5・6) 5は口径14.0cm、器高1.9cm、天井径9.8cm。天井部全面に回転ヘラ削りを施す。5号窯前付近で出土。6は口径14.0cm、器高2.15cm、天井径10.2cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。調査区中央部出土。5・6とも口縁端部断面は大きくてしっかりした三角形で内面に稜がつく。つまみの形状は偏平なボタン状である。本書分類の蓋-3ア-c▽類。

坏a(7) 口径12.2cm、器高4.2cm、底径8.6cm。体部上半は直立し、中位以下は丸みを有する。底部は平坦である。本書分類の坏-1Ⅱ'-a類。

大皿a(8) 口径21.2cm、器高2.6cm、底径18.4cm。5号窯前付近で出土。

壺(9) 頸部から肩部が残存し、残存高7.1cmを測る。調査区中央部出土。

土師器

碗c(10) 底部の破片で、残存高1.9cm、高台径6.3cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。5号窯前付近で出土。

甕(11) 口縁部から体部が残存する破片で、口径22.2cm、残存高6.4cmを測る。内面頸部は指押え、内面胴部は縦方向の削りによる調整を施す。外面は摩滅しているため調整は不明。5号窯前付近で出土。

中国陶器

盤(12) 口縁部から体部が残存する破片で、残存高4.75cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、C群に属する。釉は暗緑色に発色し、光沢がある。盤Ⅱ類。調査区中央部出土。

瓦

平瓦(13) 残存高10.7cm、残存幅10.1cm、厚さ1.9cm。凸面は縄目叩きで、凹面は模骨痕が残る。

神2SX005黒褐色土出土遺物 (fig.12)

須恵器

蓋a1(14) 口径13.5cm、器高2.2cm、天井径8.8cm。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。かえりはやや大きく口縁端部よりも突出する。天井部は平坦で広い。本書分類の蓋-1Ⅰ'-a類。

蓋c1(15) 口径13.5cm、器高3.7cm、天井径6.7cm。外面の天井部から体部の一部にかけて回転ヘラ削りを施す。かえりは口縁端部と同一面をなし、外面の天井部と体部の境は稜をなす。つまみの形状はひし形。本書分類の蓋-1Ⅱ'-c類。

坏a(16) 口径13.5cm、器高3.8cm、底径9.8cmを測るが、歪みが大きいので法量は正確ではない。体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。外面の底部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。本書分類の坏-2Ⅲ-a類。

土師器

鉢×小壺(17) 底部から体部が残存し、残存高5.5cm、底径5.0cmを測る。内外面ともに指押え成形後、横ナデにより調整する。

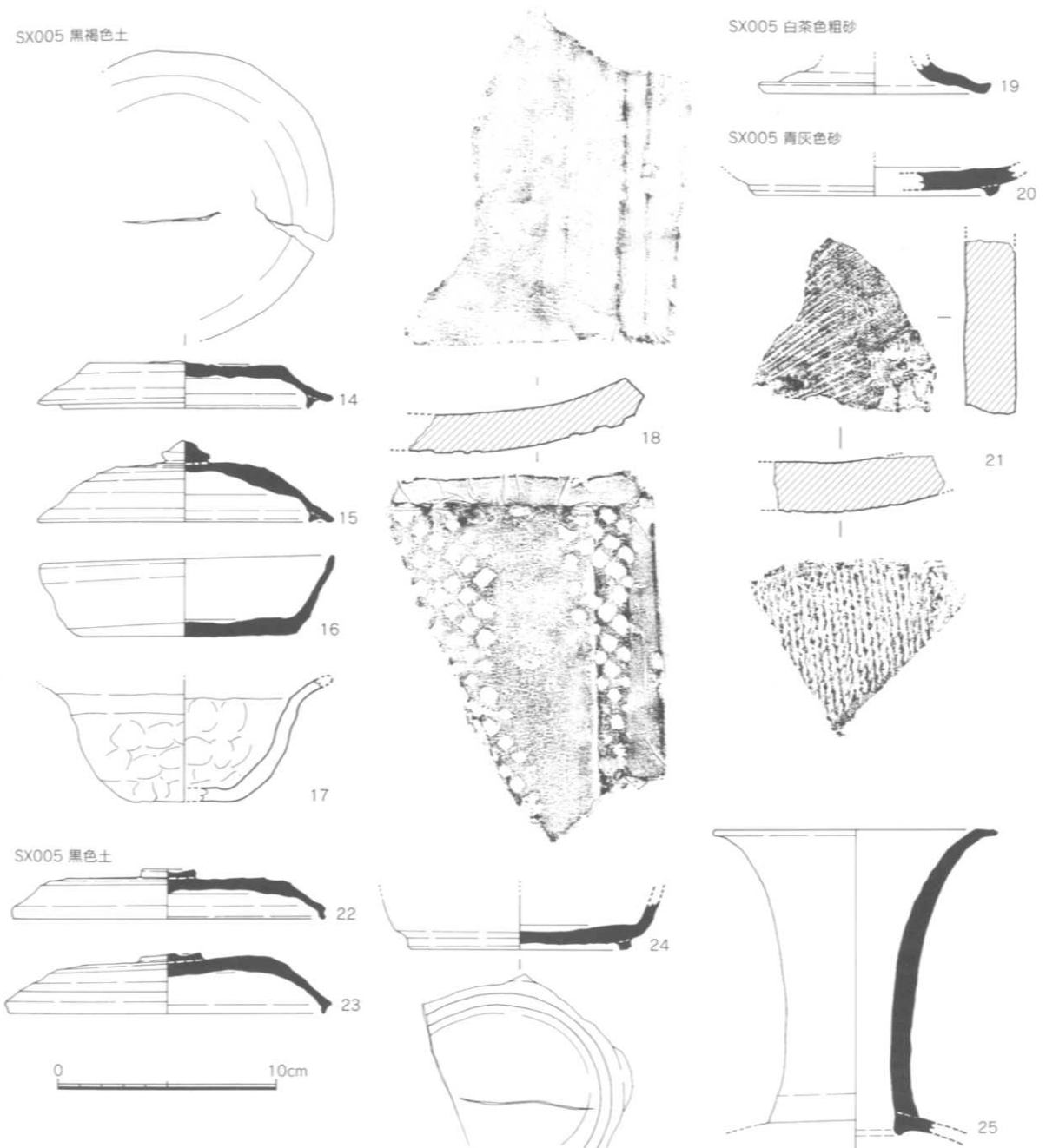


fig.12 神ノ前遺跡第2次調査 SX005出土遺物実測図 その2 (1/3)

瓦

平瓦 (18) 残存長15.3cm、残存幅10.9cm、厚さ1.8cmを測る。格子叩きで、凹面には約3cm幅の模骨痕が残る。小口はヘラ状の工具で面取りされる。

神2SX005白茶色粗砂出土遺物 (fig.12)

須恵器

高坏 (19) 脚部のみ残存し、残存高1.5cm、脚端部径10.6cmを測る。

神2SX005青灰色砂出土遺物 (fig.12)

須恵器

皿c×坏c (20) 底部のみ残存し、残存高1.5cm、高台径11.4cmを測る。

瓦

平瓦(21) 残存長8.3cm、残存幅9.3cm、厚さ2.35cmを測る。縄目叩きで、凹面には布目痕と糸切り痕が残る。

神2SX005黒色土出土遺物 (fig.12)

須恵器

蓋c3(22・23) 22は口径14.3cm、器高2.3cm、天井径11.4cmを測り、外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。23は口径14.4cm、器高2.8cm、天井径10.7cmを測り、天井部外面全面に回転ヘラ削りを施す。いずれも口縁端部断面は小さいがしっかりした三角形で、つまみの形状は偏平なボタン状である。本書分類の蓋-3イ-c▽類。

坏c(24) 口縁部が欠損している。残存高2.4cm、高台径10.2cm。底部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。外面の体部と底部の境は角ばって稜をつくり、高台は断面四角形である。本書分類の坏-3-cキ類。

壺b(25) 口縁部から頸部が残存し、口径12.9cm、残存高13.9cmを測る。

神2SX005フシヨク土出土遺物 (fig.13~16)

須恵器

坏蓋(26) 口径10.2cm、器高3.35cm、底径7.4cm。天井部外面を回転ヘラ削りし、焼成前にヘラ記号を施す。調査区中央部出土。

小蓋a1(27・28) 27は口径11.0cm、器高2.7cm、天井径7.0cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを行い、天井部中央を焼成前に穿孔する。かえりは大きく、口縁端部より下方に突出する。天井部は平坦で広い。本書分類の小蓋-1Ⅰ'-a類。調査区西部出土。28は口径12.0cm、器高3.0cm、天井径5.8cm。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。かえりは口縁端部より内側へ後退し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。調査区西部出土。本書分類の小蓋-1Ⅲ-a類。

小蓋1(29) 口径10.6cm、器高1.7cm、天井径7.45cm。つまみの有無は不明。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。かえりは口縁端部と同一面をなし、天井径が広い。調査区西部出土。本書分類の蓋-1Ⅱ"類。

蓋a1(30~38) 30は口径13.8cm、器高2.15cm、天井径8.0cm、31は口径14.6cm、器高1.95cm、天井径8.4cmを測る。30・31とも天井部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。かえりはやや大きく口縁端部よりも突出する。天井部は平坦で広い。調査区西部出土。本書分類の蓋-1Ⅰ'-a類。32は口径14.25cm、器高2.8cm、天井径7.9cmで、外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを行う。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。33は口径13.2cm、器高1.85cm、天井径6.1cmで、天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。天井径は極めて小さい印象を受ける。34は口径13.8cm、器高2.0cm、天井径6.1cm。天井径が極めて小さい印象を受ける。32~34はいずれも、かえりは口縁端部よりわずかに下方へ出る。外面の天井部と体部の境は稜をなし、天井径は小さい。調査区西部出土。本書分類の蓋-1Ⅱ-a類。35は口径14.4cm、器高2.35cm、天井径7.25cmで、天井部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。かえりは口縁端部と同一面をなし、外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井径は極めて小さい。調査区西部出土。本書分類の蓋-1Ⅱ'-a類。36は口径14.9cm、器高2.2cm、天井径11.35cm。天井部外面は一部をハケ状の工具で調整し、焼成前にヘラ記号を刻む。かえりは口縁端部と同一面をなし、天井径は広い。調査区中央部出土。本書分類の蓋-1Ⅱ"-a類。37は口径14.5cm、器高3.25cm、天井径10.0cm。かえりは口縁端部より内側へ後退し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。調査区中央部出土。本書分類の蓋-1Ⅲ-a類。38は口縁端部が欠損している。残存高1.85cm、天井径5.9cm。天井部外面に焼成前に施したヘラ記

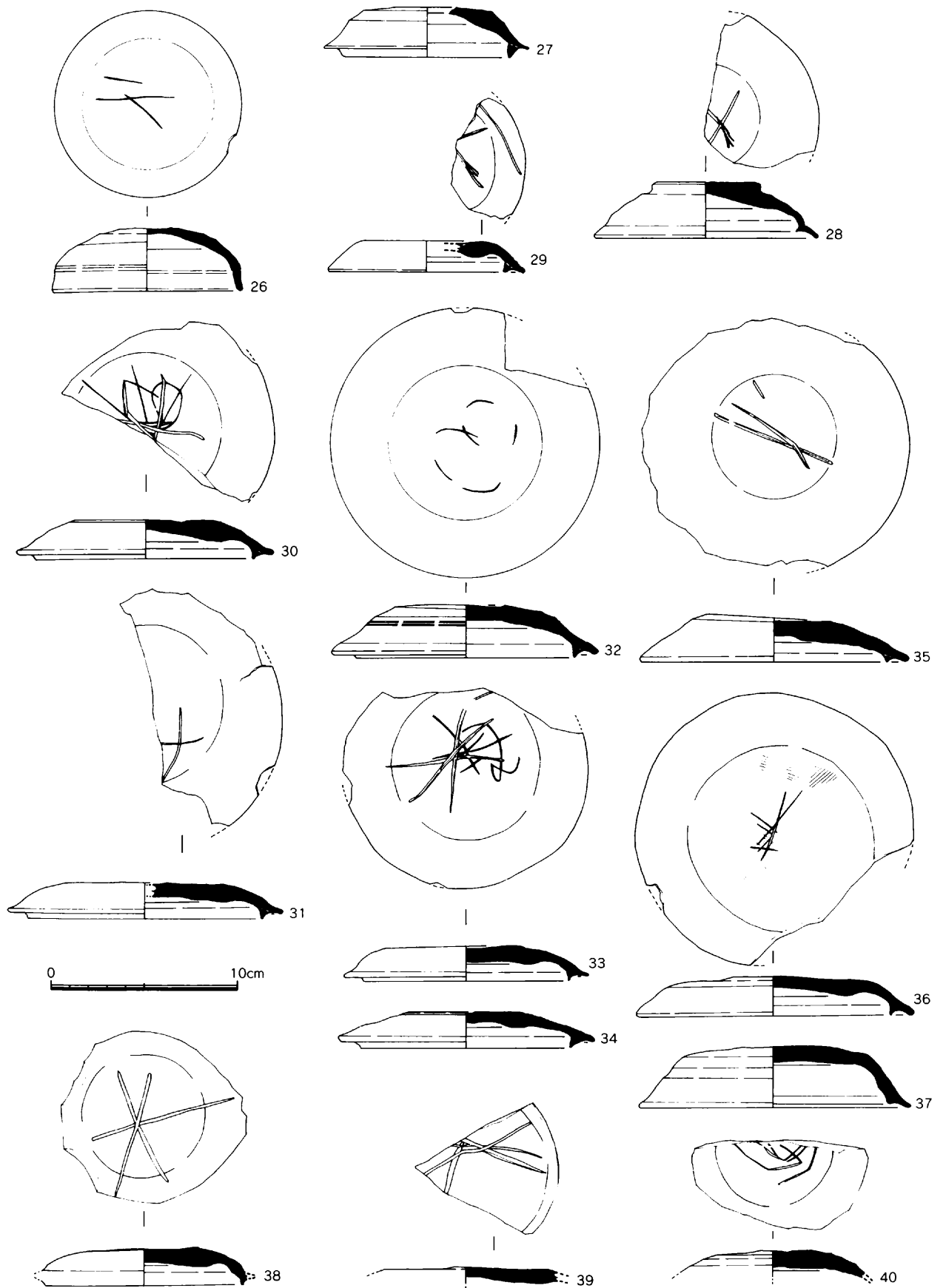


fig.13 神ノ前遺跡第2次調査 SX005フシヨク土出土遺物実測図 その1 (1/3)

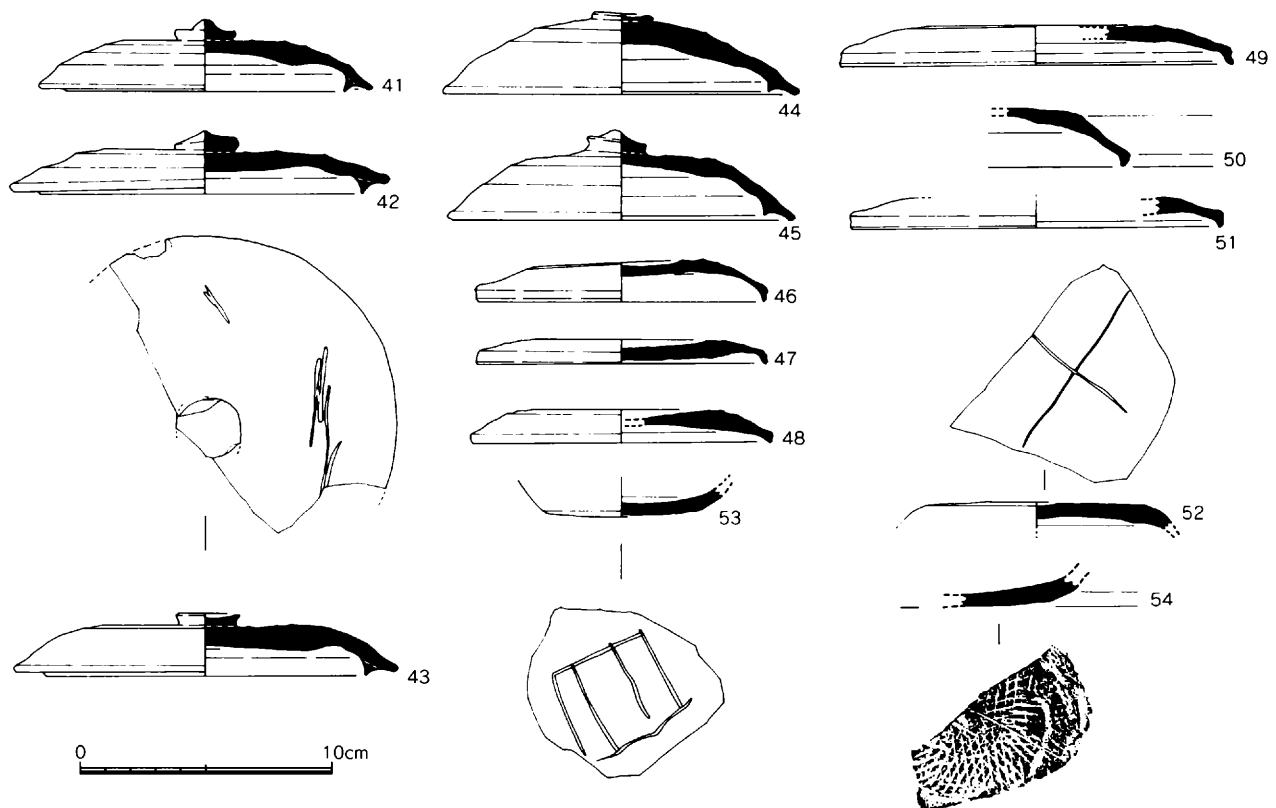


fig.14 神ノ前遺跡第2次調査 SX005フシヨク土出土遺物実測図 その2 (1/3)

号がある。調査区西部出土。

蓋a (39・40) いずれも天井部の一部が残存する破片で、39は残存高0.9cm、天井径6.8cm。40は残存高1.45cm、天井径6.2cmで、外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。いずれも天井部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。調査区西部出土。

蓋c1 (41～45) 41は口径13.2cm、器高2.85cm、天井径7.9cm。外面の天井部から体部の広い範囲に回転ヘラ削りを施す。調査区西部出土。42は口径15.05cm、器高2.5cm、天井径9.8cm。天井部外面全面に回転ヘラ削りを施す。調査区中央部出土。41・42は、いずれもかえりは口縁端部よりわずかに下方へ突出し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井径は小さく、つまみの形状はひし形である。本書分類の蓋-1Ⅱ-c'類。43は口径15.2cm、器高2.5cm、天井径9.6cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。体部外面はヘラ記号の可能性もある傷がみられる。かえりは口縁端部よりわずかに下方へ突出し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井径は小さく、つまみは断面凹形である。調査区西部出土。本書分類の蓋-1Ⅱ-c×類。44は口径14.2cm、器高3.3cm、天井径8.2cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。かえりは口縁端部と同一面をなし、外面の天井部と体部の境は稜をなす。つまみの形状は扁平な擬宝珠状である。調査区中央部出土。本書分類の蓋-1Ⅱ'-c"類。45は口径13.8cm、器高3.6cm、天井径7.2cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。かえりは口縁端部より内側へ後退し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。つまみの形状はひし形。調査区西部出土。本書分類の蓋-1Ⅲ-a類。

小蓋a3 (46・47) 46は口径11.6cm、器高1.55cm、天井径7.6cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施し、口縁部から天井部の一部に自然釉がかかる。口縁端部の断面は大きくてしっかりした三角形で、内面に稜がつく。調査区西部出土。本書分類の小蓋-3ア-a類。47は口径11.6cm、器高0.95cm、

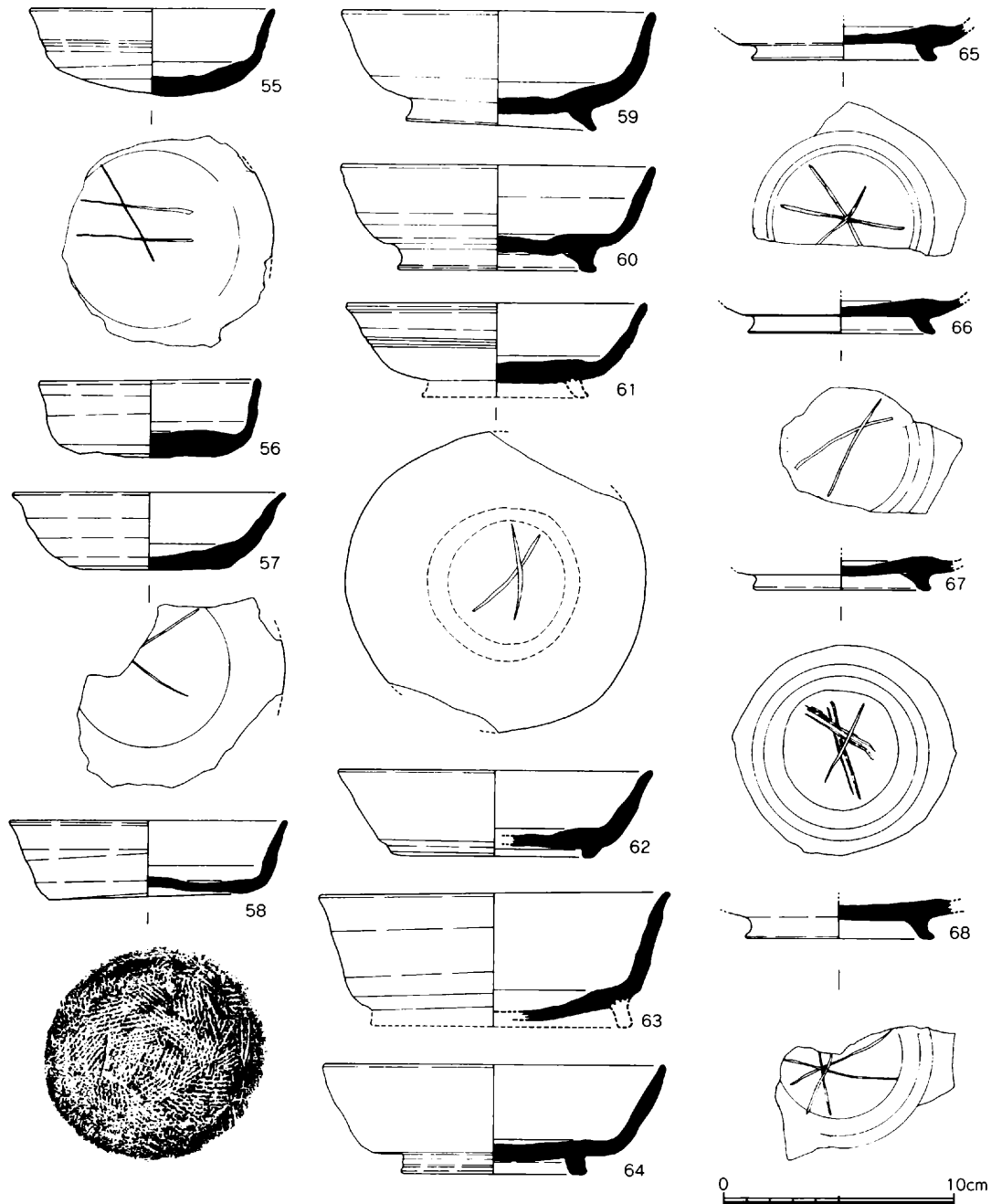


fig.15 神ノ前遺跡第2次調査 SX005フシヨク土出土遺物実測図 その3 (1/3)

天井径7.2cm。口縁端部の断面は小さいがしっかりした三角形である。調査区西部出土。本書分類の小蓋-3イ-a類。

小蓋3 (48) 口径12.0cm、残存高1.3cm、天井径8.0cm。つまみの有無は不明。口縁端部の断面は小さいがしっかりした三角形である。調査区中央部出土。小蓋-3イ類。

蓋3 (49~51) いずれもつまみの有無は不明。49は口径15.6cm、残存高1.55cm、天井径10.4cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。調査区中央部出土。50は残存高2.35cmを測る。49・50とも口縁端部の断面は大きくてしっかりした三角形で、内面に稜がつく。本書分類の蓋-3ア類。51は天井部が欠損し、口径14.8cm、残存高1.2cmを測る。口縁端部の断面は小さいがしっかりした三角形である。調査区西部出土。本書分類の蓋-3イ類。

蓋a×坏a (52) 残存高1.05cm、天井径(底径)8.7cmを測る。外面に焼成前に施したヘラ記号あり。調査区西部出土。

小坏a×小蓋a (53) 残存高1.15cm、底径(天井径)6.25cmを測る。外面に焼成前に施したヘラ記号あり。調査区西部出土。

小坏a (55・56) 55は口径10.6cm、器高3.7cm、底径7.05cm。体部上半部は直立し、中位以下は丸い。中位に2条の沈線を有す。外面の底部と体部の境に回転ヘラ削りを施し、底部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。調査区中央部出土。本書分類の小坏ー1Ⅱーa類。56は口径9.6cm、器高3.3cm、底径6.3cm。体部上半部は直立し、中位以下は丸い。外面の底部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。底部は平坦である。調査区中央部出土。本書分類の小坏ー1Ⅱ'ーa類。

坏a (54・57・58) 54は底部の一部が残存する破片で、残存高1.2cmを測る。底部外面をハケ目により調整し、焼成前にヘラ記号を刻む。57は口径11.8cm、器高3.3cm、底径7.0cm。体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。底部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。調査区西部出土。本書分類の坏ー2Ⅲーa類。58は口径12.0cm、器高3.3cm、底径9.5cm。外面の体部と底部境は角ばり稜をつくる。底部外面全体をハケ目調整する。調査区中央部出土。本書分類の坏ー3ーa類。

坏c (59～68) 59は口径13.6cm、器高5.0cm、高台径8.2cm。体部上半部は直立し、中位以下は丸い。高台は低く、端部をはね上げない。調査区中央部出土。本書分類の坏ー1Ⅱ'ーcオ類。60は口径13.6cm、器高4.6cm、高台径8.6cm。体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。外面の体部と底部の境に回転ヘラ削りを施す。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。調査区中央部出土。本書分類の坏ー2Ⅲーcエ類。61は口径13.0cm、残存高3.35cmを測る。高台は欠損している。体部と底部境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。底部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。調査区中央部出土。本書分類の坏ー2Ⅲーc類。62は口径11.6cm、器高3.8cm、高台径8.65cm。外面の体部と底部境は角ばり稜をつくり、高台の形状は断面四角形である。調査区西部出土。本書分類の坏ー3ーcキ類。63は口径15.2cm、残存高5.45cm、底径12.4cmを測る。高台が欠損しているため高台径は不明。外面の体部と底部境は角ばり稜をつくる。本書分類の坏ー3ーc類。64は口径14.8cm、器高4.7cm、高台径8.0cm。外面の底部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。調査区西部出土。本書分類の坏ーcエ類。65～68は高台部から体部下位が残存する破片で、残存高1.45～1.65cm、高台径7.6～8.1cmを測る。65・66は外面の底部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。底部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。調査区西部出土。本書分類の坏ーcエ類。67・68は底部外面に焼成前に施したヘラ記号がある。高台は低く、端部をはね上げない。調査区西部出土。本書分類の坏ーcオ類。

高坏 (69～71) 69は坏部のみ残存し、口径16.4cm、残存高3.7cmを測る。坏部底部外面に回転ヘラ削りを施す。調査区中央部出土。70は口縁部が欠損し、残存高4.5cm、脚端部径8.6cmを測る。坏部体部外面に沈線が一条廻り、坏部底部外面は回転ヘラ削りとみられる調整が確認される。調査区中央部出土。71は脚部のみ残存し、残存高5.0cm、脚端部径11.6cmを測る。調査区西部出土。

高坏×大坏c (72) 脚(高台)接合部付近の破片である。残存高2.25cm。調査区西部出土。

甕a (73) 口径21.5cm、残存高8.1cmを測る。体部外面は平行叩き、内面は叩き後ナデにより調整している。調査区西部出土。

甕×壺 (74) 体部下位から底部が残存し、残存高5.85cm、底径9.4cmを測る。体部外面は叩き、体部内面は工具による不定方向のナデを行う。調査区西部出土。

壺b (75・76) いずれも頸部のみ残存する。75は口縁部が欠損し、残存高13.4cm。頸部中位外面に

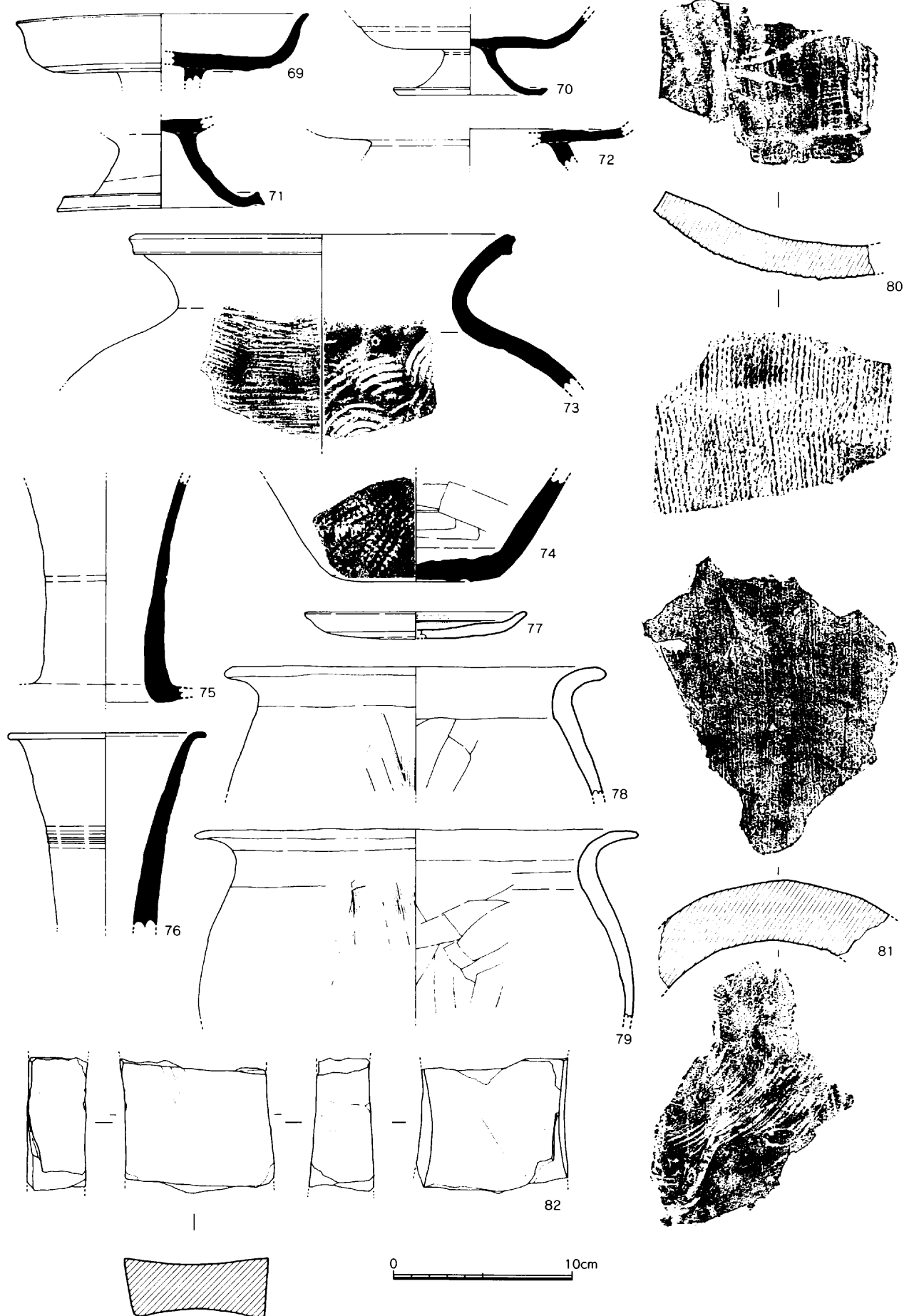


fig.16 神ノ前遺跡第2次調査 SX005フシヨク土出土遺物実測図 その4 (1/3)

沈線が一条廻り、内外面ともに回転ナデによる調整を行う。調査区中央部出土。76は口径11.2cm、残存高10.7cmを測る。頸部中位外面に数本の沈線が廻り、内外面ともに回転ナデによる調整を行う。調査区西部出土。

土師器

Ⅲa (77) 口径12.4cm、器高1.55cm、底径10.0cm。内面にミガキaを施し、内面の口縁部と底部の境に沈線を有する。底部外面は回転ヘラケズリを行う。調査区中央部出土。

甕a (78・79) いずれも口縁部から体部が残存する。78は口径21.2cm、残存高7.2cm。体部内面をヘラ削りし、外面に縦方向のハケ目を施す。胎土のきめは粗く、1～2mmの砂粒を含む。内外面ともに暗茶色を呈す。調査区西部出土。79は口径24.6cm、残存高10.35cm。体部内面をヘラ削りし、外面を縦方向のハケ後ナデ調整する。胎土のきめは粗く、大粒の砂粒を含む。内外面ともに明茶色を呈す。調査区西部出土。

瓦

平瓦 (80) 残存長9.4cm、残存幅13.4cm、厚さ2.1cm。縄目叩き。凹面は布目痕が残り、長軸方向へヘラ削りを施す。調査区西部出土。

丸瓦 (81) 残存長15.2cm、残存幅10.3cm、厚さ3.3cm。凸面は長軸方向のナデ。凹面は布目痕が残り、一部にナデ調整を施す。調査区西部出土。

石製品

砥石 (82) 残存長6.8cm、幅8.2cm、厚さ3.55cm。4面とも擦痕が残る。調査区西部出土。

神2SX005黒灰褐色土出土遺物 (fig.17～19)

須恵器

坏蓋 (83) 口径10.9cm、器高2.9cm、天井径10.1cm。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。

小蓋a1 (84～86) 84は口径9.7cm、器高1.9cm、天井径6.3cm、85は口径11.0cm、器高2.0cm、天井径7.1cmを測る。天井部外面に板状圧痕とみられる痕跡あり。84・85は、いずれもかえりはやや大きく口縁端部よりも突出する。天井部は平坦で広い。本書分類の小蓋－1Ⅰ'－a類。86は口径10.5cm。器高2.4cm、天井径6.2cm。かえりは口縁端部よりわずかに下方へ出る。外面の天井部と体部の境は稜をなし、天井径は小さい。本書分類の小蓋－1Ⅱ－a類。

小蓋1 (87・88) いずれもつまみの有無は不明。87は口径10.9cm、残存高2.35cm、天井径6.5cm。かえりは口縁端部と同一面をなし、外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。本書分類の小蓋－1Ⅱ'類。88は口径10.9cm、残存高1.8cm、天井径6.7cm。かえりは口縁端部と同一面をなし、天井径が広い。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。本書分類の小蓋－1Ⅱ''類。

小蓋a3 (89) 口径8.6cm、器高2.0cm、天井径6.3cm。口縁端部断面の形状は大きくてしっかりした三角形で内面に稜がつく。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。本書分類の小蓋－3ア－a類。

蓋a1 (90～95) 90は口径13.3cm、器高1.4cm、天井径8.2cm。91は口径13.6cm、器高2.15cm、天井径9.0cm。天井部外面に板状圧痕あり。90・91は、いずれもかえりはやや大きく口縁端部よりも突出する。天井部は平坦で広い。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。本書分類の蓋－1Ⅰ'－a類。92は口径12.6cm、器高2.9cm、天井径8.1cm。かえりは口縁端部と同一面をなし、天井径が広い。本書分類の蓋－1Ⅱ'－a類。93は口径13.2cm、器高3.55cm、天井径7.9cm。天井部外面に板状圧痕がある。94は口径14.4cm、器高3.15cm、天井径8.6cm。93・94は、いずれもかえりは口縁端部よりも内側へ後退し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。本書分類の蓋－1Ⅲ－a

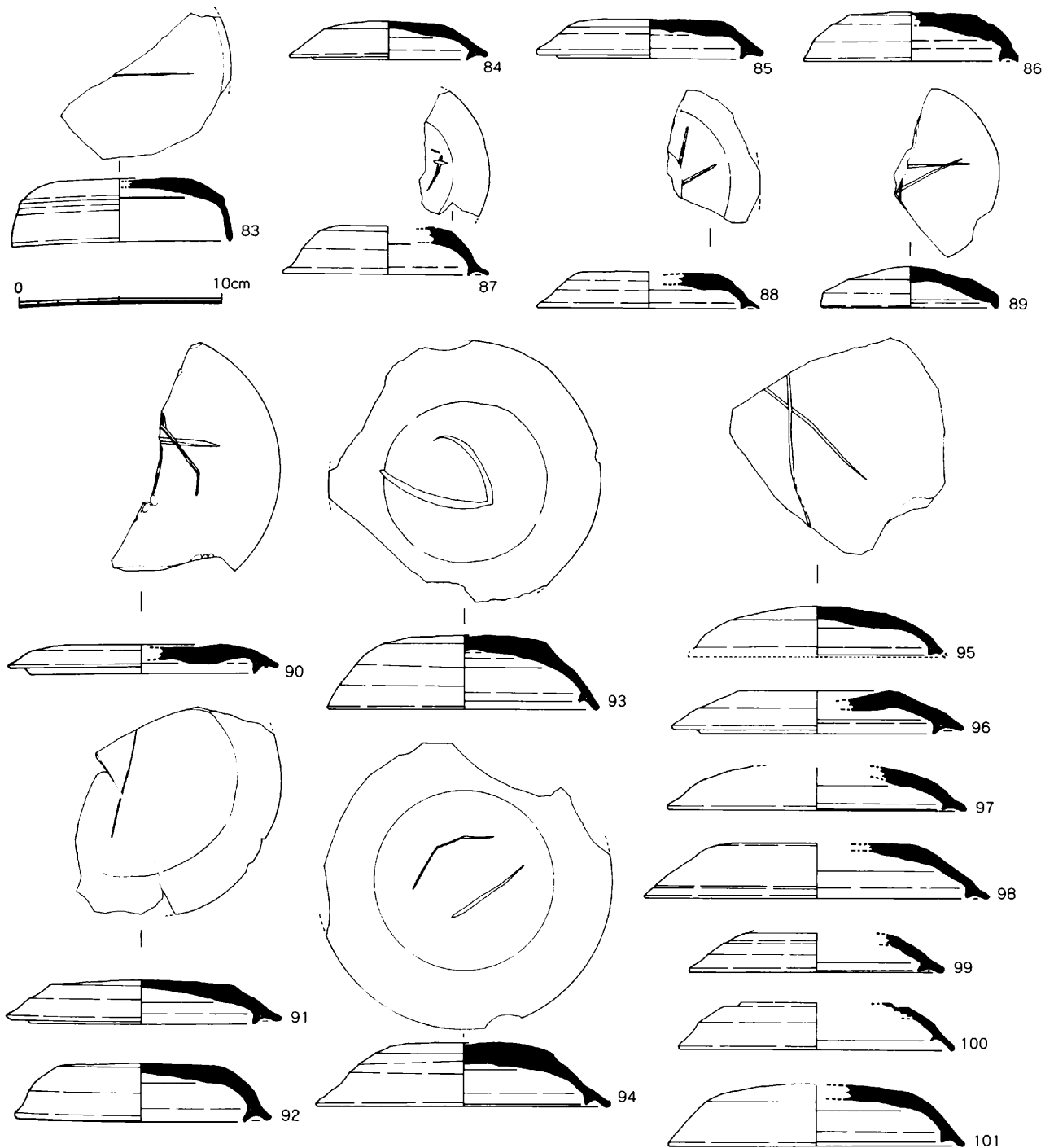


fig.17 神ノ前遺跡第2次調査 SX005黒灰褐色土出土遺物実測図 その1 (1/3)

類。95は残存高2.35cm、天井径8.3cm。口縁端部は欠損している。天井部外面に板状圧痕、焼成前に施したヘラ記号あり。

蓋 1 (96~101) いずれもつまみの有無は不明。96は口径14.2cm、残存高2.1cm、天井径7.0cm。かえりは口縁端部よりわずかに下方へ出る。天井部と体部の境は稜をなし、天井径は小さい。本書分類の蓋-1Ⅱ類。97は口径14.6cm、残存高2.1cm、天井径11.8cm、98は口径16.8cm、残存高2.55cm、天井径9.8cmを測る。96・97は、いずれもかえりは口縁端部と同一面をなす。外面の天井部と体部の境は稜をなす。本書分類の蓋-1Ⅱ'類。99~101は口径12.4~14.4cm、残存高1.9~3.0cm、天井径8.5~11.4cmを測

り、いずれもかえりは口縁端部よりも内側へ後退する。99・100は外面の天井部と体部の境に稜をなし、101は天井部と体部の境が不明瞭で丸みをもつ。99～101は本書分類の蓋－1Ⅲ類。

蓋c1 (102～108) 102は口径13.8cm、残存高2.2cm、天井径8.8cmを測る。つまみは欠損している。かえりはやや大きく、口縁端部よりも下方に突出する。天井部は平坦で広い。本書分類の蓋－1Ⅰ'－c類。103～105は口径14.2～15.8cm、器高2.05～2.8cm、天井径6.1～10.5cmを測る。いずれもかえりは口縁端部よりわずかに突出し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井径は小さく、つまみの形状は偏平な擬宝珠状である。本書分類の蓋－1Ⅱ－c"類。103・104は外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施し、105は天井部外面全体に回転ヘラ削りを施す。106は口径16.0cm、残存高2.1cm、天井径10.7cm。つまみは欠損している。外面の天井部から体部外面の広い範囲に回転ヘラ削りを施し、天井部外面に焼成前にヘラ記号を施す。107は口径13.8cm、残存高2.35cm、天井径9.4cm。つまみは欠損している。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施し、天井部外面に板状圧痕とみられる痕跡あり。106・107は、いずれもかえりは口縁端部よりわずかに突出し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。本書分類の蓋－1Ⅱ－c類。108は口径14.1cm、器高3.2cm、天井径9.7cm。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施し、天井部外面には焼成前にヘラ記号を施す。かえりは口縁端部と同一面をなし、外面の天井部と体部の境は稜をなす。つまみの形状はひし形である。焼成が甘いためかえりの先端が磨耗しているとも考えられ、かえりが下方へ突出するタイプの可能性もある。本書分類の蓋－1Ⅱ'－c'類。

小坏a (109～111) 109は口径10.2cm、器高3.0cm、底径7.6cm。体部上半は開き、低部は丸く突出ぎみである。本書分類の小坏－1Ⅰ－a類。110は口径9.4cm、器高2.95cm、底径5.5cm。体部上半部は直立し、中位以下は丸い。体部外面中位に沈線を有する。本書分類の小坏－1Ⅱ－a類。111は口径10.4cm、器高3.0cm、底径7.5cm。外面の底部と体部の境に回転ヘラ削りを施し、体部と底部の境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。本書分類の小坏－2Ⅲ－a類。

坏a (112～119) 112～117は口径11.6～14.4cm、器高3.0～4.2cm、底径7.0～10.8cmを測る。いずれも体部と底部の境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。本書分類の坏－2Ⅲ－a類。112～114は外面の底部と体部の境に回転ヘラ削りを施し、底部外面は焼成前にヘラ記号を刻む。113は焼成前に底部外面、および体部外面にヘラ記号を7ヶ所施す。117は底部外面に板状圧痕あり。118は口径11.4cm、器高3.3～3.4cm、底径8.5cm。底部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。119は口径11.8cm、器高2.25cm、底径9.2cm。歪みが大きく口径は不正確である。底部中央を焼成前に穿孔し、外面にヘラ記号とみられる痕跡がある。118・119ともに外面の体部と底部境は角ばり稜をつくる。本書分類の坏－3－a類。

小坏c (120) 口径10.2cm、器高4.1cm、高台径6.6cm。体部と底部境は角ばり稜をつくる。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。本書分類の小坏－3－cエ類。

坏c (121～126) 121は口縁部が欠損し、残存高3.0cm、高台径8.0cmを測る。外面の底部と体部の境に回転ヘラ記号を施す。122は口縁部が欠損し、残存高1.65cm、高台径8.4cmを測る。外面の底部と体部の境に回転ヘラ記号を施す。底部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。123は口径13.4cm、器高4.55cm、高台径9.0cm。124は口径14.2cm、器高4.65cm、高台径9.0cm。体部外面下位に沈線が一条廻り、高台畳付に焼成前についた傷と思われる痕跡がある。125は口縁部が欠損し、残存高2.7cm、高台径10.0cm。121～125は、体部と底部の境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。本書分類の坏－2Ⅲ－cエ類。126は高台のみが残存する破片で、残存高1.9cm、高台径9.8cmを測る。高台は高く、端部下面はやや広い平坦面をなす。本書分類の坏－cア類。

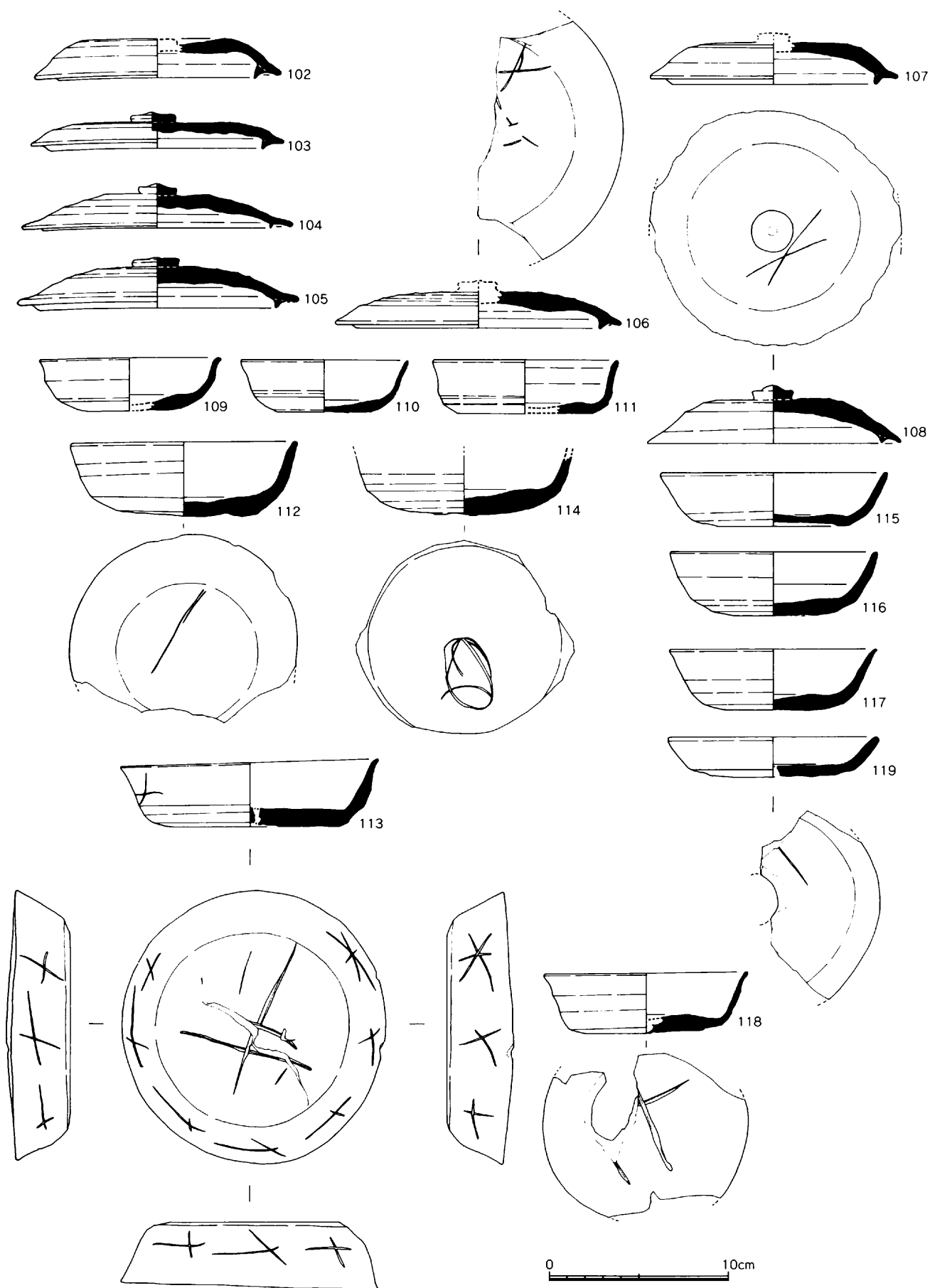


fig.18 神ノ前遺跡第2次調査 SX005黒灰褐色土出土遺物実測図 その2 (1/3)

坏（127・128） いずれも高台の有無は不明。127は口径11.2cm、残存高3.1cm、底径9.8cm。体部と底部の境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。本書分類の坏-2Ⅲ類。128は口径11.8cm、残存高3.1～3.8cm、底径8.7cm。底部は焼成時に破裂して破損したようである。外面体部下位に焼成前に施したヘラ記号とみられる痕跡あり。外面の体部と底部境は角ばり稜をつくる。本書分類の坏-3類。

高坏（129） 脚部のみ残存し、残存高2.1cm、脚端部径9.7cmを測る。

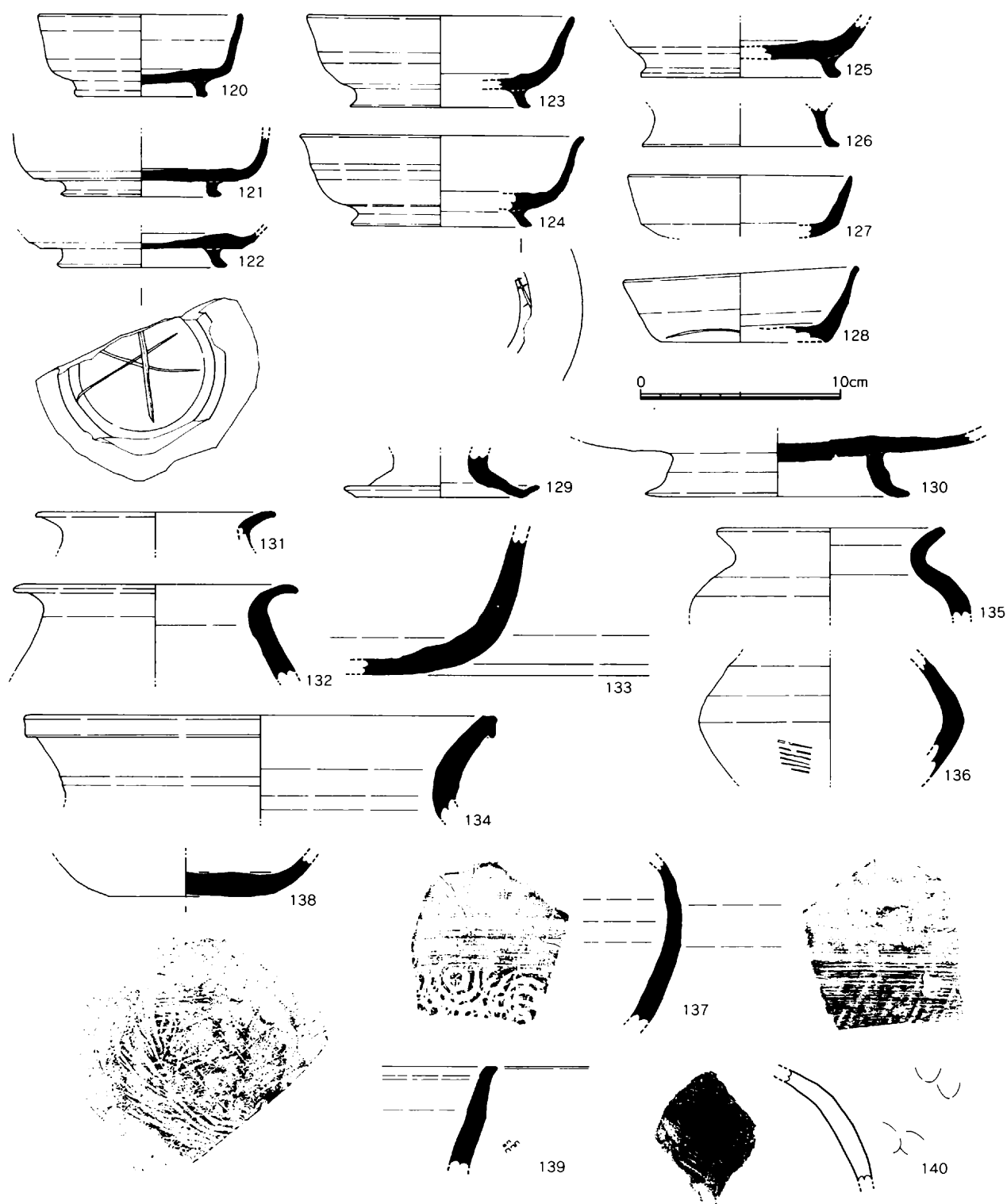


fig.19 神ノ前遺跡第2次調査 SX005黒灰褐色土出土遺物実測図 その3 (1/3)

高坏×大皿c (130) 底部から脚部(高台)のみ残存し、残存高3.15cm、脚端部径(高台径)13.2cmを測る。底部外面に板状圧痕が残る。

小甕 (131・132) 131は口縁部から頸部のみ残存し、口径12.0cm、残存高1.9cmを測る。132は口径14.2cm、残存高4.7cm。体部内面は叩き後ナデにより調整。外面は風化しているが叩き調整とみられる。

甕 (133) 底部付近の破片で、内外面とも風化しているが、外面は叩き調整とみられる。

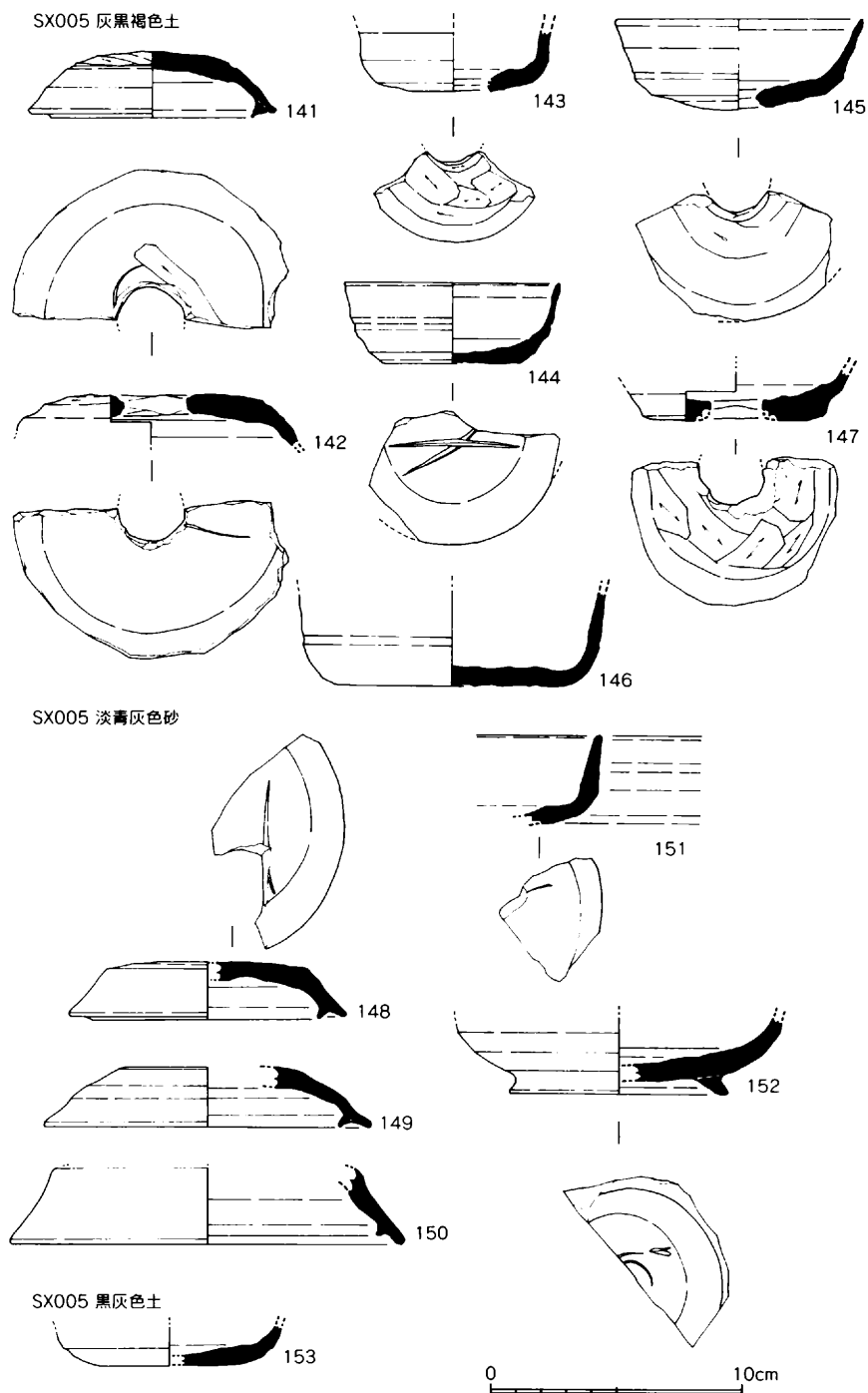


fig.20 神ノ前遺跡第2次調査 SX005出土遺物実測図 その3 (1/3)

甕a(134) 口縁部から頸部が残存し、口径23.6cmを測る。

小壺(135・136) 135は口縁部から体部が残存し、口径11.4cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整を行う。136は体部中位のみが残存し、最大径13.2cmを測る。外面に叩き具が当たった痕跡が残る。

壺(137) 体部中位のみが残存する。外面に平行叩き、内面には当て具痕を施し、その後内外面上半部に回転ナデを施す。

甕×壺(138) 底部のみ残存し、底径8.2cm。底部外面はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。底部外面に工具によるナデの痕跡がみられる。

鉢(139) 口縁部の破片で、残存高5.1cmを測る。外面には叩き痕あり。

製塩土器

煎煎土器(140) 残存高5.1cm。内面は叩きを施し、外面は風化しているが指頭痕、叩き痕がみられる。

神2SX005灰黒褐色土出土遺物 (fig.20)

須恵器

小蓋a1(141) 口径9.8cm、器高2.6cm、天井径6.8cm。かえりは口縁端部よりわずかに突出し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井径は小さい。天井部外面は手持ちヘラ削りし、外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。本書分類の小蓋-1Ⅱ-a類。

蓋(142) 天井部のみ残存し、残存高2.1cm、天井径7.8cmを測る。天井部外面に回転ヘラ削りを施す。天井部中央を焼成前に手持ちヘラ削りにより穿孔する。内外面に焼成前にヘラ記号を刻む。置台か。

小坏a(143~145) 143は口縁部が欠損し、残存高2.4cm、底径6.2cmを測る。外面の底部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。底部中央を焼成前にヘラ切りにより穿孔し、外面は手持ちヘラ削り後ナデ調整する。置台か。144は口径8.5cm、器高3.2cm、底径5.4cm。底部外面に焼成前に施したヘラ記号あり。145は口径9.8cm、器高3.6cm、底径7.0cm。底部中央を焼成前に穿孔し、穿孔部を面取りするための手持ちヘラ削りを行う。置台か。143~145はいずれも体部上半部は直立し、中位以下は丸い。外面体部中位に沈線を有する。本書分類の小坏-1Ⅱ-a類。

坏a(146) 口縁が欠損する破片で、残存高3.8cm、底径9.0cmを測る。外面体部中位に沈線が一条廻る。体部と底部の境が角に近いが不明瞭で、体部下位が丸みを有する。本書分類の坏-2Ⅲ-a類。

坏a×蓋(147) 底部(天井部)のみ残存し、残存高2.0cm、底径(天井径)7.3cm。底部(天井部)外面は手持ちヘラ削り後、不定方向のナデにより調整する。底部中央を焼成前にヘラ削りにより穿孔する。置台か。

神2SX005淡青灰色砂出土遺物 (fig.20)

須恵器

小蓋a1(148) 口径11.0cm、器高2.25cm、天井径8.2cm。天井部外面はヘラ切り未調整で、焼成前に施したヘラ記号とみられる痕跡がある。かえりは口縁端部と同一面をなし、天井部径が広い。本書分類の小蓋-1Ⅱ"-a類。

蓋1(149・150) いずれもつまみの有無は不明。149は口径13.0cm、残存高2.4cm。かえりは口縁端部よりわずかに突出し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。天井径は小さい。本書分類の蓋-1Ⅱ類。150は口径15.6cm、残存高3.0cmを測る。かえりは口縁端部よりも内側へ後退し、外面の天井部と体部の境は稜をなす。本書分類の蓋-1Ⅲ類。

坏a(151) 残存高3.5cm。底部外面に回転ヘラ削りが観察されるが範囲は不明。底部外面は焼成前にヘラ記号を施し、板状圧痕とみられる痕跡がある。体部上半部は直立し、中位以下は丸い。外面体部中位に沈線を有し、底部は平坦である。本書分類の坏-1Ⅱ-a類。

坏c(152) 口縁部が欠損し、残存高3.0cm、高台径8.7cmを測る。外面の底部と体部の境に回転ヘラ

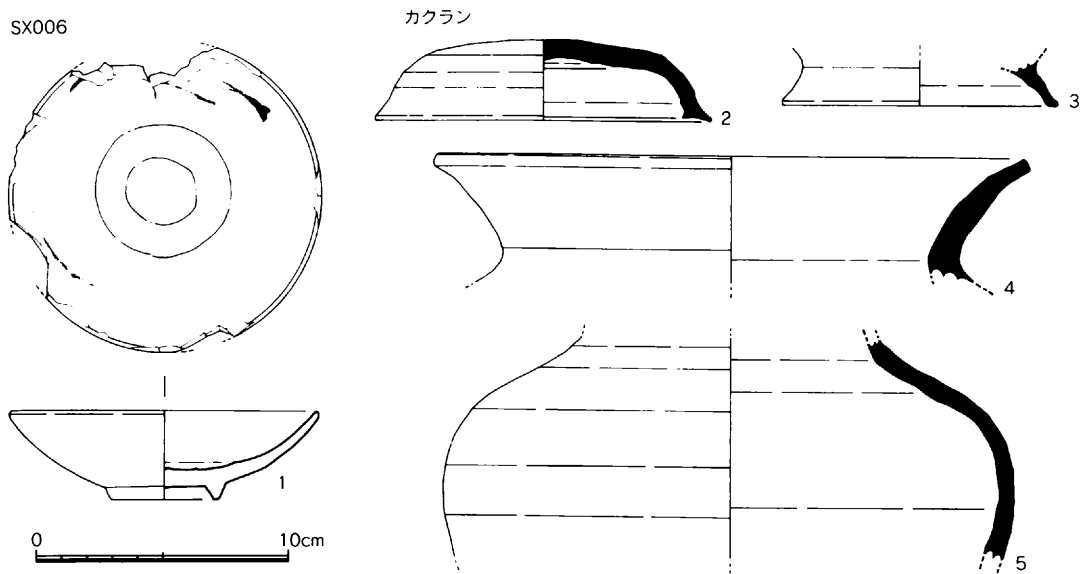


fig.21 神ノ前遺跡第2次調査 SX006・カクラン出土遺物実測図 (1/3)

削りを施し、底部外面に焼成前にヘラ記号を施す。体部上半部は直立し、中位以下は丸い。高台は低く、横に端部を拡張し、端部下面は広く平坦面をなす。本書分類の坏-1 II'-cエ類。

神2SX005黒灰色土出土遺物 (fig.20)

須恵器

坏a×坏身 (153) 底部のみの破片で、残存高1.6cm、底径8.3cmを測る。底部はヘラ切り未調整。

その他の遺構出土遺物

神2SX006出土遺物 (fig.21)

肥前系陶磁器

皿 (1) 口径12.3cm、器高3.5cm、高台径4.3cm。高台は削り出し、内面見込みは釉を輪状に掻き取る。くらわんか。

カクラン出土遺物 (fig.21)

須恵器

蓋a1 (2) 口径13.4cm、器高3.2cm、天井径9.4cm。かえりは口縁端部と同一面をなし、天井部径が広い。本書分類の蓋-1 II"-a類。

坏c (3) 高台のみ残存し、残存高1.9cm、高台径11.0cmを測る。高台は高く、脚状をなす。端部は丸くつくる。本書分類の坏-cウ類。

甕a (4) 口縁部から頸部が残存し、口径23.6cmを測る。頸部外面には叩きを施す。

甕 (5) 頸部から胴部が残存し、胴部最大径22.6cmを測る。内外面ともに回転ナデを行う。

5. 小結

今回の調査では、丘陵尾根上で近現代墓跡を検出した他、斜面で須恵器窯を3基、谷部の堆積層の中に灰原層を5～6層検出した。

ここでは、須恵器窯と灰原等の関係をまとめ、所見を述べることにする。

a. 3号窯

3号窯については、極めて硬質のコンクリートのようなしっかりした窯体が残存していた。焼成部に窯体内から出土した遺物については、煙道口から流れ込んだとみられる、老司式平瓦と窯壁塊だけであり、その操業時期について確定できるものはない。この平瓦が雨水等の浸入を防ぐために、当窯操業時に煙道口を覆っていた可能性も考えられなくはないが、断定も出来ない。この北延長上に堆積する神2SX005の中には、fig. 3の22層（神2SX005黒色土）等、灰原の可能性のあるものがあり、この3号窯の灰原であった可能性も想定される。ちなみに「神2SX005黒色土」層については、大宰府編年Ⅱ～Ⅲ期（8世紀前半）の遺物を最新とする遺物群で構成されている。窯体内で出土した老司式平瓦は、煙道部の雨よけなど、窯操業時に使用されたとも想定できるだろう。ただしこの層が今回調査区域外である北側斜面の未知の窯跡に伴う灰原の可能性もあるため、実質的には、現状では3号窯の灰原は不明と言わざるを得ない。

b. 4号窯

4号窯については、削平は受けているが、牛頸窯跡群の中でも極めて小型の窯という印象を受ける。

窯の直下は削平されており、灰原が見当たらないが、すぐ下の5号窯の窯体中に灰原とみられる層が検出されており、上に位置する4号窯の灰原が5号窯体内に流れ込んだと考えることもできなくはない。5号窯体内の炭灰層は、「5号窯炭層」（fig. 6の9層。「SX005黒灰褐色土」と同層とみられる）、および「5号窯黒色土（窯内）」（fig. 6の11層。「5号窯黒色土（灰原）」と同層）があるが、後者は5号窯最終操業に伴う灰原の可能性が高いため、前者が4号窯の灰原だった可能性を想定することができる。またこの「5号窯炭層」の直下に堆積する「5号窯灰黄色土」（fig. 6の10層）は、地山土が流入したもので、窯体掘削に伴う排土の可能性があり、「5号窯炭層」「5号窯灰黄色土」の両層を、SX005の項で述べたようにセットとして捉えることができるだろう。これが4号窯に伴うとすれば、5号窯操業終了後、4号窯操業ということも想定できよう。ただ、「5号窯炭層」と一連の層位とみられる「神2SX005黒灰褐色土」は、調査区北壁土層観察では4号窯からかなり離れた谷下流へ堆積が伸びており、4号窯焚口直下に広がっていないことや、5号窯煙道部が4号窯焚口推定位置より上位にあること等、疑問がないわけではない。これについては、4号窯とは別の窯が南斜面に存在した可能性もないわけではないが、現状ではその痕跡が全くみられないこと。また、「5号窯炭層」「5号窯灰黄色土」の両層が5号窯体煙道部から堆積が始まっているわけではない点から、両層が煙道部からの流入ではないと想定されるため、5号窯廃絶後の早い段階で天井部が壊れ（壊され）て両層が流入したと考えたと、現時点では4号窯に伴うとする見解も妥当性があると考えたい。

上述を踏まえると灰原層から4号窯の操業時期が想定される。「5号窯炭層」と同層とみられる「SX005黒灰褐色土」から須恵器小蓋a3が1点出土していることから（fig. 17の89）、大宰府編年Ⅱ期（8世紀初頭）に下る可能性もあるが、それ以外は全て大宰府編年IB期（7世紀第4四半期）の遺物が占め、出土量も多い。また「5号窯炭層」と上層の「5号窯黄灰色土」との間に遺物がまとまって出土しており、これらも大宰府編年IB期の遺物である。これから考えると、主体は大宰府編年IB期（7世紀第4四半期）にあると見てよいだろう。窯廃絶時期については、前述の須恵器小蓋a3の存在、及び4号窯内に最初に堆積した「4号窯灰茶色土」の上層付近で土師器甕がまとまって出土していることから、8世紀代には廃絶したことが窺える。出土した土師器甕は、窯体廃絶に直接関係するものではなく、埋没過程において混入したものと想定している。

なお、この窯の特徴として、壁面・床面の残りが極めて悪いことが挙げられる。遺構の項でも述べたように、窯の操業回数が少なかったのか、あるいは壁面を再利用するため削り取ったためと想定される。

c. 5号窯

5号窯については、天井部及び燃焼部より上位が残っていなかったが、窯体の下位はよく残っており、窯体内から谷部（神2SX005）へ続く炭灰層が3層確認された。このうち「5号窯炭灰層」については、上述（小結の4号窯の項）のように5号窯に伴うものではないと考えられ、燃焼部床面に堆積する「5号窯黒色土（窯内）」層（fig. 6の11層。「5号窯黒色土（灰原）」（fig. 3の38層）と同層）、及びfig. 6の15層が5号窯に伴うものとみられる。

fig. 6の15層（炭層）については、燃焼部床面に薄くこびり付くように広がっていることから、床面の清掃が及ばなかったものが蓄積したものと考えられる。この層の上に焚口両袖が設置された状態で検出されたことは、焚口の位置が、その時々に応じて変更されるものであったことが窺える。

「5号窯黒色土（窯内）」は、窯体両壁の補修痕の直下まで厚さ約10cm程も堆積して燃焼部床面全体を覆っていることから、最終操業時の炭灰層（あるいはその一部を含む）と考えられる。この層は、焚口両袖部を通り、そのまま「5号窯黒色土（灰原）」に続いている。これから出土した須恵器は、大宰府編年IA～IB期のもので、操業が7世紀第4四半期当初まで行われたとみられる。

灰原部には、「5号窯黒色土（灰原）」層の直下に「神2SX005灰黒褐色土」層が堆積する。遺構の項でも述べたように、これも5号窯に伴う灰原と考えており、ここから出土した須恵器は、大宰府編年IA期を中心としている。また「神2SX005淡青灰色砂」層は、5号窯窯体設置に伴う排土の可能性を想定しているが、ここからも大宰府編年IA～IB期の遺物が出土しており、操業開始は7世紀第3四半期末に遡るとみられる。

d. その他の窯関連

その他、fig. 3の39層、43層といった灰原層を、神2SX005で検出している。

39層は、39層（神2SX005灰黒褐色土）と類似した埋土だが、やや離れた位置で検出したため、別層の可能性が考えられる。北側斜面の未知の窯の灰原であろう。出土遺物は時期の確定に至らない細片がごくわずかに出土したのみである。

43層（神2SX005黒灰色土）に対応する窯は現時点では不明で、南斜面に窯跡が存在したが既に消失した、あるいは谷の北側斜面に窯跡が存在する、と想定される。出土遺物には大宰府編年IA期頃の須恵器小坏がある。

e. 窯の移動の推定

神2SX005の項でも述べたが、各灰原の堆積順をみると、谷下流部に古い遺物を含む灰原が、谷上流部には新しい遺物を含む灰原が堆積しているようである。窯が時代を追って谷下流から上流に移っていったことが想定される。ただ谷のわずかな部分の調査だけでは十分なことは言えず、この解明については北側斜面の調査が必要となる。後考に委ねたい。

tab. 1 神ノ前遺跡第2次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況（古→新）	時期	地区番号
1	神ノ前3号窯	須恵器窯	地下式無階無段登窯	褐色土→淡黄色土→赤褐色土→淡灰茶色土→明褐色土→灰褐色土→灰色土→淡灰黄色土→黄灰色土→灰茶色土→橙茶色ブロック土→黒灰色土（腐植土）		調査区 西側
2	神ノ前4号窯	須恵器窯	地下式無階無段登窯	灰茶色土→淡茶色土→淡灰色土	7c末～8c初	同 東側
3	神ノ前5号窯	須恵器窯	地下式無階無段登窯。灰原も確認。	黒色土→灰黄色土→灰層→黄灰色土→灰色土	7c後半～末	同 東側
4		溝または土坑				同 東側
5	神2SX005	谷	周辺の須恵器窯から供給されたとみられる灰原層を含む。	灰緑色粘土（腐植土堆積）黒灰色土→淡青灰色砂→灰黒褐色土（灰原）→5号窯黒色土（灰原）→黒灰褐色土（灰原）→フシヨク土→黒色土・黄色砂→黄灰色砂（淡黄色砂）→白茶色粗砂→黒褐色土→灰黒色土→灰褐色粗砂→濃黄色土→灰色土	7c後半～現代	同 北側
6	神2SX006	墓跡	改葬跡とみられる		近現代	同 南側

神ノ前遺跡第2次調査

tab.2-1 神ノ前遺跡第2次調査 須恵器蓋・坏 分類・計測表

※ケズリは、蓋は天井部～体部について、坏は底部と体部の境について、その状況を記す。

※A（内底ナデ）・B（板状圧痕）・ヘラ記号の「-」は、確認箇所があるが、有無が不明なもの。

※R番号は実測を行った遺物の番号で、M番号は計測のみを行った遺物の番号である。

4号窯煙道部淡茶色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋IⅠ×Ⅱ		—	1.55+	—					fig7-4	R-001

4号窯淡茶色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋IⅠ×Ⅱ		—	1.9+	—					fig7-2	R-002
坏c†	×	—	1.35+	(9.4)		○	—	×	fig7-3	R-001

5号窯灰色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
坏c72Ⅲ	×	—	2.3+	(9.6)		○	—		fig8-1	R-002
坏c72Ⅲ	—	(14.6)	4.4	(7.0)		—	—		fig8-2	R-001

5号窯黄灰色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋a1Ⅱ	境のみ	15.0	2.55	7.4	12.1	○	—	×	fig8-3	R-013
蓋a1Ⅱ	×	(16.0)	2.9	(7.8)	(12.8)	○	○?	×	fig8-4	R-016
蓋c1Ⅱ	境のみ	(15.2)	3.4	(9.8)	(12.9)	○	—	×	fig8-5	R-018
蓋c1Ⅱ	境のみ	(16.0)	3.35	(10.2)	(13.2)	○	×	×	fig8-6	R-005
蓋c1Ⅱ'	全面	13.2	3.2	8.6	11.0	—	—	×	fig8-7	R-017
蓋c1Ⅱ'	全面	(15.6)	2.5+	(10.3)	(13.2)	○	—	×	fig8-8	R-003
蓋c1Ⅱ''	境のみ	(14.0)	2.2+	(10.8)	(11.2)	○	—	×	fig8-9	R-015
蓋c	境のみ	—	1.1+	(11.0)		○	—		fig8-10	R-014
坏a1Ⅱ'	—	—	3.2+	(9.8)		—	×	○	fig8-11	R-001
坏a1Ⅱ'	—	—	4.2	—		○	—	○	fig8-12	R-004
坏a2Ⅲ	—	(11.9)	3.7	(10.2)		○	—	○?	fig8-13	R-012
坏a2Ⅲ	—	(14.2)	3.6	(10.0)		—	—	×	fig8-14	R-008
坏c1Ⅱ?	—	—	2.55+	(6.9)		○	—	×	fig8-15	R-009
坏c72Ⅲ	×	—	2.85+	(9.4)		○	—	×	fig8-16	R-010
坏c72Ⅲ	×	—	5.1+	(10.6)		—	—		fig8-17	R-011
坏c72Ⅲ	×	(13.4)	4.05	7.45		○	—	×	fig8-18	R-007
坏c72Ⅲ	×	(14.0)	5.1	(10.2)		○	—	×	fig8-19	R-002
坏c72Ⅲ	×	(14.8)	4.85	(8.6)		○	—	×	fig8-20	R-006

5号窯炭層

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋a1Ⅲ	×	15.0	2.7	8.9	12.4	○	—	×	fig8-21	R-002
坏a3	×	(12.2)	3.0	(10.0)		○	—	×	fig8-22	R-001

5号窯灰黄色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋a1Ⅱ''	境のみ?	(13.2)	2.6	(10.2)	(11.0)	○	○	○	fig9-23	R-004
蓋c1Ⅱ'	境のみ	(14.0)	2.3	(10.3)	(11.0)	○	—	×	fig9-24	R-008
蓋c1Ⅱ'	×	(14.0)	3.25	(10.0)	(11.3)	○	—	○	fig9-25	R-005
坏a1Ⅱ'	×	(12.2)	4.0	(7.6)		○	○	×	fig9-26	R-001
坏a1Ⅱ'	×	(13.0)	3.6	(8.6)		○	—	×	fig9-27	R-009
坏c1Ⅱ'	—	(11.6)	4.3	(7.4)		—	—	×	fig9-28	R-003
坏c1Ⅱ'	—	(11.6)	4.8	(7.9)		—	—		fig9-29	R-006
坏c72Ⅲ	×	(12.4)	4.5	(8.7)		○	—	○	fig9-30	R-007
坏c†		—	0.7+	(7.4)		—	—	○	fig9-31	R-002

5号窯黒色土(窯内)

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋c	境のみ	—	0.9+	—				○	fig10-32	R-005
蓋c	—	—	1.0+	—					fig10-33	R-004
坏a2Ⅲ	境のみ	(12.6)	3.5	(10.4)		○	—	○	fig10-34	R-001
坏c1Ⅱ'	—	—	3.6+	(8.6)		—	○	○	fig10-36	R-006
坏c1Ⅱ'	×	(14.6)	4.8	(10.2)		○	—	○	fig10-37	R-003

tab.2-2 神ノ前遺跡第2次調査 須恵器の蓋・坏分類表

S-5窯黒色土(灰原)

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
小蓋a1Ⅱ'	×	(11.1)	2.15	(7.4)	(8.8)	○?	—	×	fig10-38	R-002
蓋a1Ⅲ	×	(12.1)	2.7	(7.2)	(10.4)	○	—	×	fig10-39	R-005
蓋c1Ⅱ'	境のみ	(13.2)	3.2	6.9	(10.9)	○	—	×	fig10-40	R-003
蓋3f	全面	—	1.95+	—	—	○	—	—	fig10-41	R-004
坏身	全面(手持ち)	10.6	2.9	7.4	—	○	—	○	fig10-43	R-006

S-5灰黒色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋a1Ⅱ	—	(12.6)	1.9	(7.2)	(10.6)	—	—	—	—	M-008
蓋a1Ⅱ	境のみ	(13.0)	2.5	(7.2)	—	○	○	○	—	M-003
蓋a1Ⅱ	×	14.2	2.8	8.0	11.6	○	—	○	fig11-4	R-009
蓋a1Ⅱ'	×	13.5	2.0	8.1	(11.3)	○	×	○	—	M-002
蓋a1Ⅲ	境のみ	(14.0)	2.6	(8.0)	(11.6)	○	×	○	—	M-005
蓋a1Ⅲ	×	(14.6)	3.0	(9.0)	(12.5)	○	×	×	—	M-004
蓋c1Ⅱ	境のみ	(13.4)	1.9+	(8.6)	(11.2)	○	—	—	—	M-009
蓋a37	×	(11.4)	1.6	7.8	—	○	×	—	—	M-001
蓋c37	全面	(14.0)	1.9	(9.8)	—	○	—	×	fig11-5	R-003
蓋c37	境のみ	14.0	2.15	10.2	—	○	×	×	fig11-6	R-005
坏a1Ⅱ'	—	(12.2)	4.2	(8.6)	—	○	—	—	fig11-7	R-010
坏a3	×	—	2.7+	(10.0)	—	○	×	○	—	M-010
坏c3	×	—	2.9+	8.1	—	○	—	—	—	M-007
坏c3	×	—	2.3+	(8.0)	—	○	×	—	—	M-011
坏c3	×	(12.0)	3.8	(7.8)	—	○	×	—	—	M-006

S-5黒褐色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋a1Ⅰ'	×	11.2	2.2	8.8	11.2	○	—	○	fig12-14	R-002
蓋a1Ⅱ	×	(13.6)	2.2	(8.6)	(11.6)	○	×	—	—	M-005
蓋a1Ⅱ	×	(14.4)	2.3	(9.2)	(12.2)	○	×	—	—	M-006
蓋a1Ⅲ	×	(12.6)	3.0	6.9	(10.4)	○	×	—	—	M-008
蓋a1Ⅲ	×	(14.0)	2.6	6.5	(11.8)	○	×	—	—	M-001
蓋c1Ⅱ'	境のみ	(13.5)	3.7	6.7	(11.5)	○	—	×	fig12-15	R-001
蓋1Ⅱ	×	—	2.2+	—	—	○	—	—	—	M-007
蓋1Ⅲ	境のみ	(16.0)	2.9	(9.2)	(13.5)	○	—	—	—	M-003
坏a1Ⅱ'	×	—	4.7	8.6	—	○	×	×	—	M-002
坏a2Ⅲ	境のみ	13.5	3.8	9.8	—	○	—	×	fig12-16	R-003
坏a3	×	(12.0)	3.2	(8.0)	—	○	×	—	—	M-004

S-5黒色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋c3f	境のみ	14.3	2.3	11.4	—	○	—	×	fig12-22	R-003
蓋c3f	全面	14.4	2.8	10.7	—	○	—	×	fig12-23	R-002
蓋c37	境のみ	—	1.5+	—	—	○	×	—	—	M-001
蓋37	境のみ	(14.2)	1.4+	(9.8)	—	○	×	—	—	M-002
蓋3f	境のみ	(14.0)	1.4+	(10.8)	—	○	×	—	—	M-004
坏c3	—	—	2.4+	10.2	—	○	—	○	fig12-24	R-004
坏c3	×	—	3.4+	(9.3)	—	○	×	—	—	M-003

S-5フシヨク土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
小蓋a1Ⅰ'	境のみ	(11.0)	2.7	(7.0)	(9.0)	○	—	×	fig13-27	R-047
小蓋a1Ⅱ'	×	10.6	1.7+	7.45	(8.4)	○	×	○	fig13-29	R-033
小蓋a1Ⅲ	×	(12.0)	3.0	(5.8)	(9.5)	○	—	○	fig13-28	R-032
小蓋a37	境のみ	(11.6)	1.55	7.6	—	○	—	×	fig14-46	R-025
小蓋a3f	×	(11.6)	0.95	(7.2)	—	—	—	×	fig14-47	R-026
小蓋3f	×	(12.0)	1.3+	(8.0)	—	○	—	—	fig14-48	R-010
蓋a1Ⅰ'	×	(13.8)	2.15	(8.0)	(11.8)	○	—	○	fig13-30	R-034
蓋a1Ⅰ'	×	(14.6)	1.95	(8.4)	(12.6)	○	—	○	fig13-31	R-028
蓋a1Ⅱ	境のみ	14.25	2.8	7.9	11.6	○	—	○	fig13-32	R-020
蓋a1Ⅱ	×	(13.2)	1.85	6.1	10.9	○	—	○	fig13-33	R-018
蓋a1Ⅱ	×	(13.8)	2.0	(6.1)	(11.2)	○	—	×	fig13-34	R-024
蓋a1Ⅱ'	境のみ	(13.6)	2.6	6.4	(11.6)	○	×	×	—	M-006
蓋a1Ⅱ'	—	(13.2)	2.1	(8.0)	(11.0)	—	×	○	—	M-012
蓋a1Ⅱ'	×	(14.4)	2.35	7.25	12.4	○	—	○	fig13-35	R-023
蓋a1Ⅱ'	×	(13.0)	1.3	(11.4)	(10.8)	○	×	—	—	M-009

神ノ前遺跡第2次調査

tab.2-3 神ノ前遺跡第2次調査 須恵器の蓋・坏分類表

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋a1Ⅱ"	×	14.9	2.2	11.35	12.5	○	—	○	fig13-36	R-004
蓋a1Ⅲ	×	(13.4)	2.2	(7.0)		○	×			M-005
蓋a1Ⅲ	×	14.5	3.25	10.0	12.6	○	—	×	fig13-37	R-005
蓋c'1Ⅱ	全面	(13.2)	2.85	(7.9)	(11.0)	○	—	×	fig14-41	R-019
蓋c'1Ⅱ	全面	15.05	2.5	9.8	12.4	○	—	×	fig14-42	R-002
蓋c'1Ⅱ	境のみ	(14.8)	3.4	(11.0)	(13.4)	○	×			M-008
蓋c'1Ⅱ	境のみ	(15.2)	2.5	(9.6)	(12.6)	○	—	○?	fig14-43	R-022
蓋c'1Ⅱ'	境のみ	14.2	3.3	8.2	12.0	○	—	×	fig14-44	R-003
蓋c1Ⅱ'	×	(15.0)	2.5+	(11.0)	(12.4)	○	×			M-021
蓋c1Ⅱ'	境のみ	(15.5)	2.8+	(8.7)	(13.1)	○	×			M-004
蓋c'1Ⅲ	境のみ	(13.8)	3.6	(7.2)	(11.2)	○	—	×	fig14-45	R-021
蓋1Ⅱ	境のみ	(14.4)	1.8+	—	(12.2)	○	×			M-020
蓋1Ⅱ'	×	(13.0)	2.4+	—	(10.8)	○	—			M-014
蓋1Ⅱ'	—	(14.2)	2.3+	—	(12.2)	—	—			M-015
蓋37	境のみ	(15.6)	1.55+	(10.4)		○	—		fig14-49	R-009
蓋37	×	—	2.35+	—		○	—		fig14-50	R-041
蓋34		(14.8)	1.2+	—		○	—		fig14-51	R-027
坏蓋	○	10.2	3.35	7.4		○	—	○	fig15-26	R-007
小坏a1Ⅱ	境のみ	(10.6)	3.7	7.05		○	—	○	fig15-55	R-008
小坏a1Ⅱ'	境のみ	9.6	3.3	6.3		○	×	×	fig15-56	R-001
坏a2Ⅲ	×	(11.8)	3.3	7.0		○	×	○	fig15-57	R-031
坏a3	×	12.0	3.3	9.5		○	—	×	fig15-58	R-006
坏a3	×	—	3.3	—		○	×			M-016
坏c1Ⅱ'	×	13.6	5.0	(8.2)		○	—	×	fig15-59	R-014
坏c12Ⅲ	境のみ	(13.6)	4.6	(8.6)		○	—	×	fig15-60	R-012
坏c12Ⅲ	境のみ	—	4.6	—		○	—			M-019
坏c12Ⅲ	×	(13.8)	5.1	(9.0)		○	—			M-010
坏c12Ⅲ	×	—	2.8+	7.9		○	×	×		M-007
坏c12Ⅲ	×	—	5.4	—		○	—			M-018
坏c12Ⅲ	境のみ	—	4.0	—		○	—			M-001
坏c12Ⅲ	×	(13.8)	4.4	8.0		○	—	×		M-011
坏c12Ⅲ	—	—	4.2+	(10.2)		○	×			M-017
坏c2Ⅲ	×	(12.2)	3.2+	7.2		○	×			M-013
坏c2Ⅲ	×	13.0	3.35+	—		○	—	○	fig15-61	R-013
坏c1	境のみ	(14.8)	4.7	(8.0)		○	—	×	fig15-64	R-030
坏c1	境のみ	—	1.6+	7.9		○	—	○	fig15-65	R-043
坏c1	境のみ	—	1.5+	(8.0)		○	—	○	fig15-66	R-044
坏c1	—	—	1.45+	7.6		○	—	○	fig15-67	R-039
坏c1	—	—	1.65+	(8.1)		○	—	○	fig15-68	R-045
坏c13	×	11.6	3.8	8.65		○	—	×	fig15-62	R-029
坏c13	×	—	4.3+	10.3		○	×			M-003
坏c13	×	—	4.1+	(10.6)		—	—			M-002
坏c3	×	15.2	5.45+	12.4		○	—		fig15-63	R-040

S-5黒灰褐色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
小蓋a1Ⅰ'	×	9.7	1.9	6.3	7.5	○	—	×	fig17-84	R-002
小蓋a1Ⅰ'	×	(11.0)	2.0	(7.1)	(8.8)	×	○?	×	fig17-85	R-058
小蓋a1Ⅱ	×	(10.5)	2.4	(6.2)	(8.7)	○	—	×	fig17-86	R-004
小蓋a1Ⅱ	×	(11.6)	2.0	(7.6)	(9.3)	○	×	○		M-006
小蓋1Ⅱ'	—	(10.0)	2.35+	(6.5)	(8.2)	○	—	○	fig17-87	R-049
小蓋1Ⅱ"	×	(10.9)	1.8	(6.7)	(9.1)	○	—	○	fig17-88	R-007
小蓋a37	×	(8.6)	2.0	(6.3)		○	—	○	fig17-89	R-053
蓋a1Ⅰ'	×	(13.3)	1.4	(8.2)	(11.0)	○	—	○	fig17-90	R-001
蓋a1Ⅰ'	×	(13.6)	2.15	(9.0)	(11.0)	○	○	○	fig17-91	R-008
蓋a1Ⅱ"	×	(12.6)	2.9	(8.1)	(10.2)	○	—	×	fig17-92	R-047
蓋a1Ⅲ	×	13.2	3.55	7.9	11.5	○	○	○	fig17-93	R-016
蓋a1Ⅲ	×	(14.4)	3.15	8.6	12.1	○	×	○	fig17-94	R-014
蓋c1Ⅰ'	全面	(13.8)	2.2	(8.8)	(10.9)	○	—	×	fig18-102	R-050
蓋c'1Ⅱ	全面	(15.8)	2.8	(10.2)	(13.3)	○	—	×	fig18-105	R-005
蓋c'1Ⅱ	境のみ	(14.2)	2.05	(6.1)	(11.8)	○	—	×	fig18-103	R-024
蓋c'1Ⅱ	境のみ	(15.2)	2.5	(10.5)	(12.7)	○	—	×	fig18-104	R-059
蓋c1Ⅱ	全面	(16.0)	2.1+	(10.7)	(13.7)	○	—	○	fig18-106	R-021
蓋c1Ⅱ	境のみ	(13.8)	2.35+	(9.4)	(11.4)	○	○?	×	fig18-107	R-048
蓋c1Ⅱ	境のみ	—	1.6+	—		○	×	○		M-005

tab.2-4 神ノ前遺跡第2次調査 須恵器の蓋・坏分類表

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋c'ⅠⅡ'	境のみ	(14.1)	3.2	9.7	12.1	○	×	○	fig18-108	R-006
蓋ⅠⅠ'	境のみ	(14.0)	2.0+	(9.4)	(11.5)	○	—			M-004
蓋ⅠⅡ	境のみ	—	2.0+	—	—	○	×			M-007
蓋ⅠⅡ	—	(14.2)	2.1+	(7.0)	(11.4)	○	—		fig17-96	R-020
蓋ⅠⅡ'	境のみ	(12.8)	2.0+	(6.8)	(10.5)	—	—			M-003
蓋ⅠⅡ'	×	(12.5)	2.0+	(6.9)	(10.3)	○	×	○		M-009
蓋ⅠⅡ'	—	(14.2)	2.0+	—	(12.2)	—	—			M-008
蓋ⅠⅡ'	—	(14.6)	2.1+	(11.8)	(12.2)	○	—		fig17-97	R-056
蓋ⅠⅡ'	×	(16.8)	2.55+	(9.8)	(14.6)	○	—		fig17-98	R-055
蓋ⅠⅢ	—	(12.4)	1.9+	(8.5)	(10.1)	○	—		fig17-99	R-051
蓋ⅠⅢ	×	(13.4)	2.1+	(11.4)	(11.2)	—	—		fig17-100	R-054
蓋ⅠⅢ	×	(14.4)	3.0	(10.8)	(12.1)	○	—		fig17-101	R-052
小坏aⅠⅠ	×	(10.2)	3.0	(7.6)	—	○	—		fig18-109	R-031
小坏aⅠⅡ	×	(9.4)	2.95	(5.5)	—	○	×	×	fig18-110	R-033
小坏aⅡⅢ	境のみ	(10.4)	3.0	(7.5)	—	○	—		fig18-111	R-032
小坏cⅠ3	×	(10.2)	4.1	(6.6)	—	○	—	×	fig19-120	R-030
坏aⅡⅢ	境のみ	12.7	4.1~4.2	7.8	—	○	×	○	fig18-112	R-025
坏aⅡⅢ	境のみ	14.4	3.35~3.75	10.8	—	○	×	○	fig18-113	R-015
坏aⅡⅢ	境のみ	—	3.4+	(10.8)	—	○	—	○	fig18-114	R-037
坏aⅡⅢ	×	(11.6)	3.4	(7.8)	—	○	○	×	fig18-117	R-038
坏aⅡⅢ	×	(11.6)	3.6	(7.0)	—	○	—	×	fig18-116	R-034
坏aⅡⅢ	×	12.65	3.0	8.0	—	○	—	×	fig18-115	R-012
坏aⅡⅢ	×	—	3.5	—	—	○	×	—		M-002
坏aⅢ	×	11.4	3.3~3.4	8.5	—	○	×	○	fig18-118	R-035
坏aⅢ	×	(11.8)	2.25	(9.2)	—	○	○?	○?	fig18-119	R-029
坏aⅢ	×	—	4.1+	—	—	○	×	—		M-001
坏cⅠ2Ⅲ	境のみ	—	3.0+	8.0	—	○	—	×	fig19-121	R-028
坏cⅠ2Ⅲ	境のみ	—	1.65+	(8.4)	—	○	—	○	fig19-122	R-022
坏cⅠ2Ⅲ	—	(13.4)	4.55	(9.0)	—	○	—	—	fig19-123	R-027
坏cⅠ2Ⅲ	—	—	2.7+	(10.0)	—	○	—	—	fig19-125	R-036
坏cⅠ2Ⅲ	×	(14.2)	4.65	(9.0)	—	○	—	○	fig19-124	R-023
坏2Ⅲ	×	(11.2)	3.1+	(9.8)	—	○	—	—	fig19-127	R-026
坏3	×	11.8	3.1~3.8	8.7	—	○	×	—	fig19-128	R-018
坏c7	—	—	1.9+	(9.8)	—	—	—	—	fig19-126	R-009

S-5灰黒褐色土

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
小蓋aⅠⅡ	境のみ(手持ち)	(8.0)	2.6	(6.8)	(8.0)	○	×	×	fig20-141	R-006
小坏aⅠⅡ	境のみ(手持ち)	—	2.4+	(6.2)	—	○	—	×	fig20-143	R-002
小坏aⅠⅡ	×	(8.5)	3.2	(5.4)	—	○	—	○	fig20-144	R-005
小坏aⅠⅡ	×	(9.8)	3.6	(7.0)	—	○	—	×	fig20-145	R-001
坏aⅡⅢ	×	—	3.8+	(9.0)	—	○	—	×	fig20-146	R-004

S-5淡青灰色砂

器種	ケズリ	口径	器高	底(天井)径	かえり径	A	B	ヘラ記号	図版番号	遺物番号
蓋aⅠⅡ"	×	(11.0)	2.25	(8.2)	(9.0)	○	○?	○	fig20-148	R-004
蓋ⅠⅡ	×	(13.0)	2.4+	—	(10.6)	—	—	—	fig20-149	R-002
蓋ⅠⅢ	×	(15.6)	3.0+	—	(13.7)	—	—	—	fig20-150	R-003
小坏aⅠⅡ	—	—	3.3	—	—	—	—	—		M-001
小坏aⅠⅡ	○	—	3.5+	—	—	—	○?	○	fig20-151	R-005
坏cⅠⅡⅠ'	境のみ	—	3.0+	(8.7)	—	○	—	○	fig20-152	R-001

神ノ前遺跡第2次調査

tab.3 神ノ前遺跡第2次調査 出土遺物一覧表

※ 陶磁器の分類番号の後ろに付した()内の数字は破片点数である。

3号窯 橙茶色ブロック土
そ の 他 窯体の焼き台

3号窯 淡灰黄色土
そ の 他 窯体の焼き台

3号窯 灰色土
瓦 類 平瓦（格子目、老司式に伴うものか）

3号窯 明橙黄色土
そ の 他 窯体の焼き台

3号窯 淡黄色土
そ の 他 窯体の焼き台

3号窯 橙色土
そ の 他 窯体の焼き台

3号窯 淡茶色土
そ の 他 窯体の焼き台

4号窯 灰茶色土
須 恵 器 甕、蓋1、鉢×壺の口縁
土 師 器 甕
そ の 他 窯体の焼き台

4号窯 淡灰色土
そ の 他 窯体

4号窯 淡茶色土
須 恵 器 坏c、蓋1、甕
そ の 他 窯体

4号窯 煙道部淡茶色土
須 恵 器 蓋1

5号窯 灰色土
須 恵 器 坏c、蓋1、甕
瓦 類 片

5号窯 黄灰色土
須 恵 器 蓋c1、甕、坏c、坏a、小坏a
そ の 他 窯体の焼き台

5号窯 炭層
須 恵 器 蓋a1、坏a

5号窯 灰黄色土
須 恵 器 坏c、蓋c1、坏a、蓋a1

5号窯 黒色土(窯内)
須 恵 器 坏c、坏a、蓋c

5号窯 黒色土(灰原)
須 恵 器 小蓋a1、坏c、甕、蓋c1、蓋3、坏a（底部穿孔あり）、壺

濃黄色土 (=S-5濃黄色土)
瓦 類 平瓦（縄目）

S-5灰色土
須 恵 器 蓋3、坏c、蓋1、甕
瓦 質 土 器 鉢
瓦 類 片(縄目)

S-5灰黄色土
瓦 類 片(縄目)

S-5灰黒色土
須 恵 器 蓋c3、壺×甕（平安以降のものか）、蓋a1
壺bか、甕、坏a、大皿a、高坏
土 師 器 甕、碗c
瓦 類 平瓦、九瓦、平瓦（縄目、一枚作りか）
中 国 陶 器 盤（緑釉、胎土はC群）（2）

S-5黒褐色土
須 恵 器 蓋c1、蓋a1、坏c、坏a、甕、蓋3
土 師 器 小壺×鉢
瓦 類 片(格子、模骨あり)、片（縄目）

S-5白茶色粗砂
須 恵 器 高坏、甕

S-5青灰色砂（=S-5淡黄色砂）
須 恵 器 坏c
瓦 類 平瓦（縄目）

S-5フシヨク土
須 恵 器 蓋c1、蓋c、小蓋a3、蓋a1、坏c、壺b、高坏(短脚)
甕、甕×壺、高坏×大坏c、坏a、小坏a、蓋3、小蓋a1
小蓋1、小坏a×小蓋a
土 師 器 甕a、皿a
瓦 類 平瓦（ナデ消し、縄目）
石 製 品 砥石

S-5黒灰褐色土
須 恵 器 小蓋a3、高坏×大皿c、坏a、蓋c1、蓋a1、小蓋a1
甕a、甕×壺、皿a、高坏（短脚）、壺、坏c、坏蓋
小坏a（穿孔）、小坏c、小坏a、鉢
土 師 器 甕
製 塩 土 器 煎熬土器
そ の 他 炭化物

S-5黒色土
須 恵 器 壺b、蓋c3、坏c、甕

S-5灰黒褐色土
須 恵 器 甕（多い）、小坏a、坏a、蓋（天井部穿孔あり）
小蓋a1、小坏a×高坏

S-5淡青灰色砂
須 恵 器 甕、蓋1、坏c、小坏a、小蓋a1、坏身、坏

S-5黒灰色土
須 恵 器 蓋×坏、坏a×坏身

S-6
肥前系陶磁器 皿（クラワンカ）

カクラン
須 恵 器 甕a、坏a、小蓋1、蓋1、蓋a1、高台、壺

表土
須 恵 器 坏c、蓋1、坏
土 師 器 甕
国 産 陶 器 急須
肥前系陶磁器 小碗
瓦 類 平瓦（近世以降か）
そ の 他 ガラス小瓶

IV-2. 島本遺跡第1次調査

1. 調査に至る経緯

調査地は、太宰府市大字吉松242-1に所在する。ここは水城の西門跡の南東約170mに位置し、南西約200mには、6世紀末頃の瓦窯とされる神ノ前2号窯が所在する。またこの南隣接地は島本遺跡第2次調査地である。

平成元（1989）年5月22日、当市建設課より、市道宮脇-土居線の道路拡幅工事を実施するにあたり、埋蔵文化財取り扱いについての問い合わせが文化課（当時）にあった。検討の結果、拡幅範囲が狭いこともあり、工事立会を行い、遺構が出てきた際には記録をとるという内容で協議を行った。工事は平成2年度から実施され、掘削工事の際に当課職員（狭川・緒方）が立会を行ったが、当地（工事対象地最北西部）で遺構が検出されたため、急遽記録をとることになった。

調査は城戸康利が担当し、平成2（1990）年5月2日より開始し5月12日に終了した。対象面積は40㎡で、発掘調査面積は36㎡である。水城-脇道線の道路拡幅工事はその後も続けられ、平成6年度には工事対象地の最南東部付近では、原口遺跡第3次調査として調査を実施している。

なお、整理報告は、井上信正が行った。

2. 遺構

溝（fig.22、PL.9）

ここからは、北西－南東方向に向かう溝、あるいはたまり状の遺構が複数検出されている。いずれも幅0.6～1.5m、深さ約0.1mを測る。

3. 遺物

遺物はわずかに出土していたということだが、現在その所在がわからない。弥生・奈良・平安の各時代の遺物が散見されたということで、島本遺跡第2次調査とほぼ同様の遺物群だったとみられる。なお遺構から遺物は出土していないようで、いずれも遺構検出時の遺物群とみられる。

4. 小結

ここは島本遺跡第2次調査と隣接しているため、この第2次調査成果と併せて検討する必要がある。本調査の遺構検出面の標高は、第2次調査区内の標高とほぼ変わらないため、遺構面は付近に同様に広がっていることを示すといえる。ここで検出した溝の走向方位も類似していることから、第2次調査で検出した島2SD015などと同様に、官道側溝の影響を受けた溝群と考えられよう。

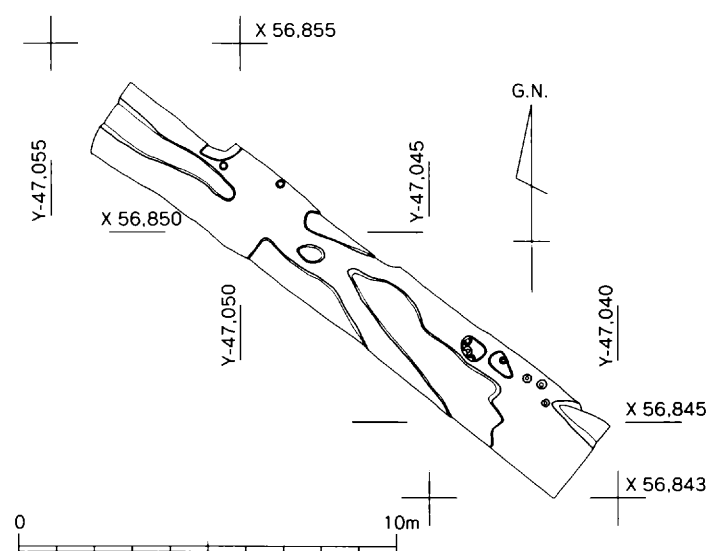


fig.22 島本遺跡第1次調査 遺構全体図 (1/200)

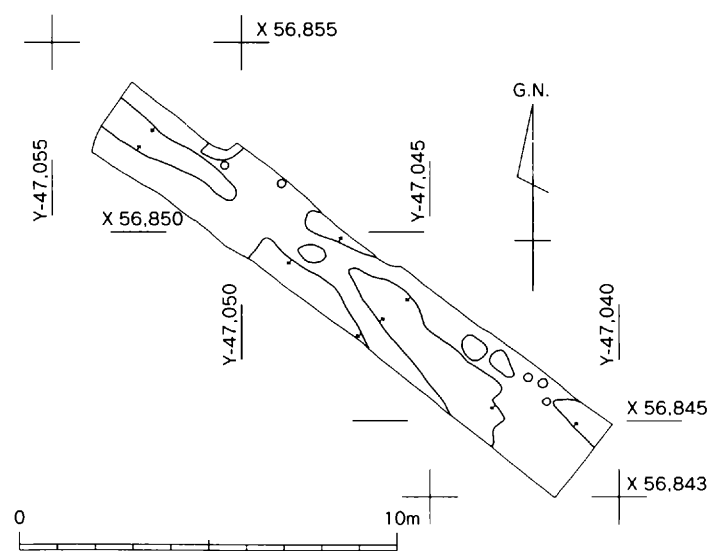


fig.23 島本遺跡第1次調査 遺構配置図 (1/200)

IV-3. 島本遺跡第2次調査

1. 調査に至る経緯

調査対象地は、太宰府市大字吉松字島本379-10・11・12に所在する。ここは水城の西門跡の南東約170mに位置し、南西約200mには、6世紀末頃の瓦窯とされる神ノ前2号窯が所在する。またこの北に隣接する地点は島本遺跡第1次調査として調査を行っている。

平成5（1993）年3月16日、ここに建物を建築するため、事前の遺跡の有無についての問い合わせが文化課（当時）にあった。ここは水城西門から伸びる地割の存在から、南東の前田遺跡で検出された古代官道跡（水城西門ルート）が検出されることが予想されており、同年4月13日に確認調査を行ったところ、地表下1.2m付近で水城西門へ伸びる二条の大溝を検出し、これが官道の両側溝と予想された。このことから掘削深度の大きい工事を伴う場合は発掘調査が必要と判断され、開発者・地権者に伝えた。その後マンション建設の話が進められたため、原因者負担で発掘調査を実施することで協議を行い、また、官道という重要遺構が検出されるため、調査費の一部に補助金を使用することで県文化課と調整を行った。調査は平成5年10月5日に開始し、平成6（1994）年1月17日に全て終了した。開発対象面積は1,244 m²で、発掘調査面積は490m²である。

調査は、対象地を半分ずつ調査することにし、水城西門に近い北西側を先に遺構検出した。予想通り水城西門に伸びる官道跡が検出され、前田遺跡等で検出していた官道が水城西門に伸びていることを証明することができた。また水城西門に近いためセットで見ることが出来る好例であったため、調査途中の平成5年11月8日に現地にて記者発表を行った。

なお調査終了後は、開発者と共に、官道位置に考慮してマンションの基礎杭配置を決定した。また1階部分を駐車場にするため、通常のアスファルトの他、エンジ色のアスファルトを使用して、官道両側溝の位置を明示してもらい、さらに道路際の植栽の中に陶板を用いた遺跡説明板を設置してもらった。

2. 層位 (fig.26)

調査で確認した基礎地盤は、粗砂層が最下位にあって、その上に黄灰色シルト～粘土が厚く堆積している状況にあった。この直上に「表土層」が堆積している。表土層と遺構面の間には場所によって土層が確認されるところもあり、これらは、遺構面検出の人工層位として「茶色土層」とし、遺物取り上げを行った。

3. 遺構

溝

島2SD001 (fig.24・26～28、PL.12～14)

調査区の南西側で検出した大溝である。検出長28.1m、最大幅5.9m、深さ0.8～1.2mを測り、G.N.47° 22' 27" -Wに走行する。埋土はfig.26に示すような堆積をしている。このうち褐色粘土・淡黄紫色粘土の堆積順、暗青色粘土（E9地区のみ検出）・黒色粘土の堆積順については、層が離れているので不明である。出土遺物をみても、奈良時代の遺物を下限とする層と平安時代後期の遺物を下限とする層とがあり、淡灰茶色砂層より上層（褐色粘土層・淡黄紫色粘土層を含む可能性あり）は平安時代

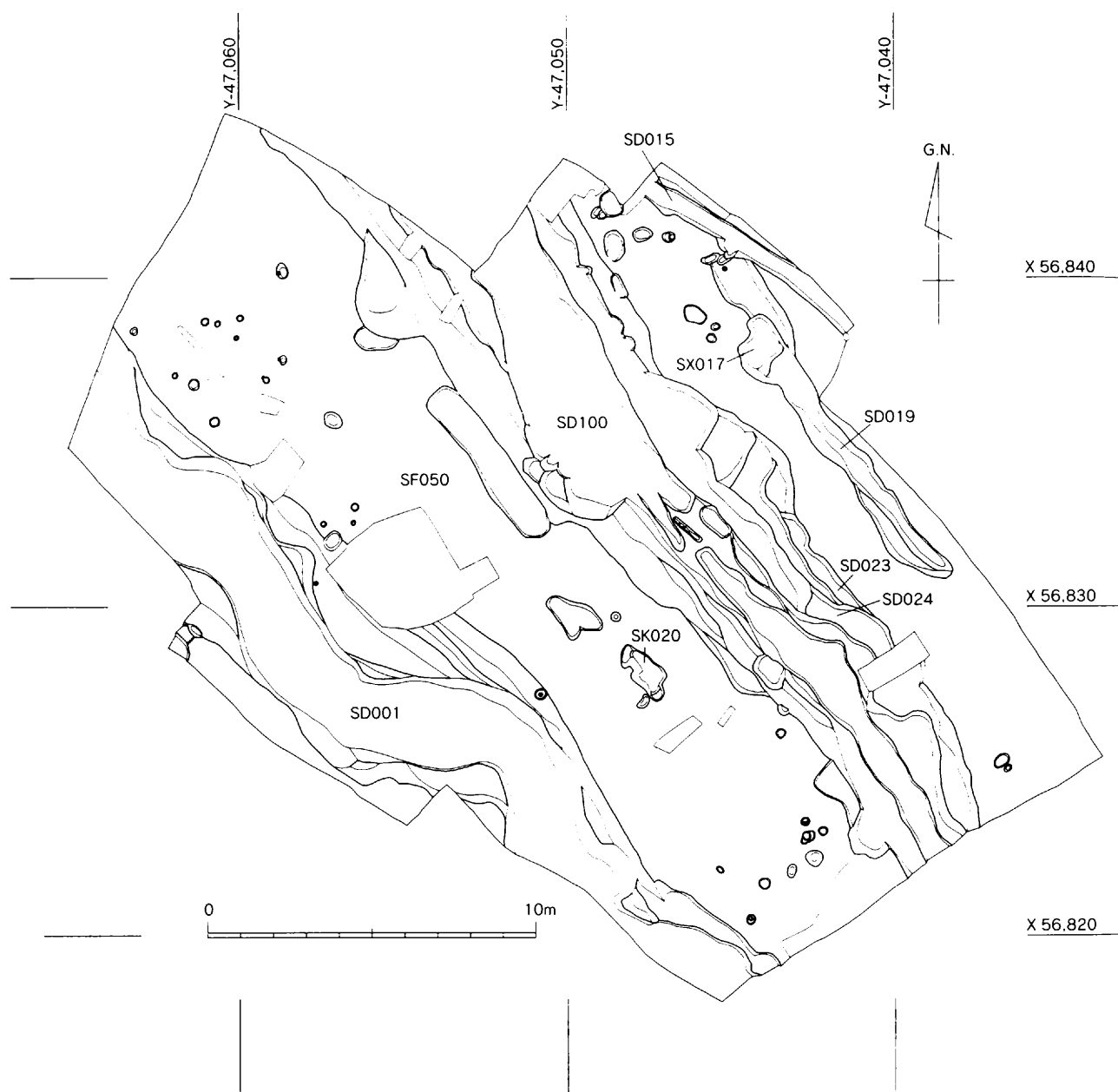


fig.24 島本遺跡第2次調査 遺構全体図 (1/200)

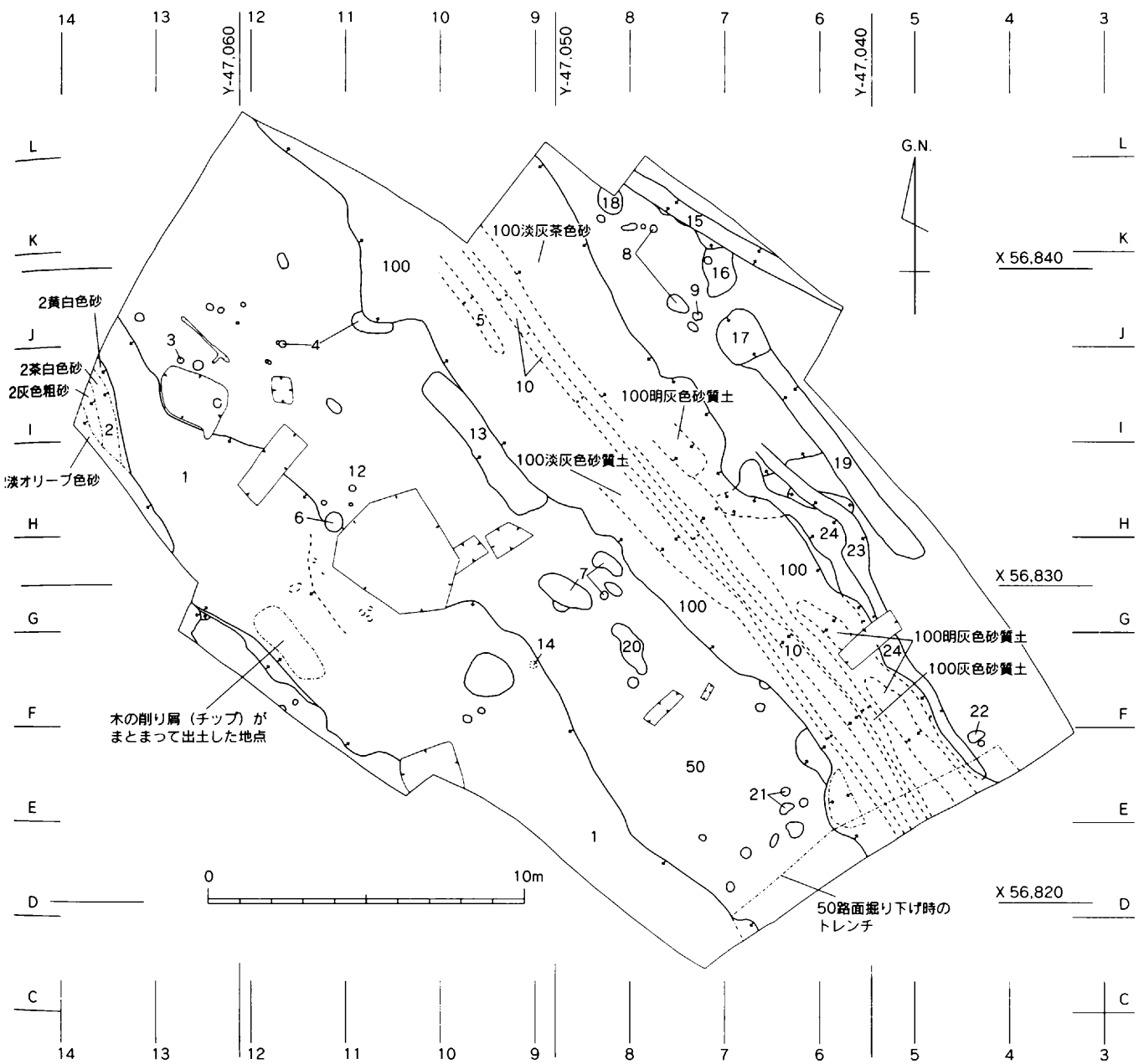


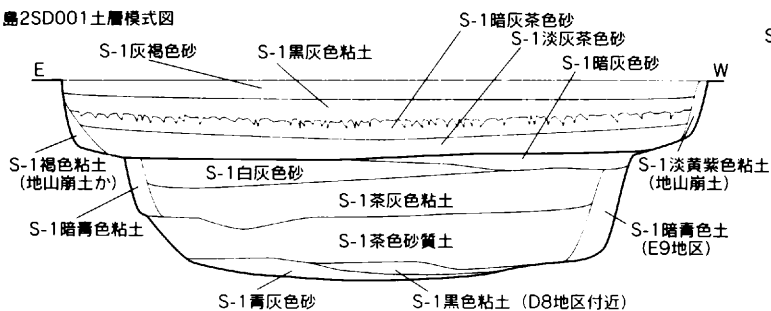
fig.25 島本遺跡第2次調査 遺構配置図 (1/200)

島本遺跡第2次調査

島本遺跡第2次調査 土層模式図



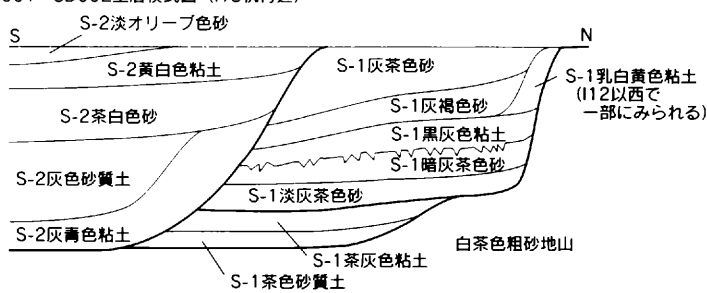
島2SD001土層模式図



SD001遺物取り上げ土層順

1. 灰茶色砂
2. 灰褐色砂(=S-1灰茶褐色砂質土)
3. 乳白黄色粘土
4. 黒灰色粘土
5. 暗灰茶色砂(=S-1濃灰褐色砂質土)
6. 淡灰茶色砂(=S-1茶褐色砂質土)
7. 褐色粘土
- 7'. 淡黄紫色粘土
8. 暗灰色砂 (8と8'は入り乱れている)
- 8'. 白灰色砂
9. 茶灰色粘土
10. 茶色砂質土(=S-1明灰色砂土)
11. 暗青色粘土
12. 黒色粘土
13. 青灰色砂
14. 暗青色土

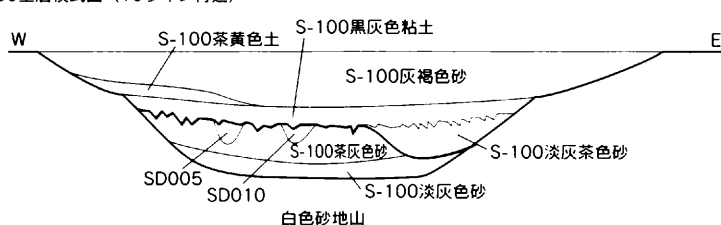
島2SD001・SD002土層模式図 (I13杭付近)



SD002遺物取り上げ土層順

1. 淡オリブ色砂
2. 黄白色粘土
3. 茶白色砂
4. 灰色砂質土
5. 灰青色粘土

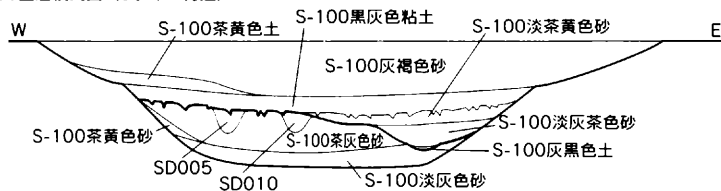
島2SD100土層模式図 (10ライン付近)



SD100遺物取り上げ土層順 (矢印は、旧→新)

1. 灰褐色砂
2. 茶黄色土(=S-100淡黒褐色粘質土)
3. 黒灰色粘土(=S-100黒褐色粘質土)
4. 淡茶黄色砂(=S-100暗茶青色砂質土)
5. 茶褐色土
- ※ 3・4は、平安時代後期以降の耕作に伴う層群とみられる。
6. 淡灰茶色砂
7. 灰黒色土
8. SF005(=S-100濃茶褐色砂)
- 8'. 灰色砂質土 (8層と同層の可能性あり)
- 8''. SF010 暗茶黒色土
- 8'''. SF010 淡茶色土
9. 白灰色砂 (9層→8''層)
10. 明灰色砂質土
11. 淡灰色砂質土 (11層→10層)
- ※ 8～11層は、通行痕跡の可能性がある。
- ※ 6～11層で、検出時に上下関係がわからない層間の堆積順は不明である。
12. 茶灰色砂(=S-100灰白色砂)
13. 茶黄色砂
14. 淡灰茶色砂(=S-100暗青灰白色砂)
15. 暗灰色粗砂
- ※ 以上が、奈良時代に遡る堆積層である。

島2SD100土層模式図 (9ライン付近)



島2SD100土層模式図 (7ライン以東)

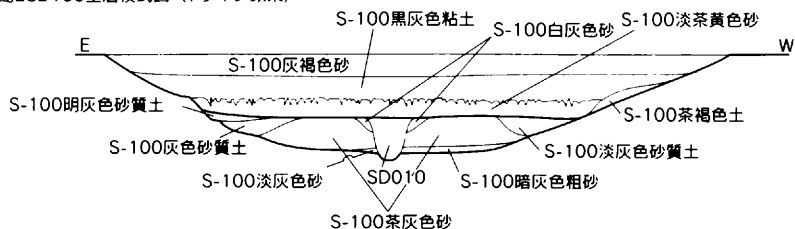


fig.26 島本遺跡第2次調査 各土層模式図

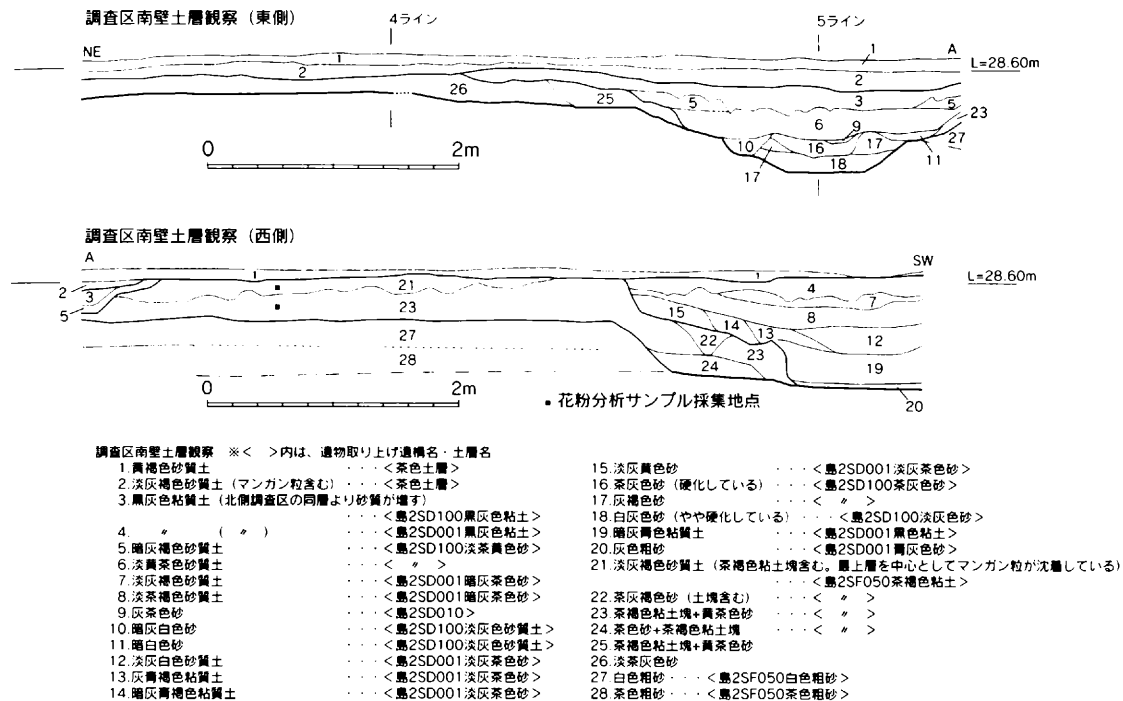


fig.27 島本遺跡第2次調査 調査区南壁土層図 (1/60)

後期に堆積し、この下位は奈良時代に堆積したとみられる。

溝の下位は約2m程度の幅で蛇行しており、南東から北西方向へ向かっての流水作用があったことがわかる。実際、砂・粘土等が複雑に堆積しているのが観察されており、このことを裏付けている。現在も湧水が盛んで、多量の土器類とともに、木製品や木製品加工に伴うチップ等も数多く出土している。遺物には7世紀末～8世紀代のものが含まれているが、7世紀末や8世紀初頭に遡る遺物については、生焼けのものもあることから、周辺に点在する須恵器窯の灰原等から流れ込んだものであろう(本書報告の神ノ前遺跡第2次調査のように、当時須恵器窯跡が西～南の丘陵にあったとみられる)。出土遺物をみると、溝下位の埋没が8世紀代にはじまったことが窺える。

溝の中位では、淡灰茶色砂層の下位に比較的明瞭な不整合面がみられ、これより上層には平安時代後期の遺物が含まれる。この中で黒灰色粘土層の最下層には鋤跡とみられる掘削痕跡を観察しており、この溝跡を利用した耕作が行われていたことを示すものと見られる。黒灰色粘土層が堆積し、その下位に鋤痕跡がみられるのは島2SD100でも同様であり、両者ともほぼ同一標高に位置している。これらは同一の経緯で成立したと考えられ、平安時代後期には耕作地として利用されていたことを示すものとみられる。

島2SD015 (fig.24・29)

調査区北東端で検出した溝である。検出長約7.45m、幅約5.8m、深さ約0.15mを測り、G.N.58° 38' 1" -Wに走行する。砂や砂質土系の埋土で、流水堆積とみられる。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

島2SD019 (fig.24)

調査区北東端で検出した溝である。検出長約8.5m、幅約0.9m、深さ0.1～0.15mを測り、G.N.37° 5' 7" -Wに走行する。溝としているが、ここは黄色シルト層地山と白色粗砂層地山の境であり、層境に溜まったたまり状遺構の可能性もある。ここから平安時代の遺物が出土している。

島本遺跡第2次調査

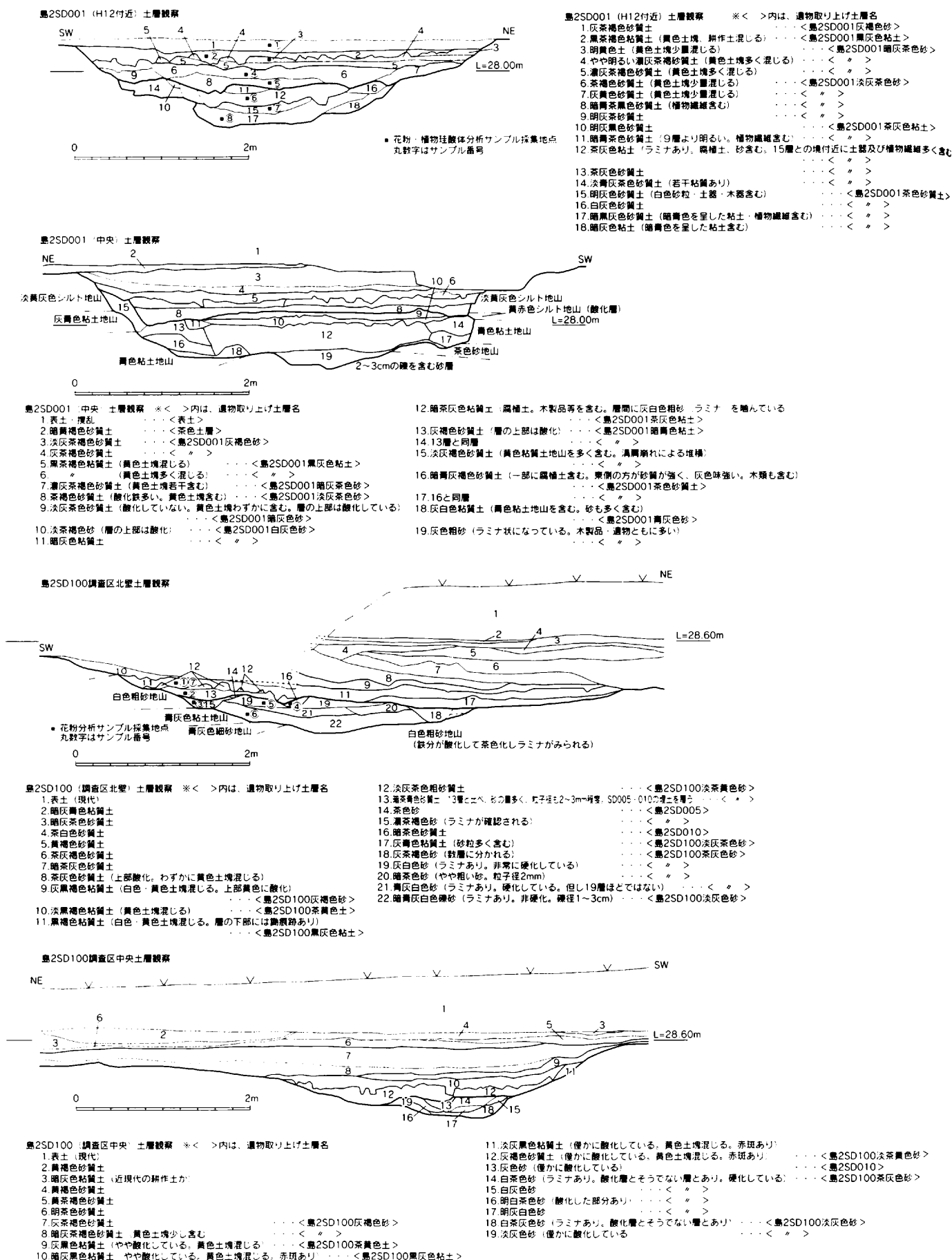


fig.28 島2SD001・SD100土層図 (1/60)

島2SD023 (fig.24)

調査区北東、島2SD100の東脇に沿うように検出された溝である。検出長約6.6m、最大幅約0.91m、深さ約0.05～0.3mを測る。埋土は白色粗砂で、流水堆積とみられる。ここから奈良時代を下限とする遺物が出土している。

島2SD024 (fig.24)

調査区北東、島2SD100の東脇に沿うように検出された溝である。検出長約12.5m、最大幅1.09m、深さ0.3m前後を測る。埋土中には弥生時代の遺物を多く含むが、奈良時代を下限とする遺物も出土している。

島2SD100 (fig.24・26～28、PL.15)

調査区の北東側で検出した大溝である。検出長30.5m、最大幅6.0m、深さ約1mを測り、G.N.38° 2' 14" -Wに走行する。埋土はfig.26に示したとおりであるが、場所によって埋土が変化するため、特に茶褐色土層～淡灰色砂質土層については、堆積範囲が異なる場合その堆積順についてははっきりしない。出土遺物をみると、奈良時代の遺物を下限とする層と平安時代後期の遺物を下限とする層とがあり、淡灰色砂質土層より上層は平安時代後期に堆積し、茶灰色砂層以下は奈良時代に堆積したとみられる。尚、茶灰色砂層出土遺物には平安時代後期頃の可能性もある中国陶器が出土している。この層がこの中国陶器の生産時期まで下る可能性がないわけではないが、この層は比較的締まりの少ない柔かな堆積で、かつ広く堆積しているにも関わらず、それ以外の出土遺物が奈良時代以前のものであることから、中国陶器は何らかの原因で混入した可能性を考えている。

溝の下位は、なだらかに南東から北西方向へ向かって下っている。溝の下位には砂・粗砂等を主体とする層が堆積しているため、流水作用があった可能性もあるが、明確に判断はできていない。溝幅については、当時の埋土が堆積する幅から、少なくとも1.4mはあったことがわかる。

溝の中位の茶灰色砂層の上には、比較的平坦な面が形成されており、白灰色～茶褐色の砂による溝状の遺構を数条検出した（明灰色砂質土・灰色砂質土・白灰色砂・淡灰色砂質土の各層、およびSF005・SF010）。その中でもSF005・SF010としたものについては、特に埋土が硬化していることが注目され、この基盤である茶灰色砂層の脆さからみても、水成堆積によるものとは考えられない。硬化の具合からこれを道路通行痕跡として知られる「帯状硬化」と想定している。硬化の度合いの差があるものの、この面で検出したその他の層についても、帯状の通行痕跡だった可能性もあるだろう。

溝の上位は、島2SD001同様な層序が確認される。この中で、黒灰色粘土層の最下層には鋤跡とみられる掘削痕跡を観察しており、この溝跡を利用した耕作が行われていたことを示すものと見られる。黒灰色粘土層と鋤痕跡は島2SD001でも同様に見られ、両者が同一の過程を経て最終堆積したものとみられる。

道路**島2SF005 (fig.25)**

島2SD100の中位に堆積するSD100茶灰色砂層上に展開する遺構である。検出長3.64m、幅約0.4m、深

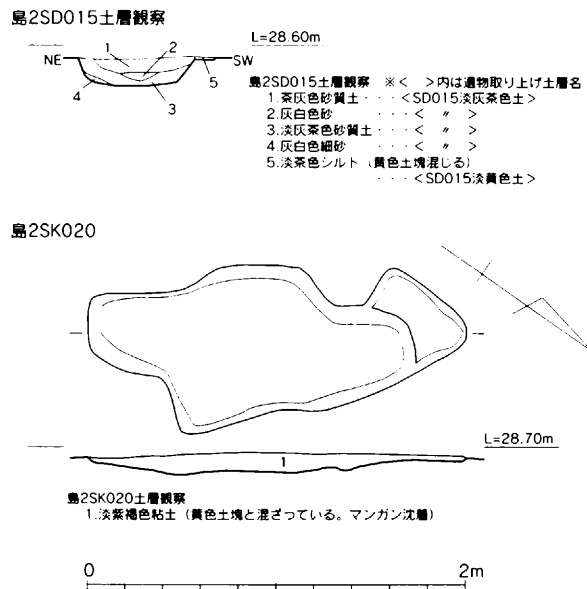


fig.29 島2SD015・SK020実測図 (1/40)

さ約0.1mを測り、およそG.N.35° 45′ -Wに走行する。埋土は茶褐色を呈した砂で、土層をみるとラミナ状に層が重なっている状況が観察される。埋土はかなり硬化しており、この基盤である茶灰色砂層が脆い状況をもても、通常の水成堆積とは考えられないため、これを道路通行痕跡として知られる「帯状硬化」と想定している。ここから奈良時代の遺物が出土しているが、当遺構の南東延長上の同一面上で検出し、同一遺構の可能性もあるSD100淡灰色砂質土の埋土からは、平安時代後期の遺物が出土していることから、当遺構も平安時代後期の遺構と考えている。

島2SF010 (fig.25、PL.16)

島2SD100の中部に堆積するSD100茶灰色砂層上に展開する遺構である。検出長23.1m、幅0.34～0.52m、深さ約0.1mを測り、およそG.N.38° 40′ -Wに走行する。埋土は古い順に淡茶色土→暗茶黒色土の順に堆積している。埋土はかなり硬化しており、この基盤である茶灰色砂層が脆い状況からみても、通常の水成堆積とは考えられないため、これを道路通行痕跡として知られる「帯状硬化」と想定している。ここから平安時代の遺物が出土している。SD100茶灰色砂層の上には、SF005をはじめ同様の帯状に伸びる遺構が多く検出されており、これらと成立が同じと考えると、当遺構も平安時代後期の遺構と推定される。

島2SF050 (fig.24、PL.15・16)

島2SD001・島2SD100の溝に挟まれた空間が、水城西門に向かって伸びている。両溝が機能した奈良時代から平安時代後期までの間、溝に挟まれた空間上には遺構が見られないこともあわせて、これを道路と認識した。この南東延長上の前田遺跡・日焼遺跡などでも同時期・同様の遺構を検出しており、同様に溝に挟まれた空間が直線的に水城西門に向かっていることから、これらは一連の道路遺構とみられる。これらが水城西門に向かう官道とする見解は、ここで本遺構が検出されたことで、より具体的になったといえよう。

道路の占有幅は、両側溝の現存幅を含めると約29.6m、路面は最大検出幅8.03mである。両側溝は流水作用や平安時代後期の掘削等で当初の原型を留めていない可能性があるが、溝の中心をおおよそ割り出すと、その芯々間距離は8.5～11.8m、両溝芯々間の中点を結んで導く道路の走行方向は、G.N.41° 22′ 27″ -Wである。

側溝については、島2SD001・島2SD100それぞれの溝の報告に委ねる。

路面については、地山が露出している部分もあり、また明確な通行痕跡もみられないことから、かなり削平されているとみられる。島2SK020などが道路面にみられる「波板状遺構」と考えられなくもないが、現状では判断しかねる。路面部の大半がこうした状況であるが、調査区南東端でぶし大以上の茶褐色粘土塊を含む部分（SF050茶褐色粘土）を確認したため、トレンチを入れたところ、それが路面造作土（路床か）とみられる堆積層であることを確認した。この層は両側溝の路面側の基盤にもなっている。この下位では、白色粗砂層・茶色粗砂層を確認した。ここから須恵器や土師器の細片も出土していることから、これらも路床の一部と考えている。さらに下位は礫を多く含む砂堆積で、基盤層と考えている。この層は、周囲の地形から、南西側の谷からのびる堆積層の可能性があり、上層で弥生土器が散見されることから、弥生時代に形成された可能性が窺える。

土坑

島2SK020 (fig.24・29)

調査区中央南東寄りの島2SF050の路面中央で検出した。不定型で、長軸長2.0m、短軸長0.86m、深さ0.1mを測る。埋土中に地山土塊を含む。遺物は出土していない。島2SF050の路面上にあることもあり「波板状遺構」と考えられなくもないが、はっきりとはしないため、参考まで記すに留める。

たまり状遺構

島2SX017 (fig.24)

調査区北東隅で検出した。島2SD019を切り込む。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

4. 遺物

溝出土遺物

島2SD001出土遺物 (fig.30～40)

島2SD001灰茶色砂出土遺物 (fig.30)

土師器

丸坏 (1) 口縁部破片。内面は風化しているがミガキの痕跡がみられる。外面は指頭圧痕あり。

島2SD001灰褐色砂出土遺物 (fig.30)

土師器

小皿a1 (2) 口縁部から底部の小破片。器高1.1cmを測る。底部外面はヘラ切り。

島2SD001暗灰茶色砂出土遺物 (fig.30)

須恵器

坏c (5) 口縁部が欠損し、残存高3.6cm、高台径11.2cmを測る。外面の体部と底部の境は角ばり稜をつくる。高台は低く、断面四角形である。

小壺 (4) 底部から体部下位が残存し、残存高3.6cm、高台径5.2cmを測る。体部は内外面とも回転ナデにより調整する。

土師器

坏a (3) 底部のみ残存し、残存高1.6cm、底径7.4cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。底部外面に板状圧痕が残る。

島2SD001淡灰茶色砂出土遺物 (fig.30)

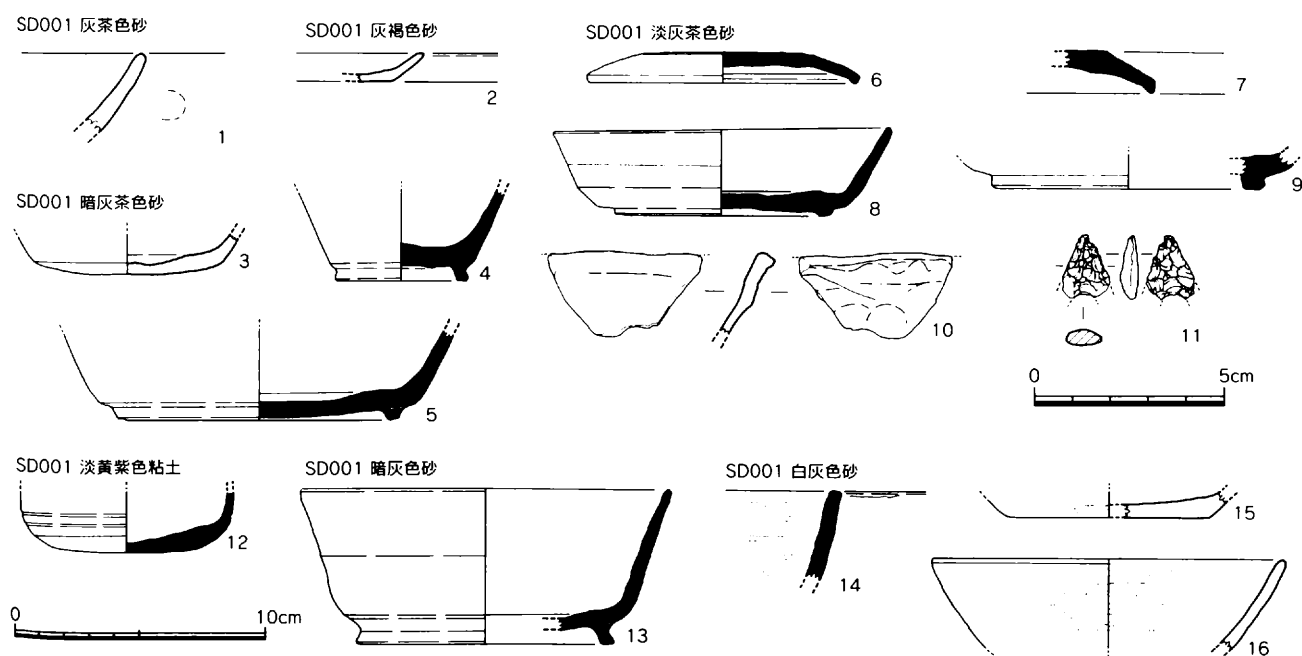


fig.30 島2SD001各層出土遺物実測図 (11は1/2、その他は1/3)

須恵器

小蓋a3（6） 口径10.8cm、器高1.2cm、天井径6.3cm。外面天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。

蓋3（7） 天井部から口縁部の破片で、残存高1.65cmを測る。

坏c（8） 口径13.4cm、器高3.5cm、高台径8.5cm。体部は直線的に外方へ開く。高台は低く、断面四角形である。

皿c×坏c（9） 高台付近の破片で、高台径10.8cmを測る。高台は断面四角形である。

縄文土器

深鉢（10） 口縁部の破片で、残存高3.35cmを測る。焼成は甘く、胎土はやや粗い。内面はナデにより調整し、色調は淡茶色～淡茶褐色を呈す。外面は指頭圧痕がみられ、色調は黒褐色を呈す。

石製品

石鏃（11） 図上下部が欠損し、残存長1.7cm、残存幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。黒曜石製。

島2SD001淡黄紫色粘土出土遺物（fig.30）

須恵器

坏（12） 口縁部が欠損し、残存高2.4cm、底径8.0cmを測る。外面体部下位に沈線が二条廻る。

島2SD001暗灰色砂出土遺物（fig.30）

須恵器

坏c（13） 口径14.6cm、器高6.1cm、高台径10.2cmを測る。体部はやや直立気味に立ち上がり、高台はやや高い。

島2SD001白灰色砂出土遺物（fig.30）

須恵器

鉢（14） 口縁部の破片で、残存高3.6cmを測る。外面は回転ナデ調整し、内面はミガキaを施す。

土師器

坏d（15） 底部が残存し、残存高1.0cm、底径8.0cmを測る。内面はミガキの痕跡がみられる。外面はミガキaを施し、底部を回転ヘラ削りする。

坏a×坏d（16） 口縁部から体部が残存し、口径14.0cm、残存高3.6cmを測る。内外面ともに回転ナデ後、ミガキaを施す。

島2SD001茶灰色粘土出土遺物（fig.31～36）

須恵器

小蓋1（1） 口径11.6cm、残存高2.55cm、天井径7.9cm。つまみの有無は不明。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。かえりは口縁端部よりやや突出し、天井部は丸みを有する。

蓋c1（2） 口径16.4cm、残存高2.95cm、天井径9.4cm。つまみは欠損している。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。かえりは口縁端部よりわずかに後退し、天井部と体部の境は不明瞭である。

小蓋a3（3） 口径11.8cm、器高1.2cm、天井径7.3cm。口縁端部断面は小さいがしっかりした三角形を呈す。

蓋a3（4） 口径13.2cm、器高1.95cm、天井径9.0cm。口縁端部断面は小さいがしっかりした三角形を呈す。

蓋c3（5～7） 5は口径14.0cm、残存高1.95cm、天井径9.1cm。つまみは欠損している。外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。6は口径15.3cm、器高1.5cm、天井径7.3cm。つまみの形状はひし形で、口縁端部断面は小さいがしっかりした三角形を呈す。7は口径19.2cm、残存高1.95cm、天井径10.8cm。つまみは欠損している。天井部外面はヘラ切り後、ハケ状工具を使用して一部に器面調整を行う。

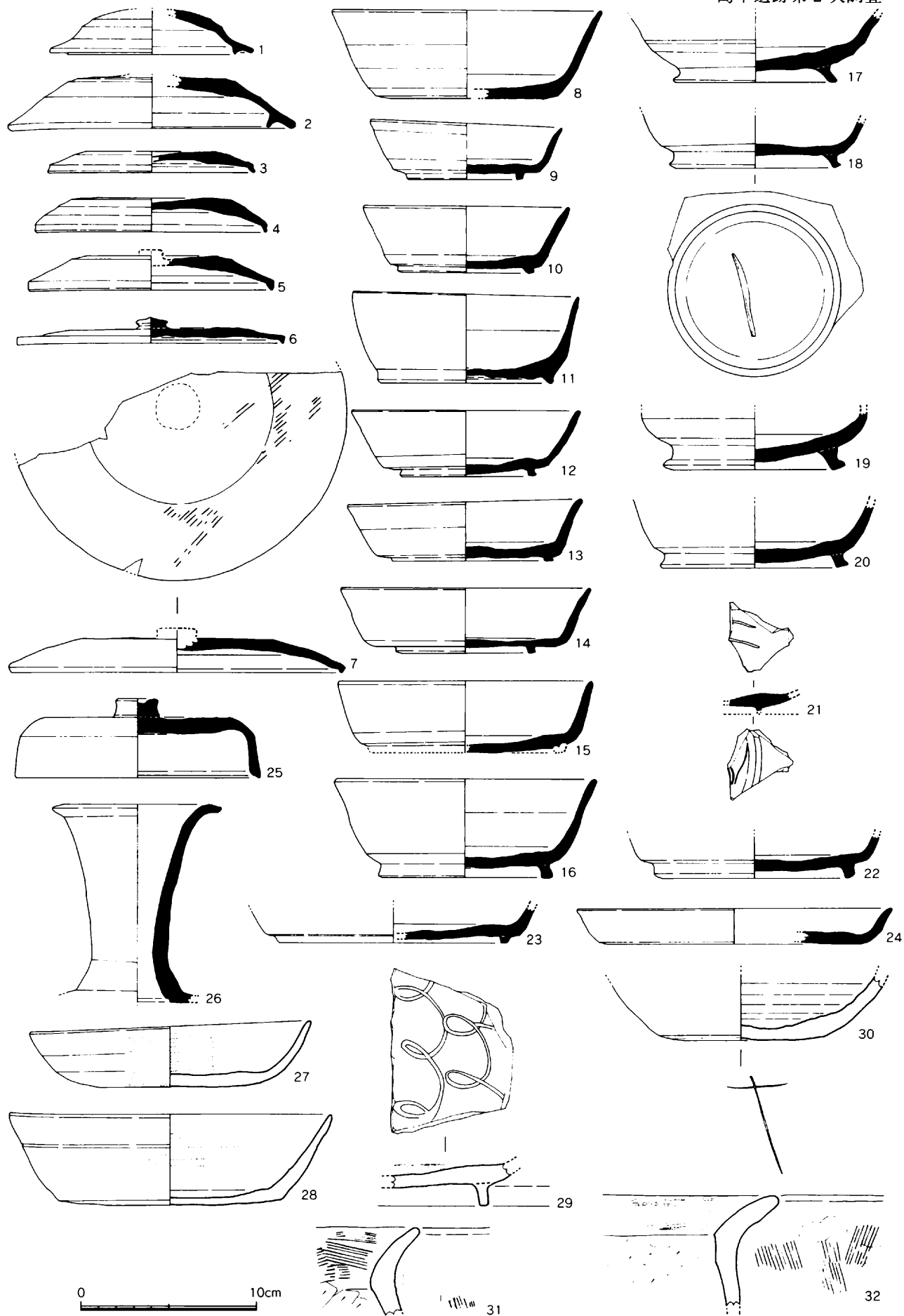


fig.31 島2SD001茶灰色粘土出土遺物実測図その1 (1/3)

坏a(8) 口径15.4cm、器高5.1cm、底径10.4cm。外面の体部と底部の境が角ばり稜をつくる。底部外面は切り離し後、回転ヘラ削りを施す。

小坏c(9) 口径11.0cm、器高3.45cm、高台径6.1cm。外面の体部と底部の境が角ばり稜をつくる。高台は低く、断面四角形を呈す。

坏c(10~22) 10~16は口径11.8~14.9cm、器高3.6~5.6cm、高台径7.8~10.0cmを測る。17~22は口縁部が欠損しており、残存高2.4~3.85cm、高台径9.4~11.4cmを測る。21は底部小破片で、内外面に焼成前のヘラ記号がある。10・22は体部と底部の境が角ばり稜をつくる。17・19は体部下位が丸みを有する。他は体部と底部の境が角に近いが不明瞭である。12・17・18は外面体部と底部の境に回転ヘラ削りを施す。高台はいずれも低く、10~14は断面四角形。18・19・20は端部を拡張させる。

坏c×皿c(23) 口縁部が欠損している。残存高2.05cm、高台径13.0cm。高台は低く、断面四角形を呈す。

皿a(24) 口径17.9cm、器高2.05cm、底径14.4cmを測る。底部外面はヘラ切り後ナデを、体部は内外面とも回転ナデにより調整する。

壺蓋(25) 口径14.0cm、器高4.5cm、天井径10.5cm。体部は内外面ともに回転ナデ調整し、天井部外面は回転ヘラ削りを施す。つまみはやや高いボタン状である。

壺b(26) 口縁部から頸部が残存し、口径9.6cm、残存高11.2cmを測る。頸部は内外面ともに回転ナデを行う。

土師器

坏a(27・28) 27は口径16.0cm、器高3.1~3.8cm、底径13.0cm。体部内外面は粗いミガキaを施し、内面中位及び外面の一部に煤状のものが付着する。二次的に焼成を受けたのであろうか。28は口径18.4cm、器高5.15cm、底径12.6cm。体部内外面は部分的にミガキaを施す。なお体部外面中位に一条の沈線が巡っている。

盤c×大皿c(29) 底部と高台の破片で、残存高2.0cmを測る。内外面にミガキaを施し、内面にはさらに螺旋状の暗文を施す。

甕(31・32) いずれも口縁部から体部の一部が残存する破片で、口縁部を「く」の字に外反させる。31は残存高5.05cm。内面は口縁部を横方向のハケにより調整し、体部にはヘラ削りを施す。外面は縦方向のハケ目を施す。32は残存高6.4cm。内面は口縁部を横方向のハケにより

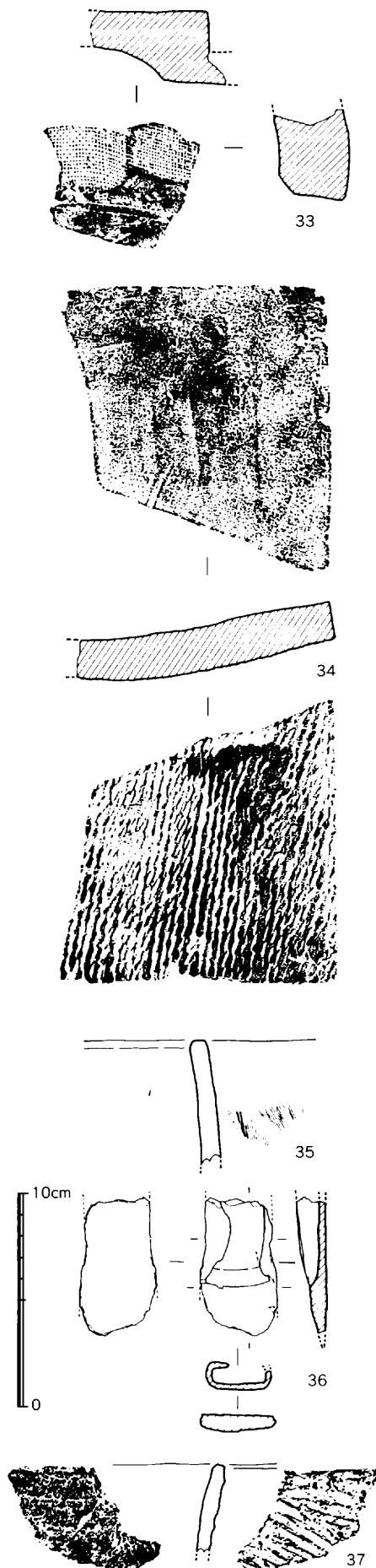


fig.32 島2SD001茶灰色粘土出土遺物
実測図その2 (1/3)

調整し、体部にはヘラ削りを施す。外面は縦方向のハケ目を施し、口縁部と体部の境には指頭痕が残る。

壺 (30) 底部が残存し、残存高3.7cm、底径9.3cmを測る。外面の底部と体部の境にヘラ削りを施す。底部外面はヘラ切りで、焼成前に施したヘラ記号がみられる。

瓦

丸瓦 (33) 残存長6.35cm、残存幅4.25cm、厚さ3.45cm。凸面はナデを施し、凹面には布目痕が残る。

平瓦 (34) 残存長13.7cm、残存幅13.0cm、厚さ2.2cm。凸面は縄目叩き。凹面には布目痕残り、一部をナデ調整する。

竈 (35) 本体の口縁部の破片とみられ、残存高5.8cmを測る。内面は削り後ナデを施し、外面は縦方向のハケ目を施す。

金属製品

鉄斧 (36) 柄が取り付け部分を袋状に曲げるもので、残存長6.5cm、幅3.7cm、厚さ0.9cmを測る。柄の装着部は、内法で2.4cm×0.8cm程度を測る。

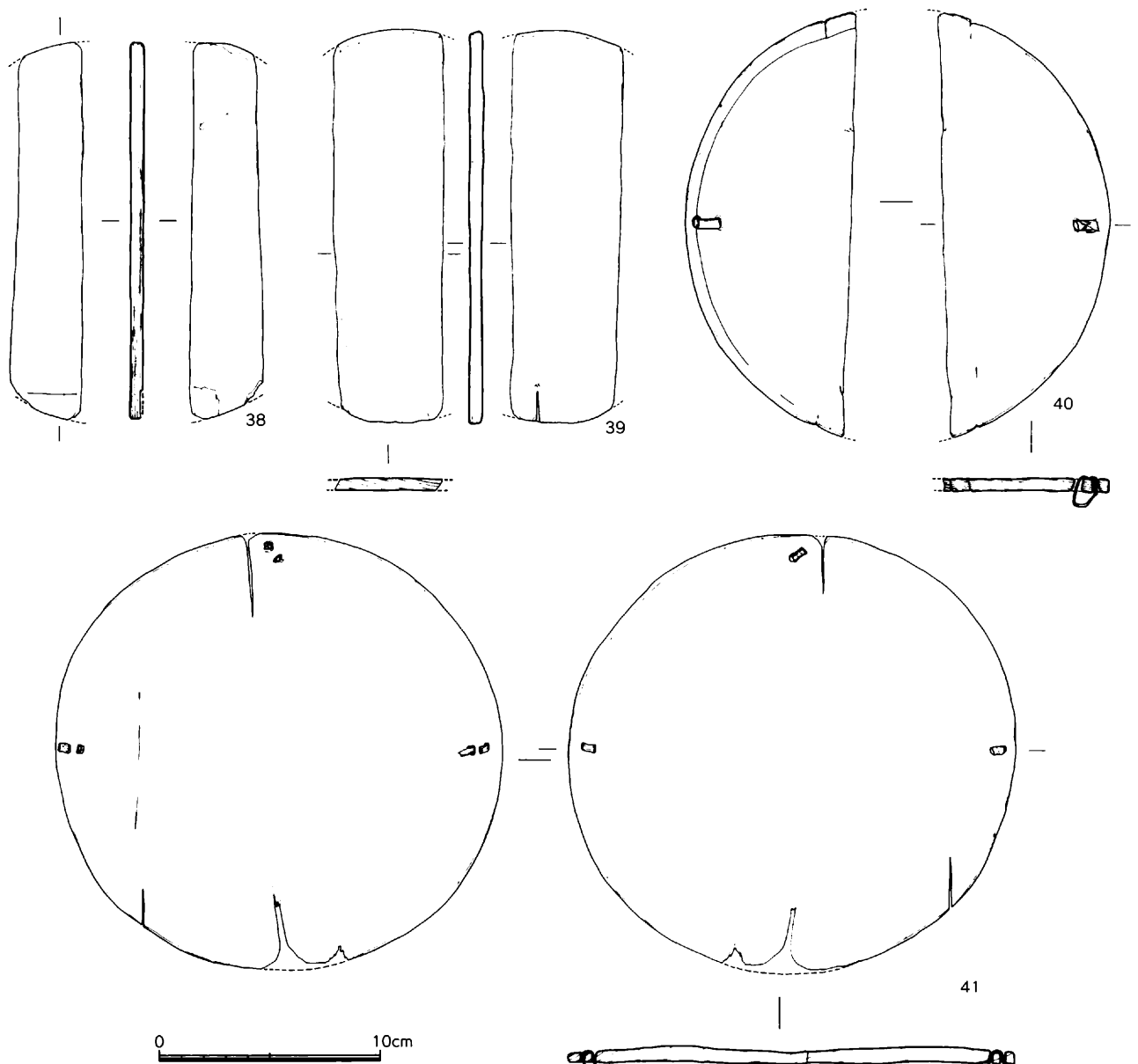


fig.33 島2SD001茶灰色粘土出土遺物実測図その3 (1/3)

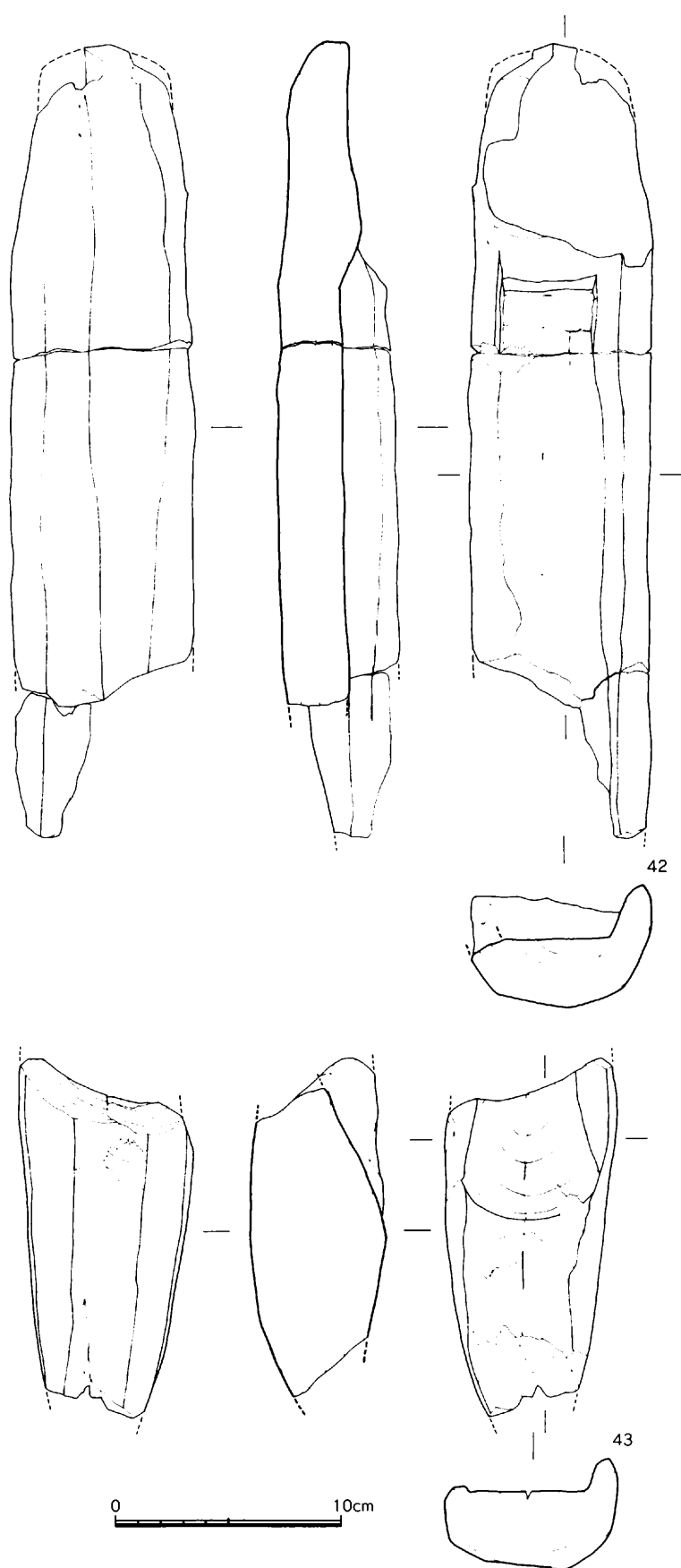


fig.34 島2SD001茶灰色粘土出土遺物実測図その4 (1/3)

縄文土器

深鉢 (37) 口縁部の破片で、残存高4.15cmを測る。外面は叩き、内面は幅2.5cmの工具によるナデ調整を行う。

木製品

曲物 (38~41) 38は底板か蓋板かの判断はつかない。径16.8cm程度、厚さ0.6cmを測る。図左下方に横方向の刃痕が一条みられる。39は径17.5cm、厚さ0.6cm。外縁には側板と結合するための孔があることから、底板と考えられる。40は蓋板で、直径20.0cm、厚さ0.55cmを測る。内面 (図左側) には、外周に沿って0.5cm程内側の位置に、側板の位置を決めるための針書き刻線がめぐる。側板との結合孔は一箇所残存し、綴紐に使用したと思われる桜皮が残る。41は蓋板で、直径19.6~20.0cm、厚さ0.7cmを測る。側板との結合孔が3箇所残存し、綴紐に使用した桜皮が残る。図の下位に欠損している箇所があるが、そこにも結合孔があったことが推測される。

舟形木製品 (42・43)

42は残存長31.1cm、幅7.6cm、厚さ2.7~4.3cm。先端をやや細く削り、内部をくり抜いたものであ

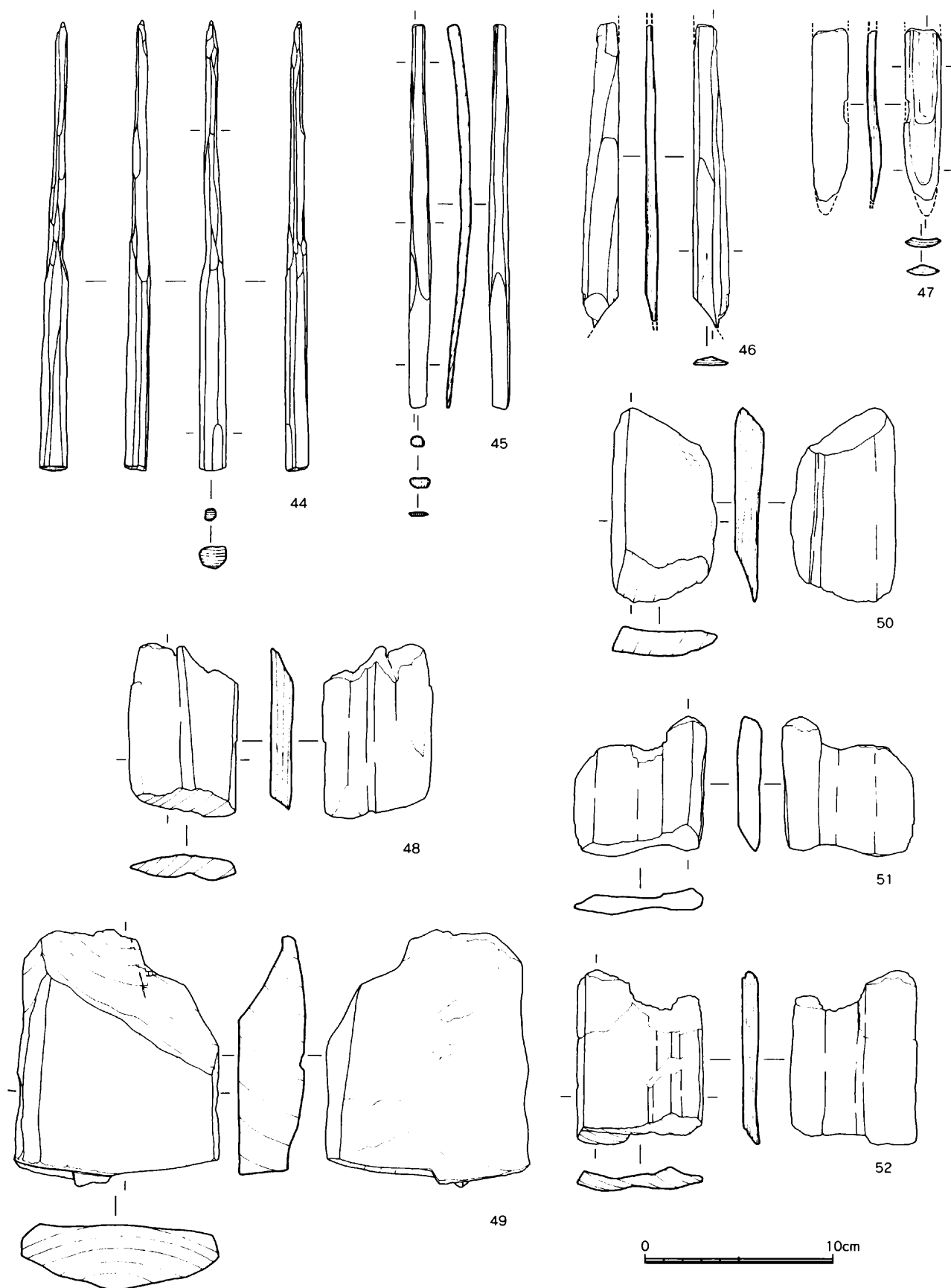


fig.35 島2SD001茶灰色粘土出土遺物実測図その5 (1/3)

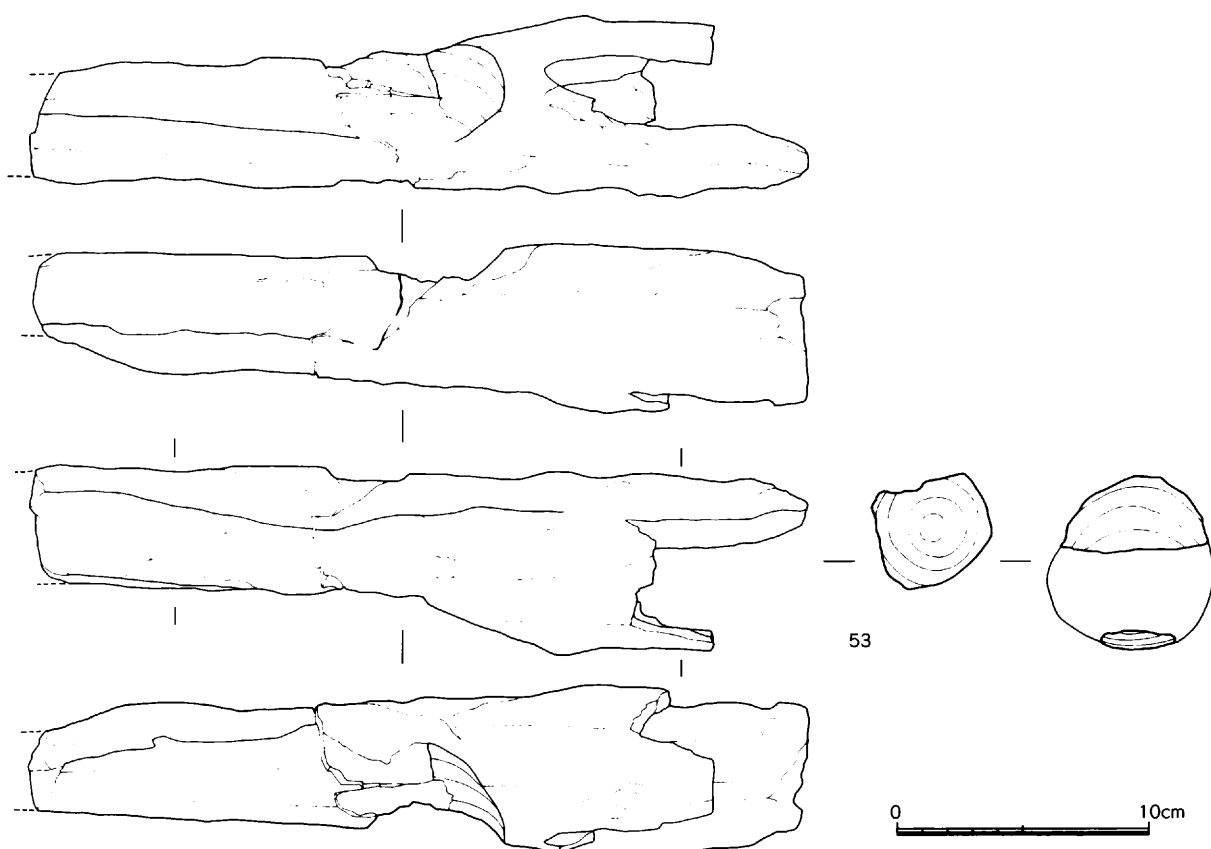


fig.36 島2SD001茶灰色粘土出土遺物実測図その6 (1/3)

る。底部はやや丸みを有するように面取りする。割り貫いた部分の内法は残存長20.9cm、幅3.7cm、高さ2.2cmを測る。43は、出土地点も近いことから42と同一個体とみられる。先端が残存し、残存長14.6cm、幅7.5cm、厚さ5.9cm。割り貫いた部分の内法は幅5.5cm、高さ1.3cmを測る。

棒状製品 (44) ほぼ完存する資料である。長さ23.6cm、直径1.2～1.4cmを測る。全体を削って成形し、中位から先端にかけて細く削り出している。この部分は長さ13.8cmを測り、先端断面径は約0.5cm程度である。

ヘラ状製品 (45～47) 45は完存しており、長さ20.3cm、幅1.1cm、厚さ0.6cmを測る。全体を平らに削って成形し、先端は工具のノミのように薄く削っている。46は残存長16.1cm、残存幅1.9cm、厚さ0.6cm。47は残存長9.1cm、幅1.95cm、厚さ0.5cm。先端から側端部を刃状に削って整形している。

木片 (48～52) 削り屑等とみられる木片である。49はやや大きく、長さ13.4cm、幅11.0cm、厚さ3.5cm、その他は長さ6.85～10.3cm、幅5.55～7.1cm、厚さ1.2～1.6cmを測る。いずれも両端部には加工による切り離しの痕跡が残る。側面は面取りしたように比較的平坦である。こうした木片は、F11地区に集中して多量出土した。

棧木? (53) 端部が二又になっており、残存長30.6cm、幅4.6cm、二又部径6.75cmを測る。二又部はホゾ穴の可能性もある。中位に深い切り込みが入る。図上中位から左側がやや細く、4つの面から形成される。

島2SD001暗青色粘土出土遺物 (fig.37)

須恵器

蓋c3 (1・2) 1は口径14.8cm、器高1.7～1.8cm、天井径10.9cm。扁平なボタン状のつまみを有す

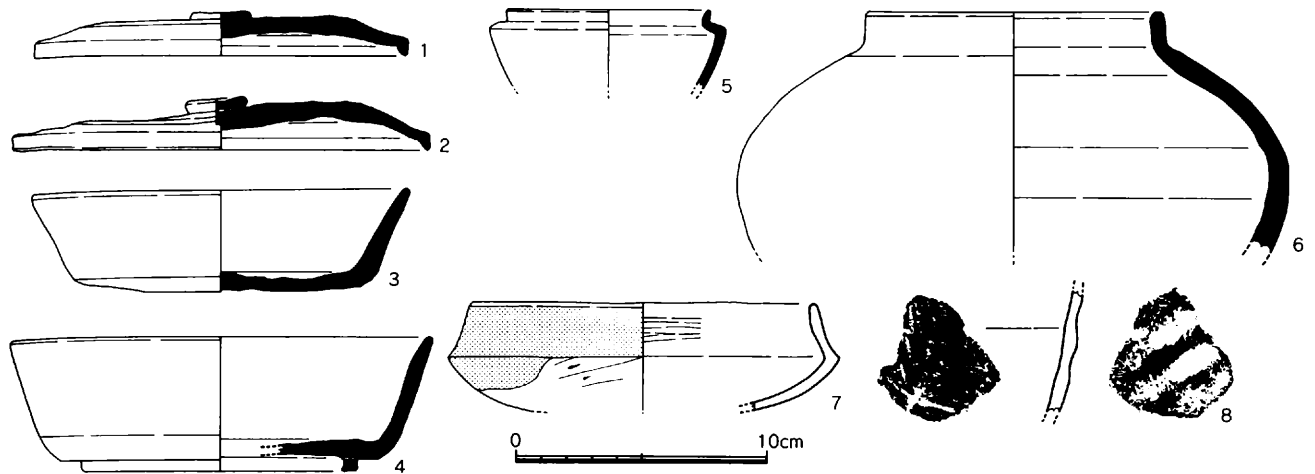


fig.37 島2SD001暗青色粘土出土遺物実測図 (1/3)

る。2は口径16.6cm、器高2.1cm、天井径12.0cm。ややつぶれた擬宝珠状のつまみを有する。いずれも口縁端部断面は大きくてしっかりした三角形で、外面の天井部全面に回転ヘラ削りを施す。

坏a(3) 口径15.0cm、器高3.95~4.1cm、底径12.0cm。体部下位が丸みを有する。

坏c(4) 口径16.8cm、器高5.3cm、高台径10.9cm。外面の体部と底部境は角ばり稜をつくる。高台は低く、断面四角形である。

小壺(5) 口縁部から体部が残存し、口径8.1cm、残存高3.1cmを測る。内外面ともに回転ナデを施す。

壺a(6) 口縁部から体部が残存し、口径10.8cm、残存高9.5cm、胴部最大径21.8cmを測る。焼成はあまく、還元は不良である。内外面ともに回転ナデ調整を施す。

土師器

坏身(7) 口径13.8cm、残存高4.3cm、底径11.0cmを測る。口縁部と体部の境が外方に突出し、角をつくる。外面体部下半はヘラ削りを施す。その他の部位はヨコナデを施し、口縁部内面のみミガキを施す。なお外面の口縁部から体部にかけて黒色の漆とみられるものを塗布している。これは遺構の埋没時期を示すものではないが、市内では出土例が少ないため報告した。

製塩土器

煎熬土器(8) 体部の小破片で、残存高4.85cmを測る。内面は叩き、外面は強い指押えの痕が残る。胎土のキメはやや細かく、0.2~1.0mmの砂粒を若干含み、緻密な雲母片を少量含む。

島2SD001茶色砂質土出土遺物 (fig.38~41, PL.13・14)

須恵器

蓋c3(1~5) 口径14.6~16.2cm、器高1.5~2.85cm、天井径6.8~11.0cm。1~3は扁平なボタン状のつまみを、4は扁平な擬宝珠状のつまみを有する。5のつまみは欠損している。2・4・5は天井部外面全体に、3は外面の天井部と体部の境に回転ヘラ削りを施す。

蓋3(6) 口径21.2cm、残存高1.65cm、天井径13.1cm。つまみの有無は不明である。口縁端部断面は、大きな三角形を呈す。天井部外面に回転ヘラ削りを施す。

坏a(7・8) 7は口径14.6cm、器高5.6cm、底径11.4cm。口縁部外面に沈線を有する。体部下位が丸みを有する。8は口径17.0cm、器高3.8cm、底径13.8cm。外面の体部と底部境は角ばり、稜をつくる。

坏c(9~11) 9は口径12.2cm、器高4.0cm、高台径8.2cm。体部下半に丸みを有す。高台は低く、わずかに外方に開く。10は口径14.0cm、器高4.05cm、高台径9.8cm。外面の体部と底部境は角ばり稜をつ

島本遺跡第2次調査

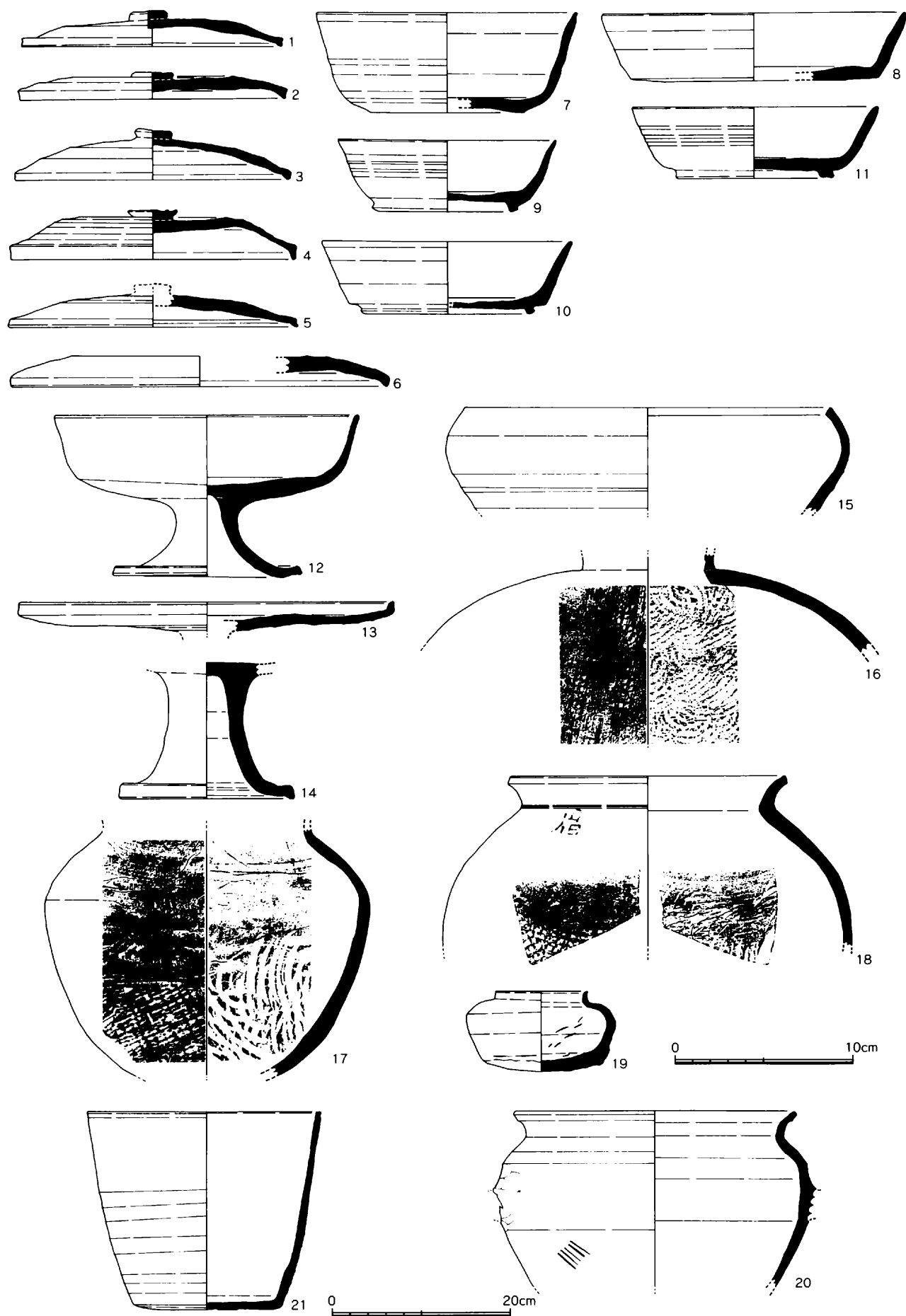


fig.38 島2SD001茶色砂質土出土遺物実測図その1 (20・21は1/6、その他は1/3)

くる。高台は低く、断面四角形である。11は口径13.8cm、器高4.0cm、高台径8.8cm。底部と体部境は角に近いが不明瞭で、高台は低く、断面四角形である。体部外面には沈線状のものがみられる。底部外面に焼成前についた傷とみられる痕跡あり。

高坏（12～14） 12は口径17.0cm、器高9.0cm、脚端部径10.6cm。13は皿部が残存し、口径21.0cm、残存高1.65cmを測る。皿部底部外面に回転ヘラ削りを施す。14は脚部が残存し、残存高7.65cm、脚端部径9.8cmを測る。脚部外面には絞り痕が残る。

鉢a3（15） 口縁部から体部が残存し、口径20.4cm、残存高5.65cm、最大径22.6cmを測る。体部外面に回転ヘラ削りを施す。

横瓶（16） 残存高5.5cmを測る。体部内面は同心円文の当て具痕がみられ、体部外面は、叩きを施した後、縦方向のカキ目またはナデを粗く施す。

小甕（17・18） 17は頸部から体部が残存し、残存高13.7cm、体部最大径18.2cmを測る。体部外面上半はカキ目、下半は叩き調整し、体部内面下半は当て具痕が残る。18は口縁部から体部が残存し、口径15.6cm、残存高9.5cmを測る。体部内外面に叩きを施す。体部上位に「田□」の墨書あり。2文字目は不明だが「伯」の可能性もある。

小壺（19） 口径5.2cm、器高4.5cm、底径6.6cm。内外面ともにナデ調整し、内面には爪痕とみられる傷が残る。

壺c（20） 口縁部から体部が残存し、口径31.6cm、残存高19.75cmを測る。把手は欠損している。外面体部下半には叩きが見られる。

鉢b（21） 口径26.1cm、器高22.3cm、底径16.4cm。体部外面の中位以下に回転ヘラ削りを施す。回転ヘラ削りを施した部分の一部は、ミガキ調整を施したように光っている。

土師器

蓋3（22） 口径19.0cm、残存高1.75cm。天井部が欠損し、つまみの有無は不明。天井部から体部内外面にミガキaが見られる。

皿b（23） 口縁部から体部の破片で、残存高2.9cmを測る。現存部分については、内外面ともにヨコナデ調整する。

把手（24） 把手のみの破片で、残存長5.4cm、幅1.5cm、厚さ2.1cmを測る。ナデによる成形で、一部をハケ状の工具で調整する。

甕（25） 口縁部から体部が残存し、口径23.3cm、残存高6.75cmを測る。口縁部及び体部外面は横ナデ、内面はヘラ削りを行う。

壺（26） 体部下半から底部が残存し、高台は欠損している。残存高7.35cm、底径9.2cm。体部外面はミガキaを施す。底部外面には煤が付着する。内面には漆とみられるものが全面に付着する。

縄文土器

浅鉢（27） 口縁部から体部の破片で、口径34.8cm、残存高4.9cmを測る。口縁部内外面に横ナデ後ミガキを施し、体部内外面にはミガキcを施す。

新羅土器

壺（28・29） 壺と推定されるものの、いずれも部位が判然としない。ここでは肩部と想定して、図示・報告する。いずれも焼成・還元ともに良好。外面に突帯をめぐらせ、突帯の下位に竹管状の文様が押印される。28は残存高2.1cm。内面は自然釉がかかる。内外面ともに回転ナデにより調整し、外面下方にはカキ目を施す。29は残存高2.1cm。胎土のキメはやや細かく、0.2～1.5mmの砂粒をやや多く含む。内面は青灰白色、外面は灰白色～黒灰色で、内外面ともに回転ナデにより調整する。

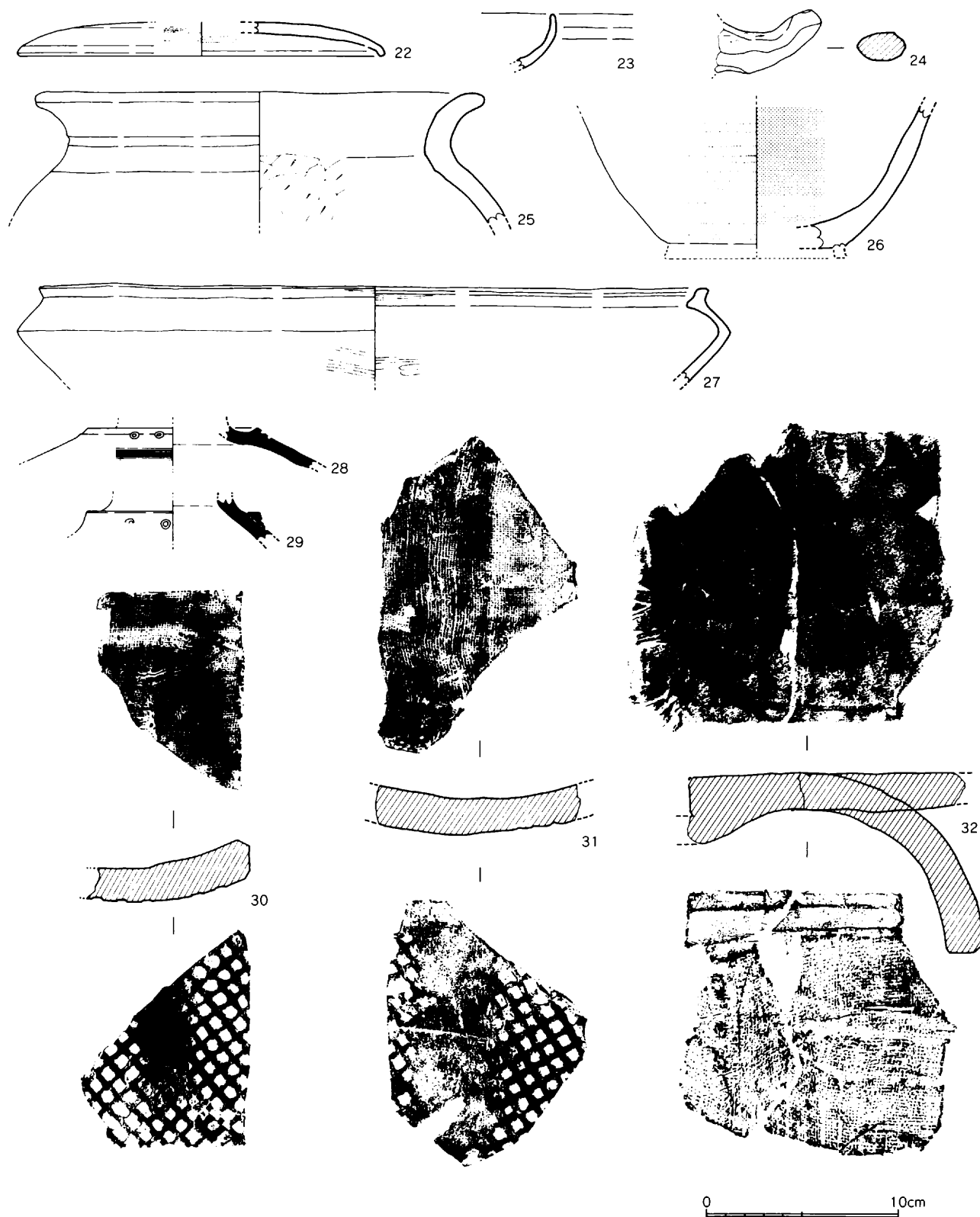


fig.39 島2SD001茶色砂質土出土遺物実測図その2 (1/3)

瓦

平瓦 (30・31) 30は残存長11.2cm、残存幅7.95cm、厚さ2.2cm。凸面は格子叩きを施す。凹面は布目痕、模骨痕が残り、一部にナデがみられる。31は残存長12.85cm、残存幅10.8cm、厚さ2.4cm。凸面は格子叩きで、凹面は布目痕、模骨痕がみられる。須恵質に仕上がる。

丸瓦 (32) 残存長14.9cm、残存幅13.4cm、厚さ3.5cm。凸面の叩きの痕は工具によりナデ消し、凹

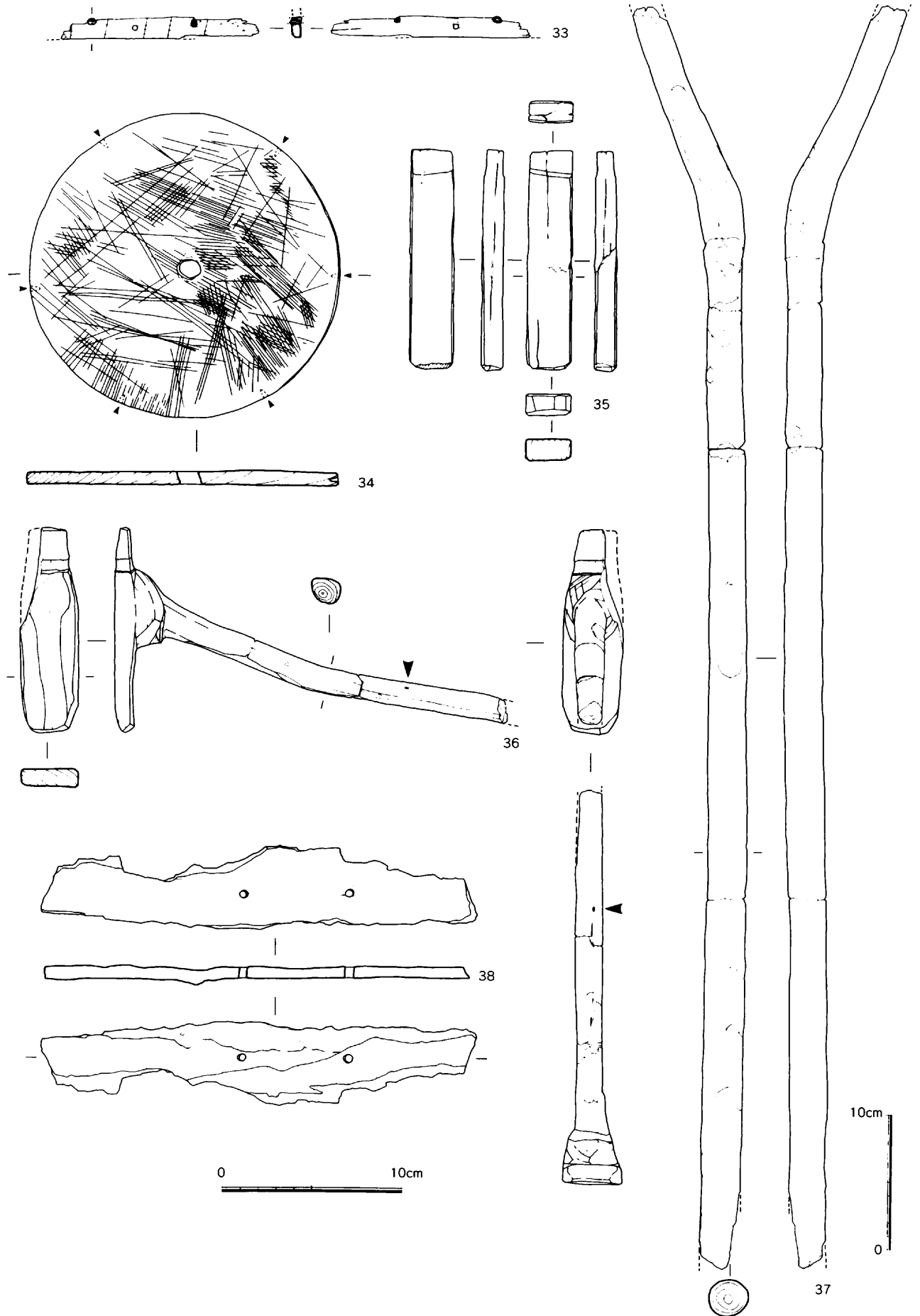


fig.40 島2SD001茶色砂質土出土遺物実測図その3 (37は1/4、その他は1/3)

面は布目痕が残る。内側から切込みを入れて分割し、切断面と破面を削りにより面取りする。玉縁は欠損している。

木製品

曲物（33） 底部の一部が残存する破片で、残存高1.2cm、厚さ0.5cmを測る。内面は斜平行線にケビキを施す。2～3cmの間隔で孔を穿ち、木釘が残る。周辺から0.4cm幅の桜皮が一緒に出土しており、この曲物の綴紐とみられる。

なお、33のほかに直径約60cmの大型円形曲物がこの層から出土しているが、遺憾ながら現在その所在がわからなくなっている。その出土状況については、PL.14を参照いただきたい。

曲物底板（34） 径16.9×17.3cm、厚さ0.8cmを測る。中央に孔を穿ち、側端面に側板との結合孔が均等に6箇所残る。内面に無数の刃痕がつく。

棒状製品（35） 長さ12.2cm、幅2.5cm、厚さ1.2cm。全体を長方形に形成し、図上上部先端をやや細く削り出す。

横斧の柄（36） 基部径は図上天地4.3cm、図上左右1.7cm、斧台長11.35cm、斧台幅3.35cm、斧台厚1.15cm、残存柄長19.8cm、柄径1.6cmを測る。基部外面は一部黒色に変色する。鉄斧の痕か。斧台は削り形成の痕跡が残る。柄の中央付近に1×2mmほどの孔を穿ち、貫通させている。

柄?（37） 残存長94.3cm、径2.4～3.25cm。何かの柄に利用されたものと考えられる。加工の痕跡はみられない。

桜の樹皮（38） 厚さ0.8cmほどの桜の皮の破片で、0.4～0.45cmの孔が2箇所に穿たれている。

折敷（39） 方形の曲物で、長さ50.0cm、残存幅21.7cm、器高20.7cm、内法は長さ49.0cm、深さ20.5cmを測る。側面の中央に約6.2×4.2cmの孔を穿つが、目的は不明。側面の中央下方には補修のためと思われる孔と綴紐に使われた桜皮が残る。側面下位に底板の痕と思われる痕跡がみられる。内面の隅に斜平行線にケビキをいれる。側板の綴合せ部分は1.5cmの間隔で2箇所ずつ均等に孔を穿つ。

島2SD001黒色粘土出土遺物（fig.42）

須恵器

小蓋1（1） 口径11.6cm、器高1.8cm、天井径7.3cm。かえりは口縁端部より下方へ突出し、外面の天井部と体部境は稜をなす。天井部外面に焼成前に施したヘラ記号とみられる痕跡がある。

大甕a（2） 口縁部から体部が残存し、口径43.6cm、残存高23.8cmを測る。体部外面は叩き、内面には当て具痕が残る。頸部外面に2条の沈線を施し、間に波状文を入れる。

島2SD001青灰色砂出土遺物（fig.42）

土師器

蓋4（3） 口縁部から体部の破片で、残存高2.2cmを測る。口縁端部は丸みを帯びた三角形で、内面に口縁端部を形作るための沈線を有す。内外面ともにミガキがみられる。

島2SD001暗黒灰色粘土出土遺物（fig.42）

須恵器

高坏（4） 坏部底部から脚部が残存し、残存高5.45cm、脚部端部径11.8cmを測る。脚部内面には絞り痕がみられる。

壺（5） 高台を有する壺で、体部から底部が残存し、残存高8.3cm、高台径12.4cmを測る。底部内面には直径1.5cm程度の円形の当て具痕が残る。外面の体部と底部境には回転ヘラ削りを施し、底部外面はヘラ切り後、粗いヘラ削り調整する。

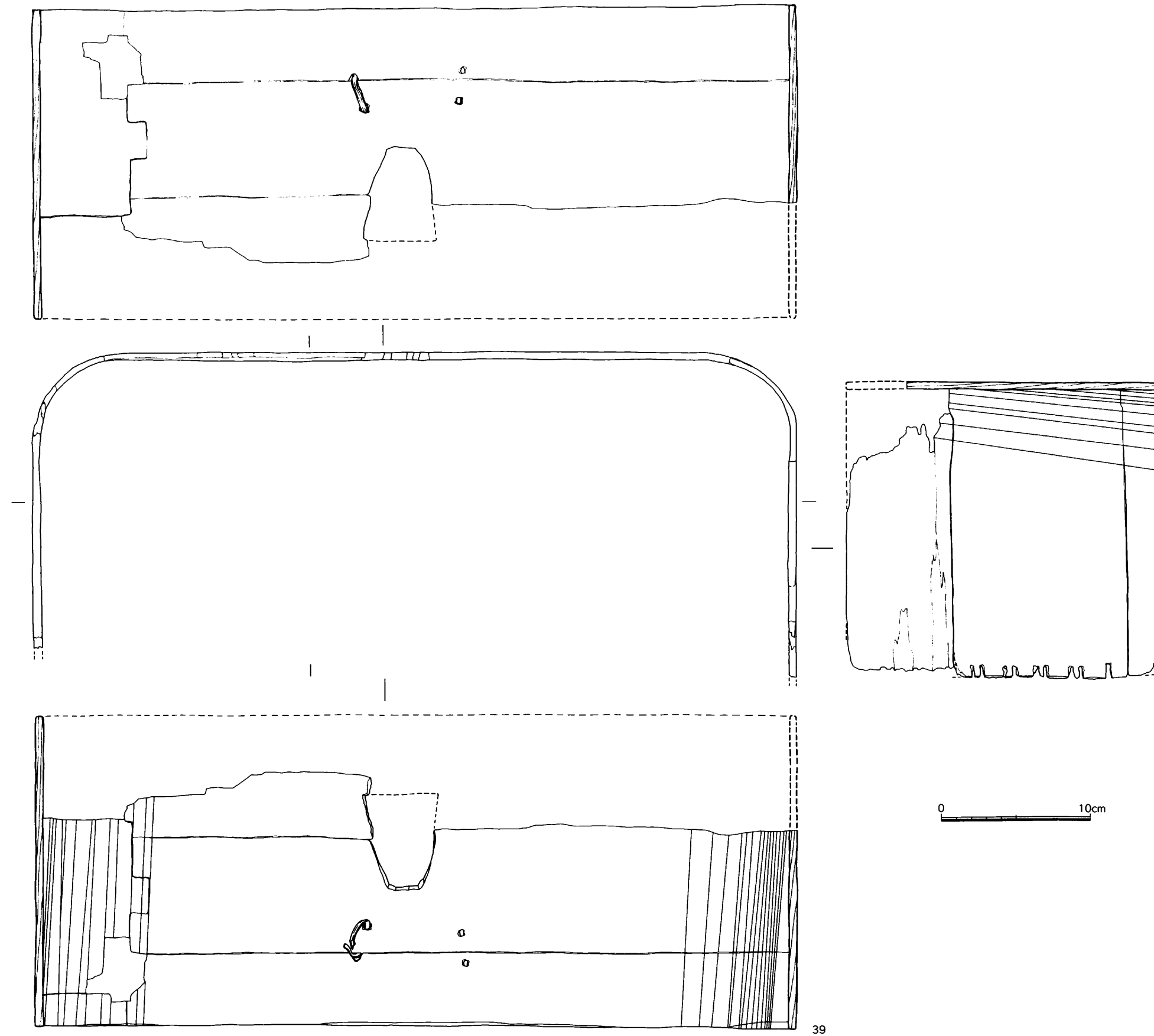


fig.41 島2SD001茶色砂質土出土遺物実測図その4 (1/3)

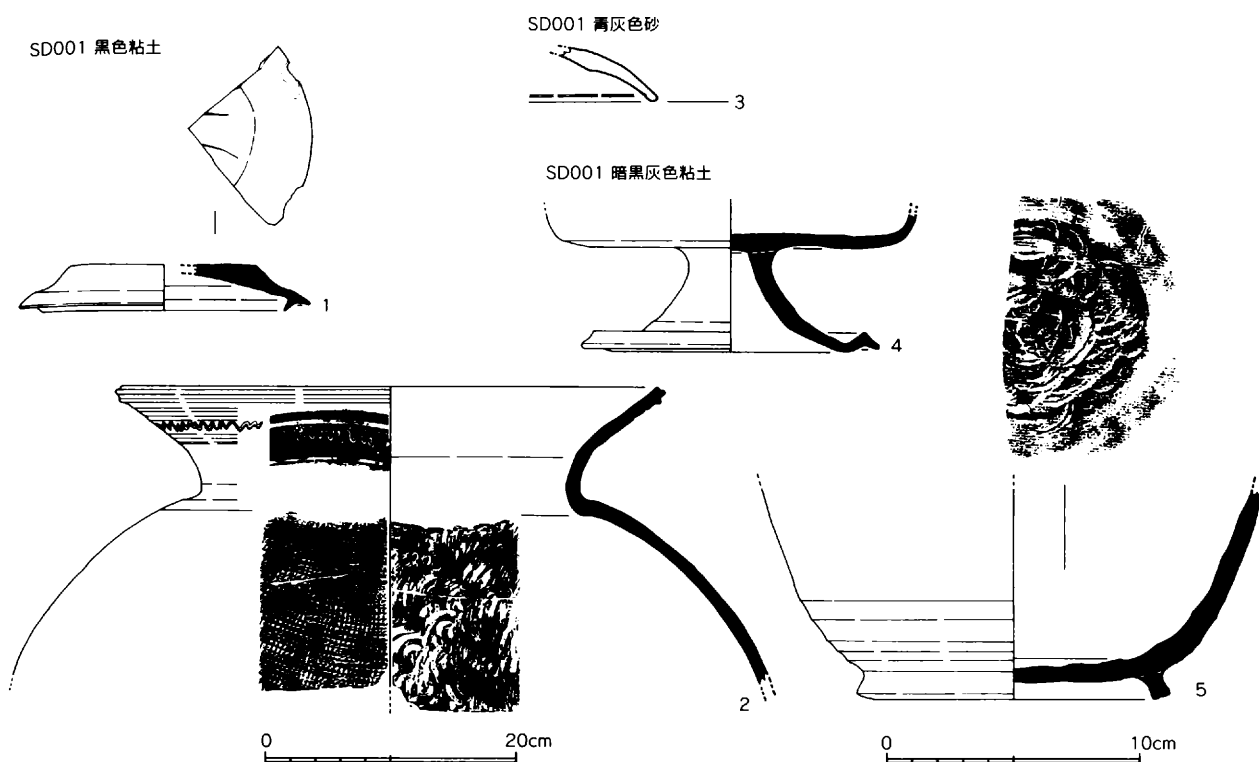


fig.42 島2SD001黒色粘土・青灰色砂・その他出土遺物実測図（2は1/6、その他は1/3）

島2SD100出土遺物

島2SD100灰褐色砂出土遺物 (fig.43)

土師器

小皿a1（1・2） 1は口径8.9cm、器高1.1cm、底径7.2cm。底部外面に板状圧痕あり。2は口径9.4cm、器高1.0cm、底径6.0cm。

白磁

碗（3） 口縁部の小破片で、残存高2.6cmを測る。IV類。

土製品

棒状製品（4） 残存長6.3cm、残存径4.15×3.2cm。焼成はあまく、色調は茶灰色。胎土は粗く、5mm以下の白色砂粒を含む。

島2SD100茶黄色土出土遺物 (fig.43)

土製品

棒状製品（5） 残存長7.4cm、径4.1×2.9cm。石または須恵器片が付着している。焼成はあまく、色調は灰白色～淡茶色。胎土のキメは粗く、2～3mm前後の砂粒を含む。須恵器片とみられるものも胎土中に含まれている。

島2SD100黒灰色粘土出土遺物 (fig.43)

土師器

小皿a1（6～8） 口径9.6～10.6cm、器高0.9～1.3cm、底径7.6～8.0cmを測る。6・8は体部外面を回転ナデ調整し、内面底部にナデがみられる。7は風化のため調整不明。

白磁

碗（9） 口径17.4cm、器高6.7cm、高台径7.4cm。体部外面を回転ヘラ削りし、高台は削り出し高台。見込みに沈線を有する。IV-a類。

島本遺跡第2次調査

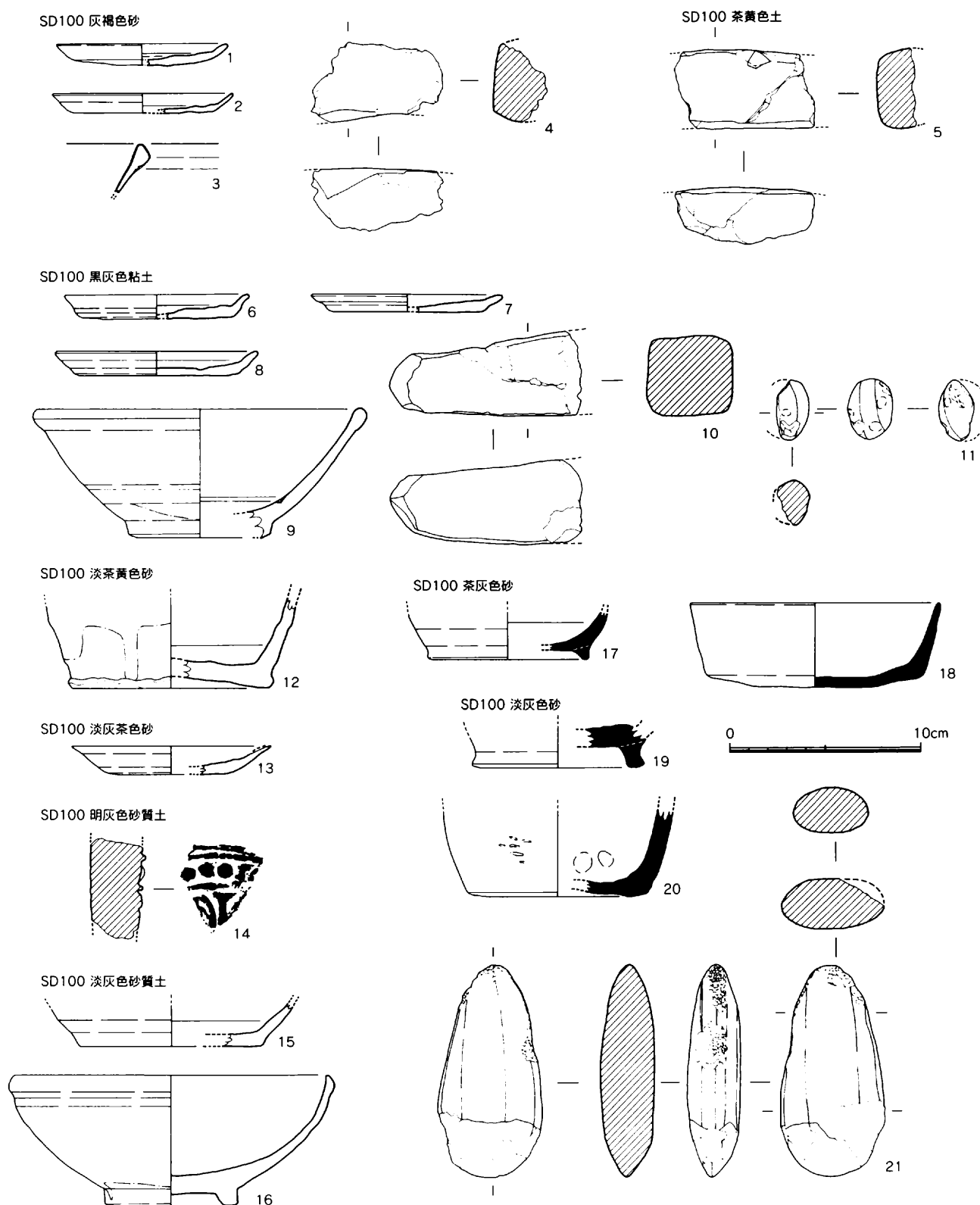


fig.43 島2SD100出土遺物実測図 (1/3)

土製品

棒状製品 (10) 残存長10.0cm、径4.5×4.5cm。焼成はあまく、色調は茶白色。胎土は粗く、0.5mm以下の白色砂を含む。

土玉 (11) 図の天地長3.1cm、残存径1.3×1.2cm。一部に指頭痕とみられる痕跡が残る。胎土は粗く、2mm以下の白色砂粒を含む。色調は明灰白色を呈す。

島2SD100淡茶黄色砂出土遺物 (fig.43)

中国陶器

壺(12) 底部が2分の1ほど残存する資料で、残存高4.8cm、底径10.7cmを測る。素地は淡灰色で、砂粒が混ざりやや粗く、ごくわずかに黒色粒を含んでおり、C群の特徴を備える。釉調は茶黒色～黒褐色で不透明。釉垂れの部分はやや青味がかかる。未分類資料である。

島2SD100淡灰茶色砂出土遺物 (fig.43)

土師器

小皿a1(13) 口径10.4cm、器高1.5cm、底径5.6cm。体部内面は剥離し、外面は磨耗により調整不明。

島2SD100明灰色砂質土出土遺物 (fig.43)

瓦

軒丸瓦(14) 珠文帯及び複弁とみられる花卉を含む瓦当面の一部が残存する破片で、残存高5.25cm、残存幅4.35cm、厚さ2.9cmを測る。

島2SD100淡灰色砂質土出土遺物 (fig.43)

土師器

坏a(15) 体部から底部の一部が残存し、残存高2.2cm、底径9.4cmを測る。内面の体部と底部の境にナデがみられるが、それ以外は調整不明。内外面ともに白灰色を呈す。

白磁

椀(16) 口径17.0cm、器高6.8cm、高台径6.95cm。体部下半を回転ヘラ削りし、削り出し高台を有する。椀Ⅱ-1類。

島2SD100茶灰色砂出土遺物 (fig.43)

須恵器

坏a(18) 口径13.1cm、器高4.5cm、底径11.2cm。体部は直立ぎみに立ち上がる形態である。内外面ともに回転ナデにより調整し、底部外面は板状圧痕が残る。

坏c(17) 体部下位から底部が残存し、残存高2.5cm、高台径8.4cmを測る。高台は肥大せず、端部を丸くつくる。

島2SD100淡灰色砂出土遺物 (fig.43)

須恵器

坏×壺(19) 底部が残存する破片で、残存高2.2cm、高台径9.0cmを測る。調整は不明。

甕×壺(20) 体部下位から底部が残存する破片で、残存高4.5cm、底径9.4cmを測る。外面は、体部に叩き、体部と底部境に削りまたはヨコナデがみられる。内面は体部にヨコナデ、体部と底部境に指頭痕がみられる。

石製品

磨製石斧(21) 図の天地長11.0cm、幅5.4cm、最大厚2.8cm。刃部及び両側面は縦方向に研磨しており、図の上部から側面にかけて敲打痕がみられる。緑色片岩製。

島2SD015出土遺物 (fig.44)

白磁

椀(1～3) 1は口縁部の破片で、残存高2.5cmを測る。Ⅳ類。2は底部の破片で、残存高1.7cm、高台径7.2cmを測る。削り出し高台を有する。Ⅱ類。3は高台付近の破片で、残存高1.7cm、高台径6.0cmを測る。内面に櫛目文があり、削り出し高台を有する。Ⅵ-b類。いずれも淡灰茶色土より出土。

島2SD019出土遺物

(fig.44)

土師器

碗c(4) 底部の破片で、残存高2.0cm、高台径6.6cmを測る。調整は不明。灰褐色砂より出土。

島2SD023出土遺物

(fig.44)

須恵器

坏c(5) 口径12.2cm、器高5.1cm、高台径8.5cm。体部は直立ぎみに立ち上がり、高台は断面四角形である。

高坏(6) 脚部端部の破片で、残存高1.2cm、脚部端径10.4cmを測る。

土師器

甕a(7) 口縁部から頸部の破片で、残存高4.6cmを測る。体部内面はヘラ削り、体部外面はハケ目を施す。

石製品

石鏃(8) 残存長2.2cm、幅1.55cm、厚さ1.3cm。図上上部が欠損している。安山岩製。

島2SD024出土遺物

(fig.44)

須恵器

蓋1(9) 口縁端部の小破片で、残存高0.7cmを測る。

坏(10) 口縁部の破片で、残存高2.7cmを測る。調整は不明。

道路出土遺物

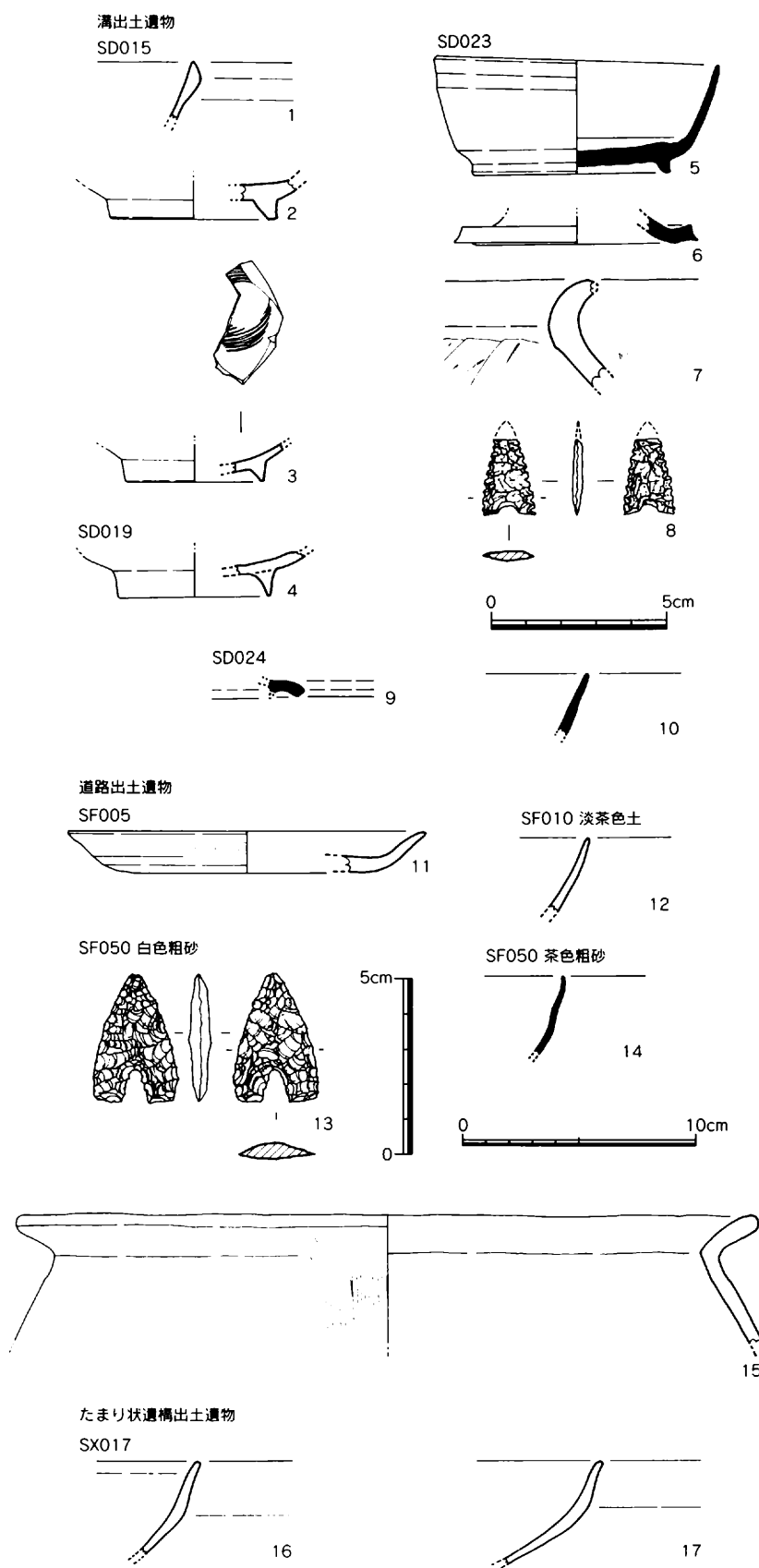


fig.44 島本遺跡第2次調査 その他の遺構出土遺物実測図 (8・13は1/2、その他は1/3)

島2SF005出土遺物 (fig.44)

土師器

皿a (11) 口径15.4cm、器高1.8cm、底径11.2cm。体部外面にミガキaを施す。内面は調整不明。

島2SF010出土遺物 (fig.44)

島2SF010淡茶色土出土遺物

土師器

坏×椀 (12) 口縁部の破片で、残存高3.2cmを測る。磨耗により調整は不明。

島2SF050出土遺物 (fig.44)

なお、ここからは以下の報告以外にも土師器片などが出土している。(付属CD-ROM中に写真掲載)

島2SF050白色粗砂出土遺物

弥生土器

甕 (15) 口縁部から体部が残存し、口径31.8cm、残存高5.5cmを測る。外面の頸部から体部にハケ目を施す。内面は磨耗により調整不明。

石製品

石鏃 (13) 長さ3.65cm、幅2.45cm、厚さ0.5cm。腰岳産とみられる黒曜石製である。

島2SF050茶色粗砂出土遺物

須恵器

坏 (14) 口縁部から体部の破片で、残存高3.2cmを測る。内外面ともに回転ナデにより調整する。

たまり状遺構出土遺物

島2SX017出土遺物 (fig.44)

土師器

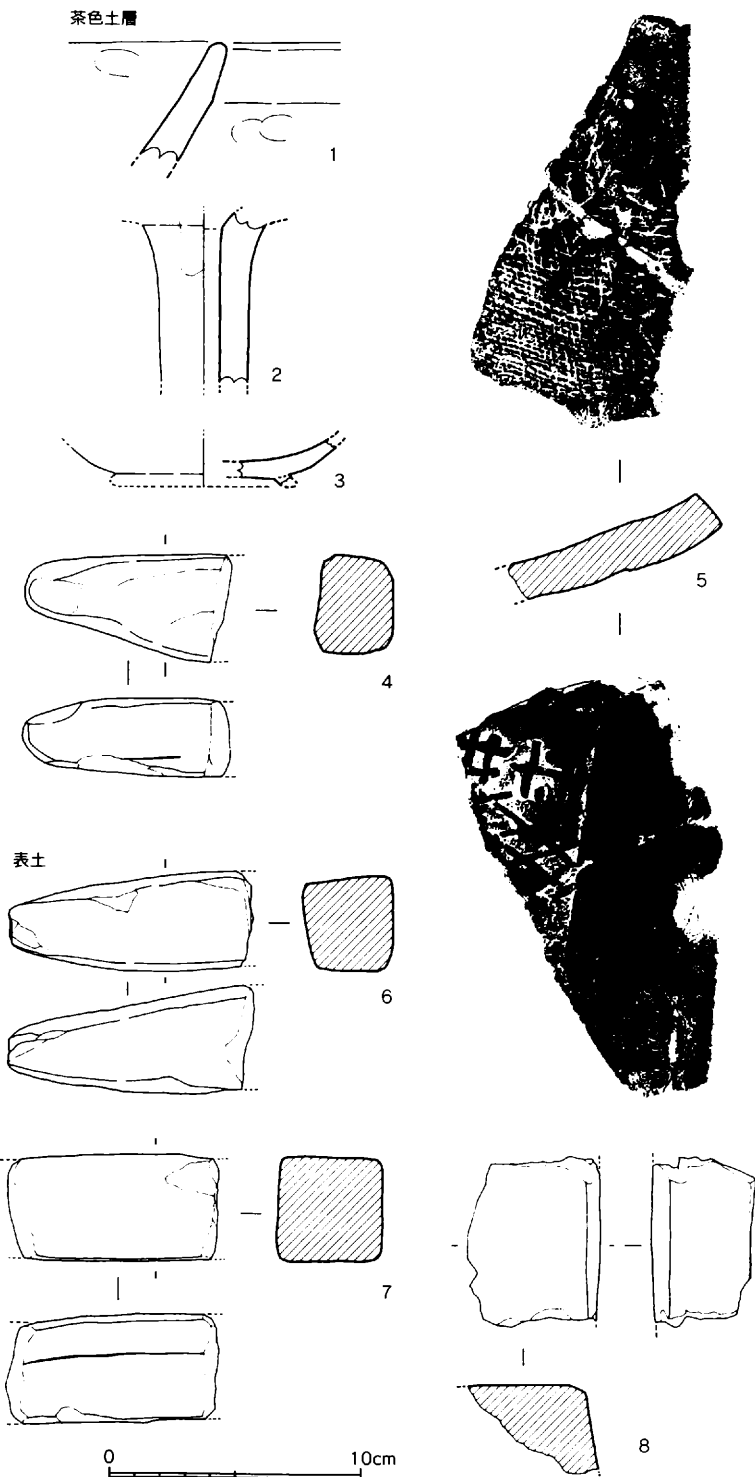


fig.45 島本遺跡第2次調査 茶色土層・表土出土遺物実測図 (1/3)

丸坏（16・17） いずれも口縁部から体部が残存し、調整は不明。16は残存高4.0cm、17は残存高4.5cmを測る。

各層出土遺物

茶色土層出土遺物（fig.45）

土師器

鉢（1） 口縁部の破片で、残存高4.7cmを測る。内外面ともに指頭痕が残る。

器台（2） 残存高6.8cmを測り、外面には工具による削りがみられる。

瓦器

碗c（3） 底部が残存し、残存高1.9cmを測る。内外面ともに調整は不明。

土製品

棒状製品（4） 残存長8.2cm、幅4.3cm、厚さ4.0cm。焼成はあまく、茶白色を呈す。胎土のキメはやや粗く0.2～3.0cmの砂粒をやや多く含む。

瓦

文字瓦（5） 凸面は格子叩きで、横書正字の「平井」の文字が刻印される。凹面は布目痕が残る。

表土出土遺物（fig.45）

土製品

棒状製品（6・7） 6は残存長9.7cm、幅4.35×3.75cm。焼成はあまく、茶白色～明灰色を呈す。胎土は粗く、0.2～6.0cmの砂粒を多く含む。7は残存長8.4cm、幅4.35×4.2cm。焼成はあまく、茶白色～明茶色を呈す。胎土は粗く、0.2～5.0cmの砂粒を多く含む。

瓦類

埴（8） 角を含む2面がわずかに残存する破片で、図の天地長6.75cm、残存幅5.25cm、残存厚4.5cmを測る。土師質。

5. 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

（1）花粉分析（fig.46、tab.4、PL.18）

1. 調査目的

島本遺跡第2次調査（太宰府市吉松字島本）は水城西門のすぐ内側に位置する。発掘調査の結果、北西－南東方向に向かっている2本の平行した溝とそれに伴う盛土整地が確認され、これが奈良時代に大宰府と水城を結ぶ官道の一部であると考えられている。そこで、当時の古環境を復元する目的で、官道の溝内の花粉分析を行うことにする。

2. 試料

試料は、官道の溝であるS-1およびS-100から採取されたものを用いる。溝の断面から各層ごとにS-1からは8点、S-100からは7点採取し、これらを分析に用いた。

3. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウム処理、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。

種 類 (Taxa)	試料番号	S-1								S-100						
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
木 本 花 粉																
マキ属		-	-	-	1	-	1	-	-	1	1	-	1	-	-	-
モミガ属		-	1	-	17	10	7	2	6	13	9	6	9	2	4	9
マツガ属		-	8	7	31	5	7	-	4	13	8	7	12	3	4	12
スギ属		-	10	4	103	37	46	11	18	154	76	33	59	16	19	105
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	-	5	6	4	3	3	6	3	8	1	3	-	1
ヤナギ属		-	-	-	-	-	-	29	-	1	-	-	-	-	-	1
ヤマモモ属		-	-	1	4	3	7	4	4	9	8	8	5	1	1	1
サワグルミ属-クルミ属		-	-	-	-	1	1	1	-	2	1	1	1	-	1	-
クマシデ属-アサダ属		-	-	1	1	7	6	52	5	6	6	7	2	1	4	3
カバノキ属		-	-	-	2	4	2	6	-	2	3	2	2	1	5	5
ハンノキ属		-	-	-	1	1	1	1	1	1	-	2	1	2	-	-
ブナ属		-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属-コナラ亜属		-	2	4	26	13	17	95	7	11	23	6	9	2	3	16
コナラ属-アカガシ亜属		-	9	6	81	92	109	50	67	101	124	212	101	53	71	127
クリ属		-	-	-	-	-	3	-	-	-	2	-	4	-	-	-
シイノキ属		-	23	13	34	43	53	28	27	17	48	84	39	10	15	27
ニレ属-ケヤキ属		-	-	-	4	6	2	3	2	4	2	2	2	-	2	1
エノキ属-ムクノキ属		-	-	-	1	2	1	1	-	2	1	2	2	-	-	1
シキミ属		-	-	-	-	-	-	7	18	-	-	-	-	-	-	-
カラスザンショウ属		-	-	-	-	3	1	6	-	-	1	8	-	1	-	-
コクサギ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	5	-	1	2	-	4
カエデ属		1	-	5	-	2	-	5	-	-	-	1	-	-	-	2
トチノキ属		-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クロウメモドキ科		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属		-	-	-	-	1	5	2	1	1	2	-	-	3	2	-
ツタ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ノブドウ属		-	-	-	-	7	2	-	1	-	-	3	1	1	-	-
ツバキ属		-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	1	1	-
グミ属		-	-	-	-	2	-	-	-	3	2	10	2	-	1	1
ウコギ科		-	-	-	-	4	1	1	2	-	2	1	-	-	-	-
ツツジ科		-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1	1
イボタノキ属		-	-	-	-	4	9	11	3	1	-	3	2	-	4	-
トネリコ属		-	-	-	-	2	3	1	3	2	-	3	-	-	-	-
ガマズミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
スイカズラ属		-	-	-	1	2	3	1	-	-	-	2	-	-	-	-
草 本 花 粉																
ガマ属		-	-	-	-	1	-	2	1	1	1	-	-	-	-	-
サジオモダカ属		-	2	2	-	1	-	-	1	6	1	-	-	-	-	7
オモダカ属		-	-	-	1	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	2
イネ科		1	25	11	261	148	140	55	116	180	271	214	222	402	146	150
カヤツリグサ科		-	170	83	94	39	21	8	13	145	41	62	30	14	27	108
イボクサ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-
ミズアオイ属		-	-	-	2	5	-	-	1	1	10	-	6	2	-	2
アヤメ科		-	-	-	-	-	-	-	-	6	2	-	-	-	-	-
クワ科		-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	2	2	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	14	12	31	33	54	42	12	30	13	17	44	13	3	17
ソバ属		-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	1	1	6	-	1
アカザ科		-	-	-	5	4	-	3	1	1	3	8	-	21	8	1
ナデシコ科		1	-	-	-	4	6	-	-	1	1	2	6	8	2	2
キンボウゲ科		-	-	-	-	3	3	3	-	1	6	16	8	6	2	1
アブラナ科		-	-	-	3	4	7	4	1	1	2	3	-	1	4	-
バラ科		-	-	-	-	1	7	-	-	-	-	4	-	3	-	-
マメ科		-	1	1	2	1	1	-	-	4	6	9	1	1	-	5
フウロソウ属		-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	1	-
ツリフネソウ属		-	-	-	-	1	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属		-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	2	-	-	1	-
アカバナ属		-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	1	-	4
アリノトウグサ属		-	2	2	7	4	3	1	-	7	6	5	6	3	4	8
セリ科		-	6	4	6	37	68	9	6	3	16	23	10	8	6	-
シソ科		-	-	-	1	-	5	-	-	-	-	-	1	1	-	-
ゴマ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キツネノマゴ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	3	-	-
オオバコ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	-
オミナエシ属		-	8	6	18	-	-	-	-	10	9	3	5	1	1	7
ゴキギル属		-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	1	1
ヨモギ属		-	5	3	17	11	17	13	7	22	69	52	34	172	24	41
オナモミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	6	1	-
他のキク亜科		3	41	19	11	5	3	1	3	52	7	8	18	43	7	44
タンポポ科		-	4	2	11	6	2	1	1	13	4	8	5	9	4	7
不明花粉		-	-	8	5	22	27	7	7	6	64	9	8	10	5	9
シ ダ 類 胞 子																
サンショウモ		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカウキダサ属		-	-	-	1	4	3	-	5	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類胞子		170	747	822	637	352	158	56	93	156	142	25	158	128	131	179
合 計																
木 本 花 粉		1	53	42	313	259	296	324	173	350	328	413	258	103	140	317
草 本 花 粉		5	278	146	473	310	346	144	166	494	472	438	399	733	246	408
不 明 花 粉		0	0	8	5	22	27	7	7	6	64	9	8	10	5	9
シ ダ 類 胞 子		170	747	822	637	352	158	56	93	156	142	25	158	128	131	179
合 計		176	1078	1018	1429	947	831	531	444	1006	1006	885	823	974	522	913

tab. 4 (1) 花粉分析結果

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉およびシダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し、花粉層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。なお、総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

4. 結果

結果をTab. 4・fig.46に示す。S-1の試料番号1～3を除いては、花粉化石が豊富に産出する。花粉化石群集は、全試料ともほぼ同様な組成を示す。木本花粉は、マツ属・コナラ属アカガシ亜属・シイノキ属が多産し、クマシデ属ーアサダ属・コナラ属コナラ亜属・シキミ属などを伴う。なお、試料番号7では、コナラ属コナラ亜属が多産する。草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が多く検出されるが、ソバ属・ゴマ属などの栽培種やサジオモダカ属・ミズアオイ属・ガマ属などの水生植物も少数ながら検出される。

5. 考察

これまで北九州地方で行われた奈良・平安時代頃の花粉分析結果をみると、コナラ属アカガシ亜属やシイノキ属が卓越する。このことから、当時の山地を中心とした周辺の森林植生は、シイ・カシ類など照葉樹を中心とした暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）であったと推測されている（黒田・畑中，1979：三好・伊藤，1980：Hatanaka，1985）。今回得られた木本花粉化石群集も、これらの結果と類似することから、周辺の森林も同様な景観だったのであろう。また、ヤマモモ属・シキミ属・ツバキ属など暖温帯に特徴的に産する種類も検出されることから、これらも森林の構成要素となっていたものと推測される。なお、今回の結果ではマツ属が比較的高い。マツ属の花粉化石の増加は、人間による植生干渉の結果マツの植林・二次林が増加するために起こるといわれ、その傾向は全国的にみられる。九州地方でのマツの増加期は、Hatanaka（1985）によれば約1500年前から始めるといわれているが、雲仙の湿原を対象とした結果では約400年前となっており（三好・伊藤，1980）、山間部では増加期が遅れる傾向がある。本地点のマツ属の増加については、人為的影響による植生変化が主な原因であろうと考えられ、奈良時代から周辺の森林伐採が進んでいたものと推測される。

また、ガマ属・サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属などの水生植物の花粉化石が見られることから、溝内は空掘ではなく水が存在し、これらが溝内に生育していたものとみられる。またオオバコ属は、葉がロゼット状で人馬などの踏みつけに強いことから、道路上等に生育していたと考えられる。一方、ソバとゴマの花粉化石が検出されたことから、周辺ではこれらの植物が栽培されていたと推測される。

<引用文献>

黒田登美雄・畑中健一（1979）花粉分析よりみた北九州の過去2万年間の植生変遷．花粉，13，p.3-8.

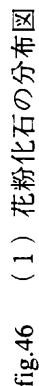
三好教夫・伊藤秀三（1980）雲仙・原生沼の花粉分析．「雲仙・原生沼の研究」，p.19-28,長崎県環境部.

Hatanaka Ken-ichi(1985)PALYNOLOGICAL STADIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION THE WURM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS.Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University(Series B).18,p.29-71.

（2）花粉分析・植物珪酸体分析（fig.47、tab.5・6、PL.19）

1. 目的

島本遺跡では、奈良時代の官道関連の遺構を中心に、当社でも過去に分析を行っている。今回対象とするS-1は、奈良時代の官道に伴う溝で、前回も対象としている。そのS-1の埋土を対象として花粉分析と植物珪酸体分析を行い、当時の古環境に関する情報を得る。



2. 試料

試料（サンプル2）は、遺構埋土の上部にある黒褐色粘質土（編者註；SD001黒灰色粘土層）である。この試料は、前回当社で分析を行っているが、花粉化石の保存が比較的悪かった試料である。

3. 分析方法

1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

2) 植物珪酸体分析

試料約5gについて、過酸化水素水（ H_2O_2 ）と塩酸（ HCl ）による有機物と鉄分の除去、超音波処理（80W, 250KHz, 1分間）による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム（比重2.5）による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

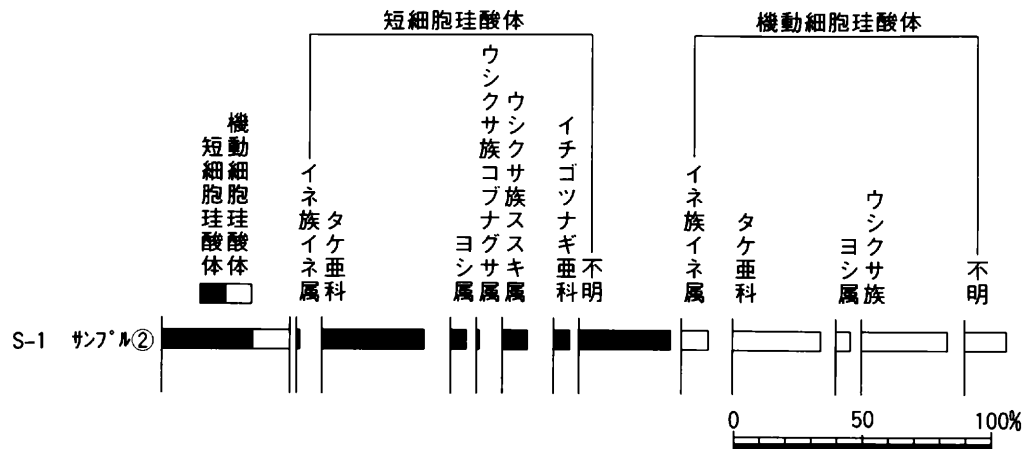
検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にした。

種 類	S-1 試料番号 サンプル②
木本花粉	
モミ属	3
ツガ属	6
マツ属	11
コナラ属アカガシ亜属	10
シイノキ属	2
草本花粉	
イネ科	3
カヤツリグサ科	16
ナデシコ科	1
オミナエシ属	2
ヨモギ属	2
他のキク亜科	32
タンポポ亜科	1
不明花粉	1
シダ類胞子	
シダ類胞子	221
合 計	
木本花粉	32
草本花粉	57
不明花粉	1
シダ類胞子	221
総計（不明を除く）	310

tab. 5 (2) 花粉分析結果

種 類	S-1 試料番号 サンプル②
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	4
タケ亜科	118
ヨシ属	18
ウシクサ族コブナグサ属	3
ウシクサ族ススキ属	29
イチゴツナギ亜科	19
不明キビ型	39
不明ヒゲシバ型	38
不明ダンチク型	29
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	13
タケ亜科	42
ヨシ属	7
ウシクサ族	41
不明	20
合 計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	297
イネ科葉身機動細胞珪酸体	123
総 計	420

tab. 6 (2) 植物珪酸体分析結果



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。

fig.47 (2) 植物珪酸体組成

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。

4. 結果

1) 花粉化石

結果をTab.5に示す。花粉化石の保存が悪く、検出個体数も少ない。木本花粉ではマツ属とアカガシ亜属が、草本花粉ではカヤツリグサ科とキク亜科がやや多くみられる。

2) 植物珪酸体

結果をTab.6、fig.47に示す。各地点の試料からは植物珪酸体が検出され、保存状態は概して良好である。

タケ亜科とウシクサ族の割合が高く、ヨシ属、イチゴツナギ亜科が認められる。また、栽培植物であるイネ属もみられる。

5. 考察

花粉化石の結果を前報の結果と比較してみると、今回多かった種類は前報でも多かったが、両者とも保存が悪かった。したがって、今回の結果のみでは当時の古植生に関して検討することは難しい。前報の結果では、今回行った試料より下位で化石の保存が良く、当時の古植生が推定されている。これによれば、奈良・平安時代頃の山地を中心とした周辺の森林植生は、シイ・カシ類など照葉樹を中心とした暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）であったと推測されている。また、人間による植生干渉の結果、マツの植林・二次林が増加しつつあったこともわかっている。一方、溝内には水生植物が生育し、官道上には、オオバコ属などが生育していたと推定されている。さらに、ソバとゴマの花粉化石が検出され、周辺での栽培が示唆されている。植物珪酸体で多かったタケ亜科やウシクサ属は、官道沿いをはじめとする開けた空間に生育していたものに由来すると思われる。また、ヨシ属は溝内や付近の低地に生育していたのであろう。さらにイネ属の検出から、周囲での稲作が示唆される。

以上のように、当時の古環境が推定された。これまでの微化石分析は、遺構の埋積土を中心としたものが多く、古環境を変遷としてとらえるための調査が少なかった。今後は、これまでの成果をまとめる意味でも、層位的に連続した分析を行い、変遷としてとらえられるようにしていきたい。

<引用文献>

近藤 謙三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用，第四紀研究，25，p.31-64.

（3）花粉分析

1. 目的

S-50遺構を対象に花粉分析を行い、当時の環境を検討する。

2. 試料

S-50から検出された試料（1，2）2点である。

3. 方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

4. 結果

分析の結果、花粉・シダ類孢子とも検出されない。

5. 考察

試料からは花粉・孢子化石が検出されない。花粉・孢子化石は好気的環境下による風化に弱いいため、分解消失したと考えられる。なお、前報で当社が扱ったS-1およびS-100からは、シイ・カシ類を中心とする花粉化石が良好に検出されている。自然堤防や台地など離水した場所の堆積層は、花粉化石の保存が悪い可能性があり、今後試料を選択する際に考慮する必要がある。

6. 小結

当調査区は、水城西門より南東（太宰府側）へ約180m前後の地点に位置する。この試掘調査時点で、すでにこの1kmほど南東にある前田遺跡で古代官道跡が検出されており、ここは水城西門にも近い上、現況地割からも、この付近で古代官道跡（水城西門ルート）が検出されることが予想されていた。ここでは、溝3条（内、1条は平安時代の溝）、溜まり状遺構6基、小穴10数基他を確認した。

この中で特に目立つ2条の大溝（島2SD001・100）が、水城西門を通る官道（水城西門ルート）の両側溝で、両溝に囲まれた部分が官道路面部と想定している（島2SF050）。溝芯々距離も約12mとこれまで知られる官道跡とほぼ同一規模を有しており、関連遺構の出土遺物から、8世紀前半以前に敷設されたと考えられる。

この官道路面部は削平にあっているとみられ、ほとんどの部分で地山面が露出し、通行痕跡もみられなかった。ただ路面部の南東隅では盛土整地層を確認している。この整地は路面部のみにかざられており、ブロック状の土塊を含むことから、路面構築に伴うものと判断され、SD001・SD100の両溝に切られる形で確認できた。この整地層下位に堆積する礫を含む粗砂層は、弥生時代後期の遺物を含む自然流路の可能性があるが、この脆弱な堆積地盤を補強するために盛土整地したと考えられる。このように脆弱な地盤を補強するための路面盛土は、当調査区の南東側、同じ水城西門ルート上の日焼遺跡第2次調査（未報告）でも確認されている。

水城西門ルートの官道は、市内では前田遺跡で初めて確認され、その後、当遺跡で確認した他、近年では日焼遺跡等でも検出している。また、これに先行する7世紀代の道路跡も検出されるなど（原口遺跡・日焼遺跡）、水城西門ルートに関する知見は増えており、その変遷の解明も今後進むとみられる。7世紀後半～8世紀にかけては、官道西側丘陵上では須恵器登窯・火葬墓・墳墓などが造営されており、

前田遺跡近辺では丘陵裾で金属生産も行われていたようである。こうした同時期の遺構群を官道と絡めて、当時の景観復元も今後可能となろう。

さて、官道側溝である島2SD001・100の堆積推移を見ることでも、調査区内の時代推移を窺うことができる。

いずれも、溝上位は広く開削されており、ここには11世紀末～12世紀初頭頃の平安時代後期の遺物を含む層が堆積している。その下位に奈良時代の遺物を含む層が堆積しており、これが溝本来のプランにより近いと言えるだろう。ここで両溝の埋没経緯について検討してみる。

1、官道側溝として機能した時期

両溝とも、下位に堆積する層は、官道側溝としての溝埋没過程を示すとみられる。

島2SD001の溝下位をみると、溝壁面は流水作用により抉られており、蛇行して流れ下っていたことがわかる。現在も湧水がかなり多いことから、当時も同様に湧水していたことが想定され、ある時は川のような流れがあったと想像される。流れの方向は、溝下位のレベルや蛇行の状況から、南東側から水城西門に向かって流れていたことが明らかである。ここには腐植土を含む層（島2SD001茶灰色粘土・同茶色砂質土）がよく発達している。「島2SD001茶色砂質土」層はまだ水の流れがある状況での堆積とみられるが、「島2SD001茶灰色粘土」層は何らかの原因で流れが緩やかになり、そのまま埋没が進んだことを示すものであろう。出土遺物の下限から8世紀後半に埋没が始まることが窺えるが、層の中には7世紀後半～8世紀後半の遺物が多く含まれる。特に須恵器が多く含まれ、中には歪みのあるものや焼成が甘いものが散見される。調査区の西～南側の丘陵部は牛頸窯跡群の一部に含まれており、本書報告の神ノ前遺跡第2次調査でも7世紀後半～8世紀前半の須恵器窯が検出されている。おそらく調査区南側の丘陵部にも須恵器窯があると予想され、溝埋没当時、この灰原から流れ込んだものと想定している。また流木とともに木製品が出土し、また加工木、削り屑（チップ）なども大量に出土した。木製品については、円形および方形の曲物、木柄、舟形木製品など、生活や祭祀に由来するものが含まれる。祭祀遺物については、水城西門が近いことからその関連も想定されるが、舟形木製品以外に祭祀関連遺物がなく、ここで祭祀行為を行ったかどうかについては現状では積極的な証明はできない。また、削り屑が多いことは、近くで木加工が行われていた可能性を示すと見られる。削り屑は検出範囲の中央付近（F11地区）に特にまとまっていたが、そこで加工したものか、そこに流れてきたものか、については、確認できていない。

島2SD100の溝下位については、特に流水作用が激しかったような状況はみられないが、基盤層が砂のため、水が溜まると当然壁面が崩壊すると考えられ、それを示すように溝底が広がっている。溝底の「島2SD100茶灰色砂」「島2SD100淡灰色砂」といった砂堆積層は、このように基盤層が流出して堆積したのであろうか、いずれの層も柔らかく、締まっていたはいなかった。ここからは8世紀代の遺物が出土している。

島2SD001・100のいずれの溝も8世紀後半頃に溝底付近の堆積が顕著となる。特に島2SD001では腐植土層の発達が著しいことが見られることから、この頃から溝の管理があまり行われなくなったことが想定される。道路としては残り続けたにせよ、奈良時代の律令制度と共に機能した「官道」という側面はこの頃薄れてきたのではないだろうか。これについては、後考を待ちたい。

なお、両溝下位の堆積層（島2SD001茶灰色粘土・同茶色砂質土、島2SD100茶灰色砂・同淡灰色砂）についてサンプルを採集し、花粉分析を行ったところ、ガマ属・サジオモダカ属・ミズアオイ属などの水生植物の花粉化石が見られ、溝内は空掘ではなく水が存在し、これらが溝内に生育していた、という結果が出た。また踏みつけに強く、現在でも道路端にみられるオオバコ属も島2SD100から検出されてお

り、道路路面が近くにあったことを裏付ける結果となっている。

2、平安時代後期の側溝利用

次に、両溝の上位の堆積層をみてみる。いずれも平安時代後期以降の堆積である。

島2SD100では、奈良時代の堆積層（島2SD100茶灰色砂）を基盤とする面上に、幾筋もの溝状の遺構が溝に沿って平行に伸びている状況が確認された。いずれの埋土も砂あるいは砂味が強い砂質土であり、中でも島2SF005・島2SF010については、埋土が非常に硬く締まっていた。前述のように島2SD100茶灰色砂は柔らかい砂堆積で、ここに溝を掘ってもすぐに壁面が壊れて埋まってしまうことが想定され、この脆弱な基盤層の上に硬く堆積する島2SF005・島2SF010の成立経緯を考えると、これらを通常の溝とは想定しにくい。ここが従来官道であり、その後平安時代後期までその他の土地利用の痕跡が見られないことを考えると、ここが道路という意識は当時も引き続き残っていたことが考えられる。そこで島2SF005・島2SF010を、道路通行痕跡として知られる「帯状硬化」と想定すると、このような特殊な堆積状況を十分説明できると考える。おそらくこの頃には、島2SD100の溝底を道路として利用したのであろう。

3、平安時代後期の耕作地としての利用

その後、平安時代後期の間に、島2SD001・100とも堆積作用があり、その上に黒灰色粘土の層が堆積している（島2SD001黒灰色粘土・島2SD100黒灰色粘土）。いずれもよく似た埋土で、層の下面には鋤跡とみられる耕作痕跡が確認される。島2SD001では、溝上位の開削部分より上面に平安時代後期の堆積層がみられ、それがこの黒灰色粘土層の床土となっている可能性があるため、溝上位を大きく開削する契機が、この耕作に伴う可能性も想定できよう。

この両溝の黒灰色粘土層についても、サンプルを採集し花粉分析を行った。島2SD001黒灰色粘土層では花粉遺存状況が悪かった。島2SD100黒灰色粘土層では花粉検出量は多かったが、他のサンプルと比べてマツ属、カヤツリグサ科の花粉が多いという傾向が出たが、他に目立った特長はなく、ここでの栽培種等は特定できなかった。

また島2SD001黒灰色粘土層については植物珪酸体分析も行った。ここに植物珪酸体は良好に残存しており、タケ亜科とウシクサ族が割合的に高く検出され、ヨシ属、イチゴツナギ亜科、また、栽培植物であるイネ属もみられた。タケ亜科やウシクサ属は開けた空間に生育するため、これらの量が多いのは元々官道沿いだったことにより、平安時代後期まで植生があまり変わらず、永年蓄積した結果を示すものであろう。こうした中、栽培種のイネ属が、タケ亜科とウシクサ族以外の雑草由来の植物珪酸体に並んで検出されたのは、ここで稲作が行われていた可能性を窺うことができるのではなかろうか。これについては筆者の力量では推測の域を脱することはできないため、後考をまちたい。

以上、奈良時代～平安時代後期の経緯について検討した。なお、平安時代後期以降道路があったかどうかについては調査では確認できなかったが、現在でも官道に添った位置に道路が通っていることを見ると、場所をわずかに変えつつ道路は存続した可能性はあるだろう。

tab. 7 島本遺跡第2次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況(古→新)	遺構間切合(古→新)	時期	地区番号
1	島2SD001	大溝	官道西側溝	fig.26参照		奈良前～平安後	CJ6～13
2		溝×土坑		淡オリブ色砂		中世～	FI12～13
3		小穴	柱痕あり。遺物なし。				I12
4		小穴群				奈良～	J10～11
5	島2SF005	溝×帯状硬化面	SD100黒灰色粘土・淡茶黄色砂除去後検出。 SD100茶灰色砂上に展開する。 SD100濃茶褐色砂はSF005と同一。	暗茶灰色土		奈良<平安後	IJ9
6		小穴		白色砂	1→6		H11
7		小穴群					G8
8		小穴群					JK7
9		小穴				古代～	J7
10	島2SF010	溝×帯状硬化面	SD100黒灰色粘土・淡茶黄色砂除去後検出。 SD100茶灰色砂上に展開する。	暗茶黒色土		奈良<平安後	EK4～9
11		鋤痕跡	S-1黒灰色粘土の下面で検出。同様にS-100黒灰色粘土下面にも鋤痕跡確認している。				
12		小穴					H10
13		たまり				平安後～	HI8～10
14		小穴		橙茶色砂質土→淡灰色砂質土	14→1灰褐色砂		F9
15	島2SD015	溝		淡黄色土→淡灰茶色土		XII・XIII期～	JK5～7
16		たまり					J6～7
17	島2SX017	たまり			19→17	平安～	J6
18		小穴					K8
19	島2SD019	溝×たまり	黄色シルト層と白色粗砂層の層境に埋土が溜まったものの可能性もある。	黒灰色粘土→灰褐色砂	19→17	平安後～	GI4～6
20	島2SK020	土坑			50→20		F8
21		小穴群					E6
22		小穴					E4
23		溝	自然流路の可能性あり	白色粗砂	24→23	奈良～	GH5～6
24		溝	弥生土器多く出土		24→23	奈良～	EH4～6
50	島2SF050	道路	水城西門を通る官道	fig.26参照		奈良～	
100	島2SD100	大溝	官道東側溝	fig.26参照		奈良前～平安後	DL4～11

tab. 8 島本遺跡第2次調査 溝・道路の座標方位一覧

※SF005・010は1/100の遺構配置図からの計測

※SF050は各側溝芯々間任意中点を計測している。

遺構名	計測位置	座標値 (国土座標法第II系)		遺構の方向
		X座標	Y座標	
島2SD001	北西端任意中点	56831.030	-47059.545	G.N.47° 22' 27" W
	南東端任意中点	56822.973	-47050.791	
島2SD015	北西端任意中点	56842.720	-47047.416	G.N.58° 38' 1" W
	南東端任意中点	56839.950	-47042.872	
島2SD019	北西端任意中点	56837.106	-47043.241	G.N.37° 5' 7" W
	南東端任意中点	56831.330	-47038.875	
島2SD100	北西端任意中点	56839.991	-47051.910	G.N.38° 2' 14" W
	南東端任意中点	56823.126	-47038.716	
島2SF005	北西端任意中点	56840.100	-47053.700	G.N.35° 45' 14" W
	南東端任意中点	56837.600	-47051.900	
島2SF010	北西端任意中点	56840.550	-47052.800	G.N.38° 39' 35" W
	南東端任意中点	56823.550	-47039.200	
島2SF050	北西端任意中点	56835.510	-47055.728	G.N.41° 22' 27" W
	南東端任意中点	56823.050	-47044.753	

tab. 9 島本遺跡第2次調査 出土遺物一覧表(1)

※ 陶磁器の分類番号の後ろに付した()内の数字は破片点数である。

S-1

須恵器	坏、坏a、坏c、蓋3、蓋3×高坏 蓋×皿、高坏、甕、壺、ハソウ×壺
土師器	坏、壺、供膳具(平安)
弥生土器	鉢、片
瓦類	丸瓦(縄目)
石製品	ob-f、and-f

S-1灰茶色砂

須恵器	坏c、甕
土師器	丸坏、供膳具(赤色顔料)
瓦類	碗
瓦類	片(縄目)
石製品	ob-f

S-1灰褐色砂

須恵器	坏a、坏c、蓋a1、坏蓋、高坏
土師器	小皿a1、坏a、坏×碗、坏c×碗c、甕、煮炊具
瓦類	片(縄目)
木製品	杭

S-1灰茶褐色砂質土(=S-1灰褐色砂)

石製品	and-f
-----	-------

S-1黒灰色粘土

須恵器	坏a、坏c?、坏×皿、蓋1、甕
土師器	坏、片
弥生土器	片
土製品	不明製品
瓦類	平瓦(格子)、丸瓦(格子)
石製品	and-f

S-1暗灰茶色砂

須恵器	坏a、坏c、小坏c、蓋1、蓋3、蓋c 甕、大甕a、小壺、壺a蓋
土師器	小皿a、皿a、坏a、甕a、煮炊具
弥生土器	甕×壺
瓦類	平瓦(縄目)、片(縄目)、片、瓦玉
石製品	and-f

S-1濃灰褐色砂質土(=S-1暗灰茶色砂)

須恵器	坏c、坏
土師器	煮炊具
瓦類	片
石製品	and-f

S-1淡灰茶色砂

須恵器	坏a、坏c、坏、蓋3、蓋1、小蓋3、高坏、甕、壺、蓋a3
土師器	高坏、甕、供膳具
弥生土器	高坏
縄文土器	深鉢(粗製)
石製品	and-f、ob-ap

S-1茶褐色砂質土(=S-1淡灰茶色砂)

須恵器	坏c×皿c、坏、蓋3、壺、甕
弥生土器	甕×壺
瓦類	片(縄目)
石製品	玉石

S-1褐色粘土

須恵器	甕a
土師器	壺×高坏(古式)

S-1淡黄紫色粘土

須恵器	坏
-----	---

S-1暗灰色砂

須恵器	坏c、坏、皿a、蓋3、蓋c、蓋3×高坏、壺
土師器	供膳具、煮炊具
弥生土器	片
瓦類	平瓦(縄目)
石製品	and-f
木製品	桜皮

S-1白灰色砂

須恵器	鉢、甕
土師器	坏d、坏a、高坏、

S-1茶灰色粘土

須恵器	坏a、坏c、坏、大坏c、皿a、皿、蓋a3、皿c×大坏c 高坏、壺a蓋、蓋c1、蓋c3、蓋c、蓋1、小蓋1、小坏c 蓋3、鉢a3、鉢b、甕、壺a、壺b、壺、小壺
土師器	坏a、坏身(黒色化)、蓋3、大皿c×盤c、壺 甕a、小型丸底壺、把手
弥生土器	甕×壺、甕、片
縄文土器	深鉢
土製品	カマド
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)、片(縄目)、瓦玉
石製品	and-f、ob-f
木製品	木片、杭、舟形木製品、棒状製品、ヘラ、 桜枝・皮、折敷、曲物(側板、蓋板、底板?、 綴紐)、チップ、浅木?、根
金属製品	鉄斧
その他	炭化物、種子(桃、どんぐり)、果皮(瓢箪?)

S-1暗青色粘土

須恵器	坏a、坏c、坏、蓋c3、蓋1、高坏、鉢、甕、壺a、小壺
土師器	坏身、碗(内面ミガキあり)、甕a、甕、供膳具
製塩土器	煎熬土器
瓦類	平瓦(縄目、一枚作り)
石製品	ob-f
木製品	曲物片、板材、チップ、桜皮

S-1茶色砂質土

須恵器	坏a、坏c、坏、小坏a、坏a×壺、蓋a3、蓋c3、蓋1、蓋3 大蓋3、壺a蓋、高坏、鉢a3、鉢b、横瓶、甕、大甕a 小壺a、壺a、壺b×高坏、壺b、壺、小甕a、壺c
土師器	坏、坏身、坏×蓋、皿b、蓋3、大皿×盤、高坏 把手、甕、壺、壺(二重口縁?)、甕(古墳)
製塩土器	煎熬土器、焼塩壺
新羅土器	壺(竹管文あり)(1)
弥生土器	甕(後期)、壺(後期)、甕
縄文土器	浅鉢
瓦類	平瓦(縄目)、平瓦(格子、模骨あり) 丸瓦(無文)、丸瓦、片(縄目)、瓦玉
石製品	and-f、ob-f
木製品	木片、曲物、杭、柄?、チップ、曲物底板、板材、竹、 折敷(方形曲物)、横斧?、桜樹皮(穿孔あり)、桜樹皮

S-1明灰色砂質土(=S-1茶色砂質土)

須恵器	坏c、蓋1、蓋3、壺b、甕
土師器	甕
新羅土器	壺(竹管文あり)(1)
瓦類	片(縄目)
石製品	ob-f

tab.9 島本遺跡第2次調査 出土遺物一覧表(2)

※ 陶磁器の分類番号の後ろに付した()内の数字は破片点数である。

S-1 黒色粘土

須恵器	小蓋1、大甕a
土師器	壺(古式)、煮炊具

S-1 青灰色砂

須恵器	坏a、坏、甕、大甕a
土師器	坏c、蓋4、甕、煮炊具、小皿a
木製品	木片、曲物

S-1 暗青色土

須恵器	坏、蓋3、甕
弥生土器	甕(中期)

S-1 暗灰褐色砂(出土地不明)

須恵器	坏c、甕
木製品	木片

S-1 暗黒灰色粘土(出土地不明)

須恵器	坏a、蓋1、蓋3、高坏、壺c、壺、壺b×高坏
縄文土器	鉢(粗製)
木製品	木片、曲物?、桜樹皮

S-2

須恵器	坏a
-----	----

S-2 黄白色粘土

須恵器	片
土師器	片
瓦類	平瓦(格子)

S-2 茶白色砂

須恵器	坏、甕
土師器	供膳具
龍泉窯系青磁	碗; 上田C-II(I)
弥生土器	甕、片

S-2 灰色砂質土

須恵器	供膳具
-----	-----

S-2 灰青色粘土

須恵器	坏a、坏c、蓋1、甕
土師器	坏a×小皿a(ヘラ)、坏
弥生土器	片
瓦類	平瓦
木製品	樹皮

S-4

須恵器	坏c、蓋
土師器	片
石製品	and-f

S-5

須恵器	甕×壺
土師器	皿a
瓦類	平瓦(縄目)

S-100 濃茶褐色砂(=S-5)

瓦類	片(縄目)
----	-------

S-6

石製品	ob-f
-----	------

S-7

須恵器	片
土師器	片
弥生土器	片

S-8

土師器	片
白磁	壺他; 片(近現代の白磁の可能性あり)(1)

S-8 茶色土

土師器	坏×小皿、片
-----	--------

S-8 灰茶色土

土師器	坏a
-----	----

S-9

須恵器	坏
-----	---

S-10 暗茶黒色土

須恵器	坏c
石製品	and-f

S-10 淡茶色土(=S-100 淡茶黄色砂)

須恵器	坏c、蓋3、高坏、片
土師器	坏×小皿、坏×碗
弥生土器	甕×壺
瓦類	片(縄目)

S-12

土師器	片
-----	---

S-13

須恵器	坏a、甕
土師器	供膳具、片
土製品	棒状製品
瓦類	片

S-15 淡灰茶色土

須恵器	坏c、壺、甕×壺、甕
土師器	坏a、供膳具(平安)、煮炊具
白磁	碗; VI-b(I)、II(I)、IV(I)
瓦類	片(格子)
石製品	滑石製品

S-15 淡黄色土

瓦器	片
弥生土器	甕

S-16

土師器	片
-----	---

S-17

須恵器	蓋c、壺
土師器	坏a、丸坏
越州窯系青磁	坏; I-2(I)
弥生土器	甕(後期)
瓦類	平瓦(格子)

S-18

須恵器	坏a
-----	----

S-19 灰褐色砂

須恵器	坏c、瓶
土師器	坏a(ヘラ×イト)、坏a×小皿a、碗c

S-19 黒灰色粘土

須恵器	壺、供膳具
土師器	供膳具
土製品	片
瓦類	平瓦(縄目、格子)

tab. 9 島本遺跡第2次調査 出土遺物一覧表(3)

※ 陶磁器の分類番号の後ろに付した()内の数字は破片点数である。

S-21	須恵器 甕
------	-------

S-22	須恵器 坏
------	-------

S-23	須恵器 坏c、坏、蓋、高坏、甕
土師器	甕、供膳具
弥生土器	甕
石製品	花崗岩碎片、and-ap、ob-f

S-24	須恵器 坏、蓋1、甕
土師器	坏d、小型丸底壺、甕(古墳初期)
瓦類	平瓦(縄目)
石製品	ob-f

S-50茶褐色粘土	須恵器 供膳具、坏か
土師器	供膳具
弥生土器	片

S-50灰黒色粘土	土師器 片(弥生土器?)
-----------	--------------

白色粗砂(S-50白色粗砂)	須恵器 蓋1
土師器	坏
弥生土器	鉢、甕
石製品	and-ap

S-50白色粗砂	弥生土器 片
----------	--------

白色粗砂(=S-50白色粗砂)	須恵器 蓋1
土師器	坏
弥生土器	甕、鉢
石製品	and-ap

S-50茶色粗砂	須恵器 坏
弥生土器	片

S-100灰褐色砂	須恵器 坏c、皿、蓋c、壺、甕
土師器	小皿a1(へら)、小皿a1、坏a 坏×丸坏、碗c、碗×丸坏
瓦器	碗、片?
白磁	碗; II-1(1)、IV(1) 壺他; 片(広東系)(1)
弥生土器	壺
土製品	棒状製品
瓦類	丸瓦、片(いぶし)、片(縄目)
石製品	ob-f
その他	鉾滓

S-100茶黄色土	須恵器 坏c、坏a、壺
土師器	坏a、甕、供膳具
瓦類	片(縄目)

S-100淡黒褐色粘質土(=S-100茶黄色土)	土製品 棒状製品
--------------------------	----------

S-100黒灰色粘土	須恵器 坏c、坏、蓋1、高坏、壺、甕
土師器	小皿a1、小皿a、坏a、坏c、丸坏、碗c、鉢、甕
白磁	碗; IV-a(1) 壺他; 片(広東系)(1)
弥生土器	鉢、壺×甕
土製品	棒状製品、土玉
瓦類	平瓦(格子、縄目)、丸瓦(格子、縄目)、片(縄目)
石製品	and-f
中国陶器	壺; 耳壺V・VI<VIIか?(1)

S-100黒褐色粘質土(=S-100黒灰色粘土)	土師器 供膳具
瓦類	片(格子)

S-100淡茶黄色砂	須恵器 坏a、坏c、蓋c、蓋1、蓋3、蓋×坏、壺×高坏、壺、甕
土師器	坏a、坏c、皿b?、碗×坏、高坏、甕
中国陶器	壺; 未分類(1)
弥生土器	片
縄文土器	片
瓦類	平瓦(縄目)、片(縄目)
その他	鉾滓、獣歯

S-100暗茶青色砂質土(=S-100淡茶黄色砂)	瓦類 片(格子)
---------------------------	----------

S-100茶褐色土	須恵器 甕
瓦類	片(縄目)、片

S-100淡灰茶色砂	須恵器 坏c、坏、蓋3×高坏、壺、甕(把手付)、甕
土師器	甕、供膳具、小皿a1、坏d
弥生土器	甕
瓦類	片(縄目)、
石製品	and-f、ob-f

S-100灰黒色土	須恵器 甕
土師器	片
弥生土器	壺

S-100明灰色砂質土	須恵器 坏c、甕
土師器	皿a、煮炊具
弥生土器	片
瓦類	平瓦(縄目)、軒丸瓦

S-100灰色砂質土	須恵器 甕×壺、甕、蓋c
土師器	坏
瓦類	平瓦(縄目)、片

S-100白灰色砂	須恵器 壺、甕、片
瓦類	片(縄目)

S-100淡灰色砂質土	須恵器 坏×蓋、壺×甕、甕
土師器	坏a、丸坏
白磁	碗; II-1(1)
瓦類	平瓦(格子)

tab.9 島本遺跡第2次調査 出土遺物一覧表(4)

S-100茶灰色砂

須恵器	壺c、蓋1、蓋3、鉢a3、壺、甕、甕×壺、坏×壺
土師器	壺
弥生土器	壺、甕
瓦	類平瓦(縄目)、丸瓦、軒平瓦(鴻臚館)
石製品	and-f
中国陶器	壺;耳壺V・VI<VII(1)
その他	獣歯

S-100灰白色砂(=S-100茶灰色砂)

須恵器	壺、片
-----	-----

S-100淡灰色砂

須恵器	蓋3、坏蓋、壺、甕、片
土師器	煮炊具、片
弥生土器	甕
瓦	類片
石製品	磨製石斧(緑色片岩)、and-f、ob-f
木製品	木片、桜樹皮

S-100暗青灰白色礫砂(=S-100淡灰色砂)

須恵器	片
土師器	片

S-100暗灰色粗砂

須恵器	坏
弥生土器	壺

S-100最下層

石製品	ob-f
-----	------

S-100白色砂(白色砂地山)

須恵器	甕(混入か)、片(混入か)
-----	---------------

茶色土層

須恵器	坏c、坏、蓋c、蓋3、皿、碗c、壺×高坏、壺、甕
土師器	坏c、坏、坏c×碗c、鉢、器台、甕(古墳前期)、甕
瓦	碗c
白磁	碗;II-1(1)、V-2×VIII-4(1)、片(1)
肥前系陶磁器	片
弥生土器	壺
土製品	棒状製品、不明品(厚1.5cm)
瓦	類平瓦(縄目)、平瓦、丸瓦、文字瓦(平井)片(燻し)、片(格子)
石製品	ob-f
その他	焼土塊、炭化物

カクラン

弥生土器	甕×壺(後期)
土製品	鬚羽口??
石製品	and-f

表土

須恵器	坏c、坏、皿、壺、甕、供膳具
土師器	坏c、丸坏×丸碗、碗c、碗×丸碗、供膳具
瓦	碗c
国産陶器	鉢、摺鉢(近現代)、甕(近現代)
白磁	碗;V-3(1)、V-1×3(1)
肥前系陶磁器	小碗、皿
弥生土器	甕(中期)
土製品	棒状製品
瓦	類平瓦(無文)、燻し瓦、埴
石製品	and-f

tab.10 島本遺跡第2次調査 土師器・瓦器計測表

※A:内底のナデ、B:は板状圧痕

※計測値の()は復元値、+は残存値

S-1灰茶色砂

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	丸底坏	fig30-1	—	3.15+	—			

S-1灰褐色砂

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	へラ	fig30-2	—	1.1	—	—	

S-1暗灰茶色砂

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏a	へラ	fig30-3	—	1.6+	(7.4)	—	○

S-1白灰色砂

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏d	—	fig30-15	—	1.0+	(8.0)		
	坏a×坏d	—	fig30-16	(14.0)	3.6+	—		

S-1茶灰色粘土

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏a	—	fig31-28	(18.4)	5.15	(12.6)	—	—
	坏a	—	fig31-27	16.0	3.1~3.8	13.0	—	—
	盤c×大皿c	—	fig31-29	—	2.0+	—		

S-1暗青色粘土

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏身	—	fig37-7	(13.8)	4.3+	(11.0)	—	—

S-1茶色砂質土

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	蓋3	—	fig39-22	(19.0)	1.75+	—	—	—
	皿b	—	fig39-23	—	2.9+	—		

S-1青灰色砂

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	蓋4	—	fig42-3	—	2.2+	—	—	—

S-5

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	皿a	—	fig44-11	(15.4)	1.8	(11.2)	—	

S-10茶色土

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏×碗	—	fig44-12	—	3.2+	—		

S-17

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	丸底坏	—	fig44-17	—	4.5+	—		
	丸底坏	—	fig44-16	—	4.0+	—		

S-19灰褐色砂

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	碗c	—	fig44-4	—	2.0+	(6.6)	—	—

S-100灰褐色砂

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	—	fig43-1	8.9	1.1	7.2	○	○?
	小皿a1	—	fig43-2	(9.4)	1.0	(6.0)	—	○?

S-100黒灰色粘土

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	—	fig43-8	(10.6)	1.3	(7.6)	○	×
	小皿a1	—	fig43-6	(9.6)	1.25	(8.0)	○	—
	小皿a1	—	fig43-7	(10.0)	0.9	(8.0)	○	×
	小皿a1	—	—	—	0.8+	—	—	—
	小皿a1	—	—	—	1.0+	—	—	—
	碗c	—	—	—	1.8+	7.0	—	×

S-100淡茶黄色砂

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏a	へラ	—	—	1.9+	7.3	×	○

S-100淡灰茶色砂

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	—	fig43-13	(10.4)	1.5	(5.6)	—	—
	坏d	へラ	—	—	0.95+	(7.6)	—	—

S-100淡灰色砂質土

器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏a	—	fig43-15	—	2.2+	9.4	—	

IV-4. 吉松松本遺跡第1次調査

1. 調査に至る経緯

調査対象地は、太宰府市大字吉松203-1の一部および204-1に所在する。ここはJR水城駅そばで、すぐ北に水城土塁が横たわっている。

平成8（1996）年12月13日、ここにマンションを建設するため、事前の遺跡の有無についての問い合わせが文化課（当時）にあった。ここは水城西門の東南東約270mにあり、水城土塁からは最短で100m程度の地点である。周辺の試掘調査では遺構が検出されなかったところもあるものの、水城に関わる遺構が検出される可能性も予想された。遺構が地下に残っていればマンション建設に際し破壊される恐れがあり、地権者・開発業者と調整を図り確認調査を実施することになった。確認調査は平成8（1996）年12月24日に実施し、地表（水田耕作面）下の約0.2～0.6mで東西に走行する谷または自然流路が確認された。水城の内堀に関する遺構の可能性も想定されたため、調査結果を説明し協議した結果、原因者負担で発掘調査し記録保存することとなった。

調査は城戸康利が担当し、平成9（1997）年3月10日より開始し、同年3月31日に全て終了した。開発対象面積は1,699㎡で、発掘調査面積は295㎡である。

なお整理報告は、井上信正が担当した。

2. 層位 (fig.50)

遺構が展開する基礎地盤は黄橙色土層である。遺構面を覆うように黄褐色土層、黄褐色粘土+黄褐色砂層が堆積している。対象地はそれまで水田であったため、これらはその水田床土である。

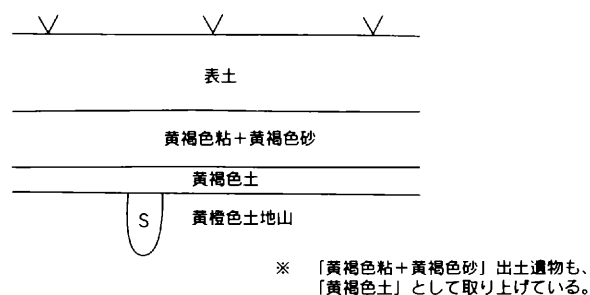


fig.48 吉松松本遺跡第1次調査 土層模式図

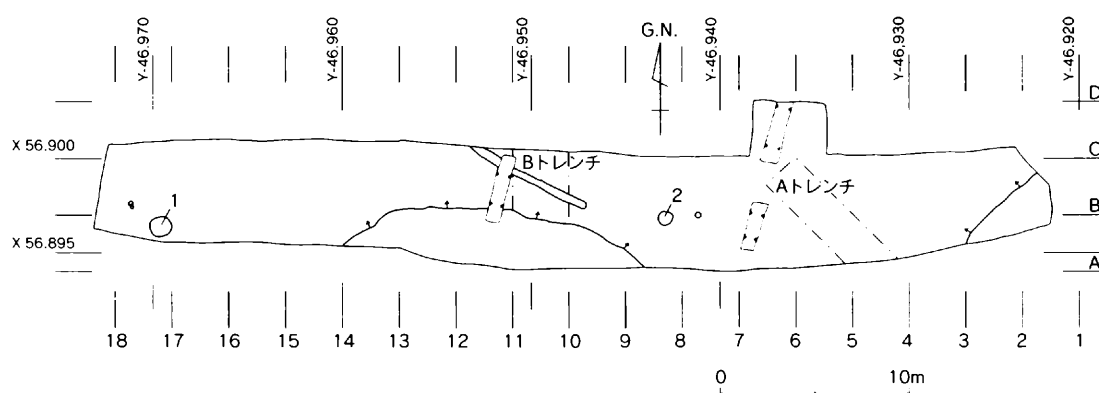


fig.49 吉松松本遺跡第1次調査 遺構配置図 (1/400)

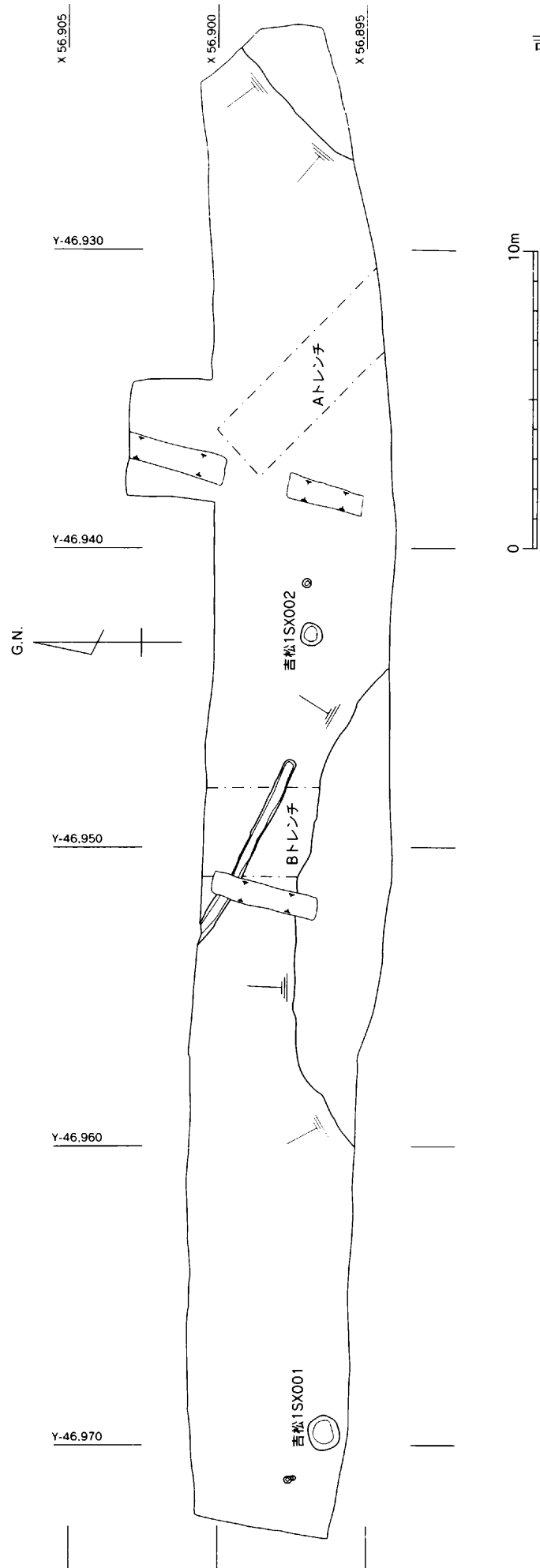


fig.50 吉松松本遺跡第1次調査 遺構全体図 (1/200)

吉松松本遺跡第1次調査

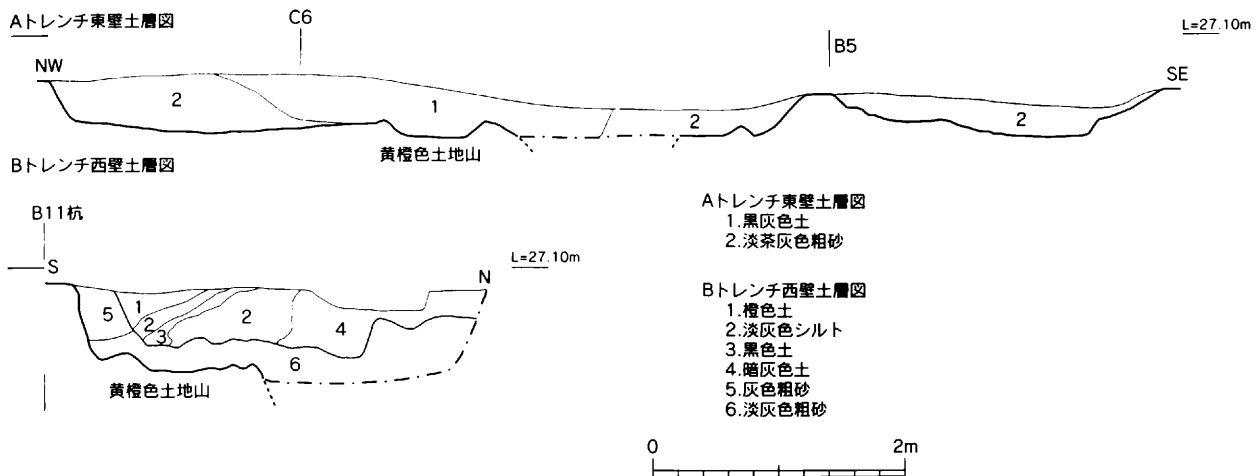


fig.51 吉松松本遺跡第1次調査 関連土層図 (1/60)

3. 遺構

土坑 (fig.48)

吉松1SK001

調査区西端で検出した。径1.0×1.2mの楕円形を呈し、深さ0.28mを測る。ここから平安時代後期を最新とする遺物が出土している。

小穴 (fig.48)

吉松1SX002

調査区中央東寄りで検出した。径約0.75mで、深さ0.17mを測る。ここから平安時代後期を最新とする遺物が出土している。

自然流路 (fig.48・51)

吉松1SD003

調査区全面にて、東西に走向する自然流路を検出した。南岸が調査区中央部にて確認されるが、大きく蛇行しているため、その規模については不明である。埋土の状況や包含される遺物を確認するため、調査区東側と中央部にトレンチを入れ、それぞれAトレンチ・Bトレンチとした。Aトレンチの北側については溝底を確認していないが、Aトレンチの南側は深さ約0.7m、Bトレンチでは深さ0.2～0.4m程度を測る。両トレンチとも、砂・シルト、および腐植土系の黒い土が複雑に堆積し、ラミナを形成している状況が観察される。ここからは平安時代後期を最新とする遺物が出土している。

4. 遺物

土坑出土遺物 (fig.52)

吉松1SK001出土遺物

土師器

坏(1) 口縁部の破片である。残存高1.5cm。

小穴出土遺物 (fig.52)

吉松1SX002出土遺物

瓦器

椀(2) 口縁部～体部の破片である。口径16.0cm、残存高5.5cmを測る。

自然流路出土遺物

(fig.52)

吉松1SD003A トレンチ

出土遺物

須恵器

蓋3(3) 口径11.4cm、残存高1.25cm、天井部径9.1cmを測る。天井部はヘラ切り。

坏c(4) 底部の破片である。残存高1.4cm、高台径9.4cmを測る。

土師器

丸坏c(5) 底部の破片である。残存高2.6cm、高台径7.0cmを測る。内面にはミガキbを施す。

縄文土器

深鉢(6・7) いずれも粗製の深鉢である。6は残存高4.5cmを測る。内面は風化しており調整不明だが、外面はナデあるいはミガキを施す。胎土のきめは粗く0.2~3.0mmの砂粒を多く含む。焼成はあまく、内面は淡茶色~淡茶褐色を、外面は淡茶褐色~淡黒褐色を呈す。7は、残存高8.2cmを測る。内面は風化が進んでいるがナデの後ミガ

キとみられる調整を施しているようで、外面は強い条痕が観察される。胎土のきめは粗く0.2~5.0mmの砂粒を多く含む。焼成はあまく、内面は淡茶褐色~黒褐色を、外面は淡茶褐色~褐色~黒褐色を呈す。

吉松1SD003B トレンチ出土遺物

土師器

碗c(8) 底部の破片である。残存高1.5cm、高台径6.8cmを測る。

瓦器

碗c(9) 底部の破片である。残存高1.4cm、高台径6.2cmを測る。

縄文土器

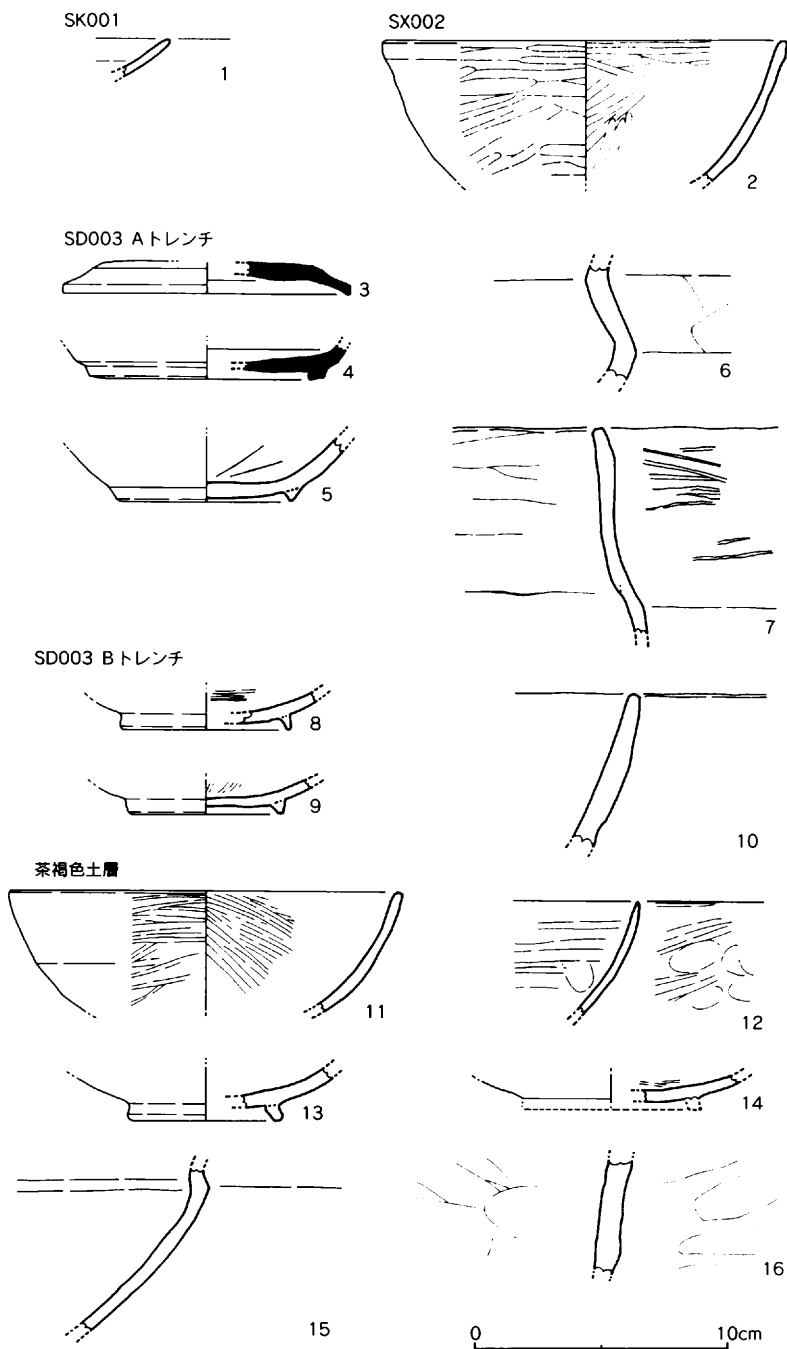


fig.52 吉松松本遺跡第1次調査 出土遺物実測図(1/3)

鉢（10） 粗製の鉢である。残存高6.0cmを測る。口縁端部調整のヨコナデが観察され、それ以外は風化のため調整不明。胎土のきめは粗く0.2～2.0mmの砂粒を多く含む。また微細な雲母片を少量含み、角閃石もわずかに含まれる。焼成はあまく、内面は茶褐色～橙茶色を、外面は淡茶褐色～明茶色を呈す。

各層出土遺物（fig.52）

黄褐色土層出土遺物

瓦器

碗（11・12） いずれも口縁部～体部が残存する破片である。11は口径15.6cm、残存高4.75cmを測る。12は残存高4.5cmを測る。

碗c（13・14） いずれも底部が残存する破片である。13は残存高2.15cm、高台径6.2cmを測る。14は残存高1.15cmを測る。

縄文土器

浅鉢（15） 精製の浅鉢である。残存高6.5cmを測る。内面はナデまたはミガキを施す。外面の調整は不明。胎土のきめはやや粗い程度で、0.2～2.0mmの砂粒をやや多く含む。また微細な雲母片を少量含む。焼成はあまく、内面は暗茶褐色を、外面は茶褐色を呈す。

鉢（16） 粗製の鉢である。残存高4.5cmを測る。内面はナデまたはミガキを施す。外面もナデとみられる。胎土のきめは粗く、空隙も多い。0.5～1.0mmの砂粒をやや多く含む。焼成はあまく、内面は淡茶褐色～淡灰褐色を、外面は淡茶色～淡灰茶色を呈す。

5. 小結

今回の調査では、自然流路（吉松1SD003）が大きく東西に横たわっている状況が確認された。この西側延長上には水城が横たわる。水城の内濠と想定される位置には、近世以降に最終埋没する自然流路があることが発掘調査・試掘調査等でも明らかになっており、吉松1SD003もある時期にはこれらと繋がっていたと推測される。吉松1SD003は平安時代後期の遺物を最新とし、この他奈良時代・縄文時代の遺物が出土している。ただ、溝の主体となる時期がいつなのかは、今回の調査では明らかにはできなかった。また溝の埋没時期については、出土遺物の最新のものが平安時代後期であることを鑑みると、島本遺跡第2次調査で検出した島2SD001などのように、平安時代後期に流路が埋まるという現象が近隣でも確認されることから、一応の整合性はあるようにも思われる。なお、ここに切り込む遺構からは、平安時代後期の遺物を最新とする遺物が出土しているが、いずれも吉松1SD003の遺物が混入している可能性もあり、自然流路埋没後の状況については、周辺の調査に期待したい。

tab.11 吉松松本遺跡第1次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況(古→新)	時期	地区番号
1	吉松1SK001	土坑			平安後～	A17
2	吉松1SX002	小穴			平安後～	A8
3	吉松1SD003	自然流路	調査区内を蛇行しつつ東西に走向する。		平安後～	全域

tab.12 吉松松本遺跡第1次調査 土師器・瓦器計測表

S-1										Bトレンチ (SD003Bトレンチ)									
器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考		器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考	
土師器	坏	fig50-1	—	1.5+	—					土師器	碗c	fig50-8	—	1.5+	(6.8)	—	×		
										瓦器	碗c	fig50-9	—	1.4+	(6.2)	—	×		
S-2										黄褐色土層									
器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考		器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考	
瓦器	碗	fig50-2	(16.0)	5.5+	—					瓦器	碗	fig50-11	(15.6)	4.75+	—				
Aトレンチ (SD003Aトレンチ)												碗	fig50-12	—	4.5+	—			
器別	器種	図版番号	口径	高さ	底径	A	B	備考		瓦器	碗c	fig50-14	—	1.15+	—	—	×		
土師器	丸坏c	fig50-5	—	2.6+	(7.0)	—	—				碗c	fig50-13	—	2.15+	(6.2)	—	×		

※A；内底のナデ、B；は板状圧痕
※計測値の（ ）は復元値。+は残存値。

tab.13 吉松松本遺跡第1次調査 出土遺物一覧表

※ 陶磁器の分類番号の後ろに付した（ ）内の数字は破片点数である。

黄褐色土

須 恵 器	坏a,坏,蓋3,坏c,壺
土 師 器	碗?,煮沸具,煮沸具（角閃石入）
瓦	碗,碗c,片
弥 生 土 器	甕か,壺
縄 文 土 器	浅鉢
瓦	類 片（燻し）,平瓦（格子）
石 製 品	and-f

表土

須 恵 器	甕,壺
土 師 器	碗,碗c,供膳具
瓦	片
肥前系陶磁器	碗,壺
土 製 品	片
瓦	類 片（燻し）,軒瓦（セメント瓦）

Z

土 師 器	坏a（ヘラ）
-------	--------

S-1

土 師 器	坏,片
-------	-----

S-2

瓦	器 碗
---	-----

Aトレンチ

須 恵 器	坏c,坏,蓋3
土 師 器	碗c
瓦	器 碗
弥 生 土 器	弥生土器?片
縄 文 土 器	深鉢
瓦	類 片
石 製 品	and-f

Bトレンチ

須 恵 器	甕a,供膳具,蓋c,蓋3
土 師 器	大皿×晩,丸坏×碗,子皿×坏,碗c,鉢か
瓦	器 碗c,小皿a
白 磁	碗；Ⅳ×Ⅴ(1) 皿；Ⅴ>Ⅵ×Ⅶ(1),Ⅵ(1)
縄 文 土 器	深鉢
石 製 品	石鍋A群,平石（緑色片岩か）

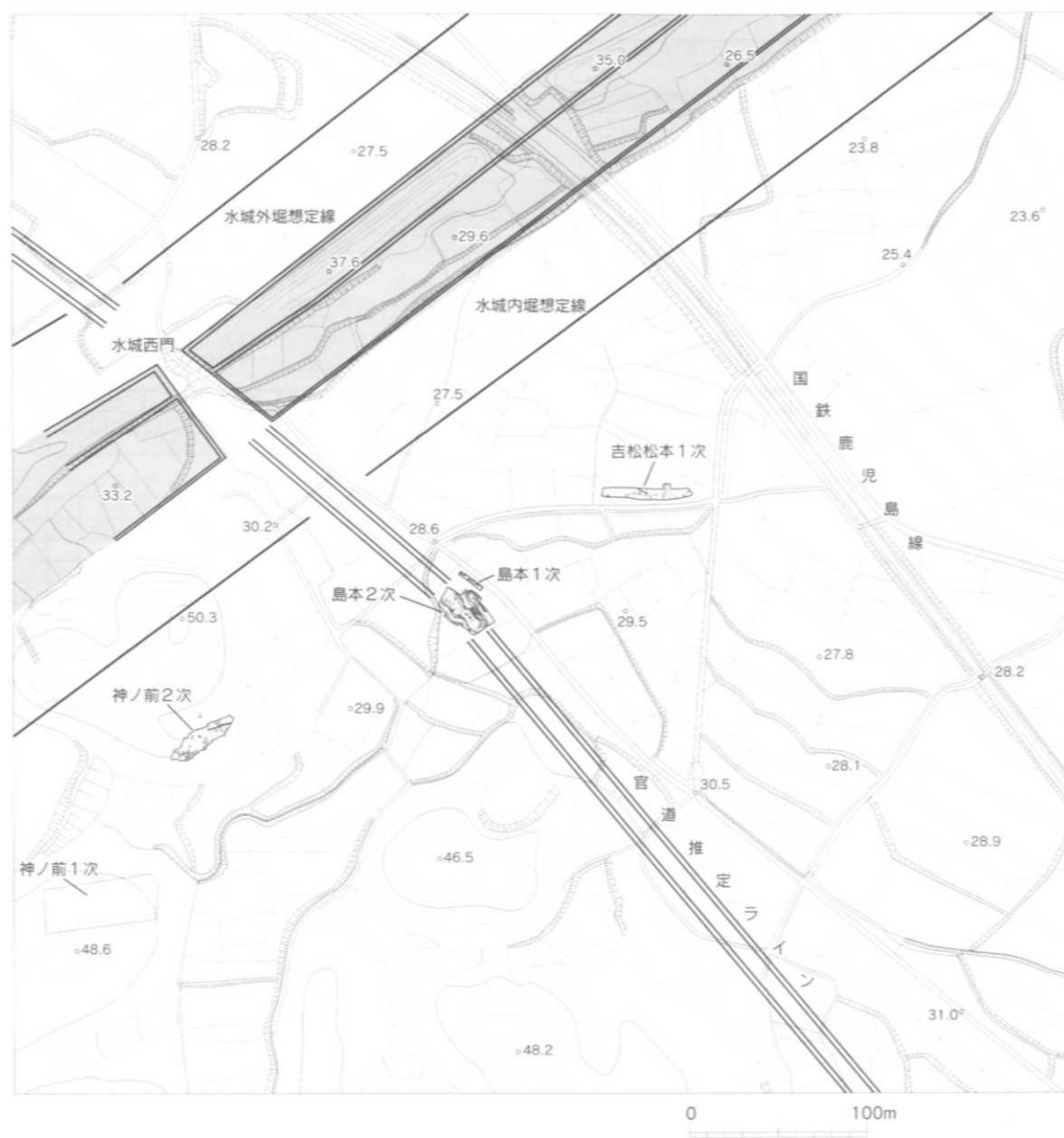


fig.53 各調査状況と周辺古地形（昭和23年頃、1/4,000）

写 真 図 版

- ・ここでは、各調査区の主だった遺構写真を掲載した。
- ・遺構・遺物写真は、付属のCD-ROMに掲載しているのでご参照いただきたい。



神ノ前遺跡第2次調査区周辺（東から）



神ノ前遺跡第2次調査区遠景（東から）



神ノ前遺跡第2次調査区全景（上が南）



神ノ前3号窯 完掘状況（北東から）



神ノ前3号窯 窯内完掘状況（北東から）



神ノ前3号窯 窯内床面状況（焼成部奥側）（北東から）



神ノ前3号窯と神2SX005西側堆積状況（北東から）



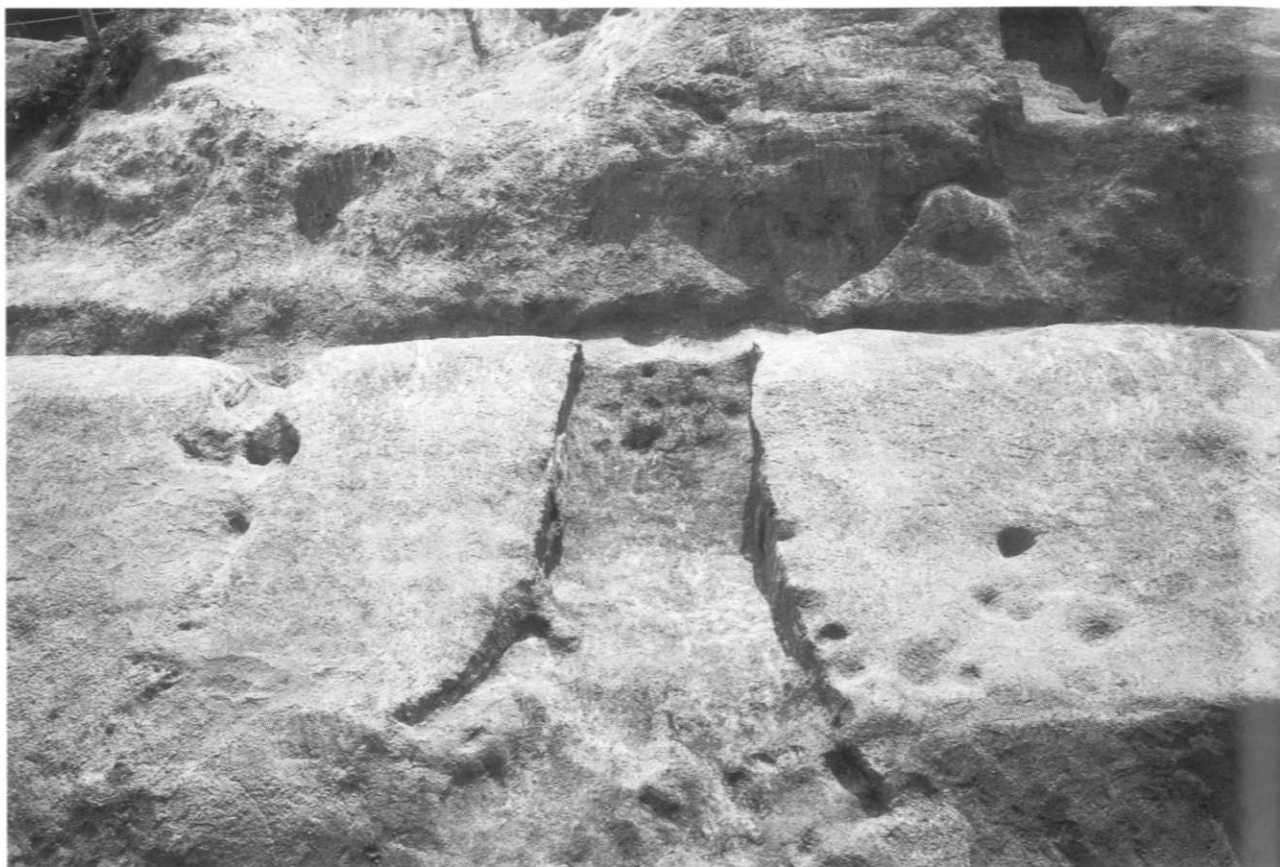
神ノ前4・5号窯 窯内床面検出状況（北から）



神ノ前4号窯 窯内床面検出状況（北から）



神ノ前4号窯 東壁状況（北西から）



神ノ前5号窯 窯内床面検出状況（北から）



神ノ前5号窯 燃烧部東西土層観察（北から）



神ノ前5号窯 焼成部南北土層観察（西から）



神ノ前5号窯灰原部（調査区北壁・神2SX005）土層観察（南から）



神2SX005西側 完掘状況（南東から）



神2SX005東側 完掘状況（西から）



島本遺跡第1・2次調査区周辺（南東から）



島本遺跡第1次調査区全景（南から）



水城西門を太宰府側から望む（南東から）



島本遺跡第2次調査区北西側調査区全景（上が北東）



島本遺跡第2次調査区南東側調査区全景（上が南西）



島本遺跡第2次調査区と南東側周辺（北西から）



島2SD001完掘（北西側（反転前）調査区 南から）



島2SD001 調査区中央部土層観察（F9地区 北から）



島2SD001黒灰色粘土除去時 鋤痕跡（G10地区 西から）



島2SD001茶色砂質土 折敷（fig.41）出土状況（F10地区 北から）



島2SD001茶色砂質土 大型円形曲物検出状況 遠景 (F10地区)



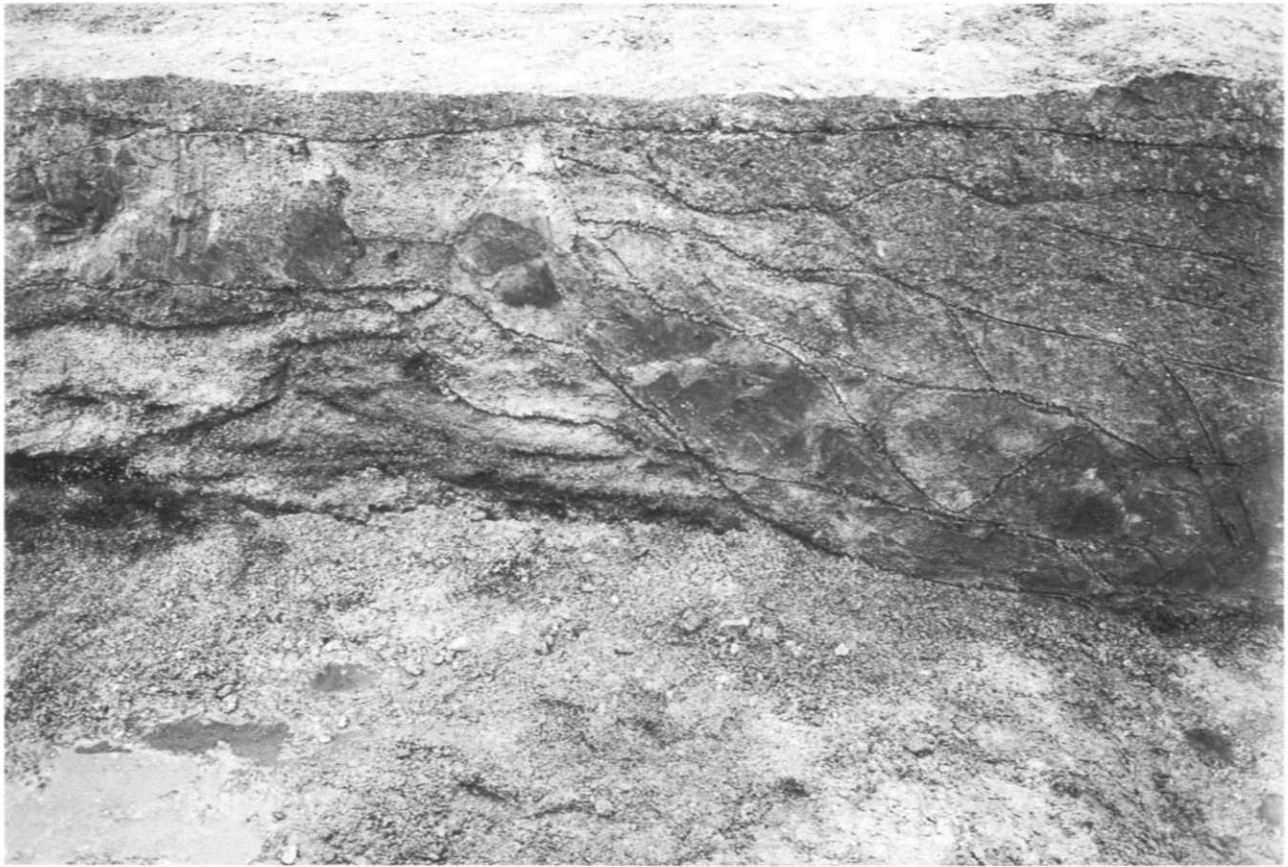
島2SD001茶色砂質土 大型円形曲物検出状況 (F10地区)



島2SD100完掘（北西側（反転前）調査区 南から）



島2SF050全景（北西側（反転前）調査区 北から）



島2SF050・島2SD001路面部断ち割り土層観察（北から）



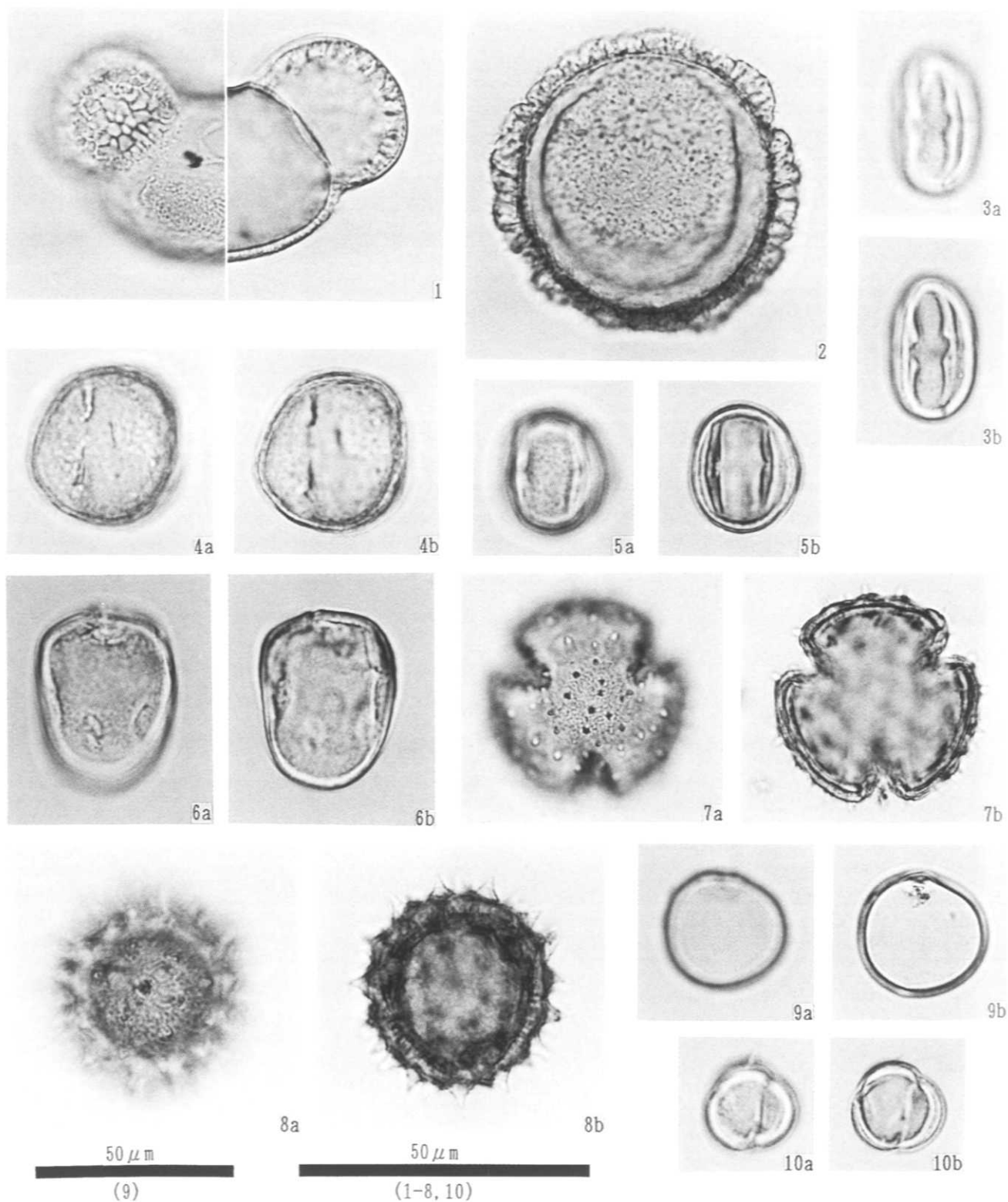
島2SF010検出状況（南東側（反転後）調査区 南から）



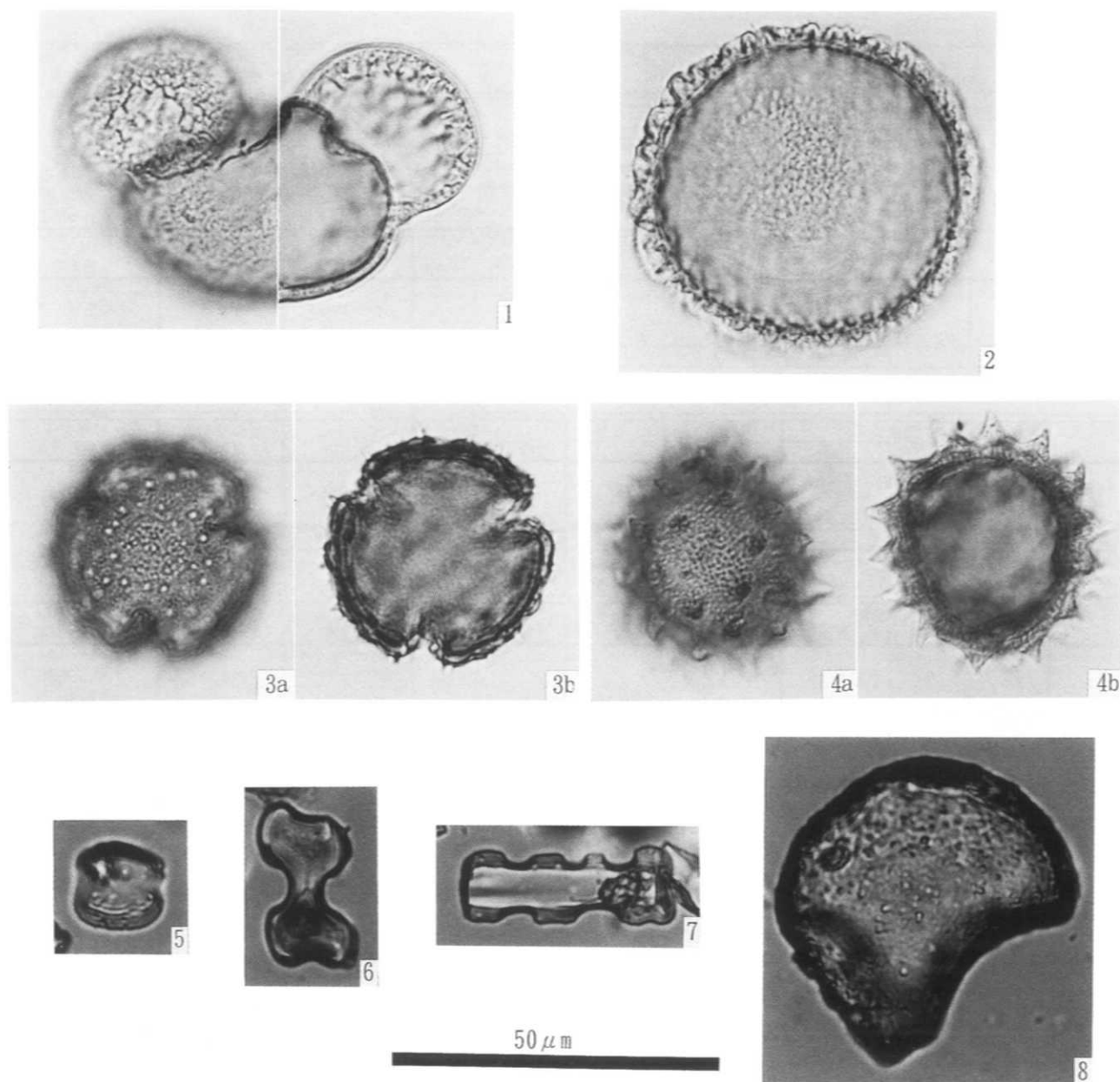
吉松松本遺跡第1次調査 調査区全景（西から）



吉松ISD003 Bトレンチ完掘状況（東から）



- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1. マツ属 (試料番号S-100①) | 2. ツガ属 (試料番号S-100①) |
| 3. シイノキ属 (試料番号S-100①) | 4. コナラ属コナラ亜属 (試料番号S-100①) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号S-100①) | 6. カヤツリグサ属 (試料番号S-100①) |
| 7. オミナエシ属 (試料番号S-100①) | 8. キク亜科 (試料番号S-100①) |
| 9. イネ科 (試料番号S-100①) | 10. ヨモギ属 (試料番号S-100①) |



花粉

1. マツ属(S-1 サツ°N2)

3. オミナエシ属(S-1 サツ°N2)

2. ツガ属(S-1 サツ°N2)

4. キク亜科(S-1 サツ°N2)

植物珪酸体

5. ヨシ属短細胞珪酸体(S-1 サツ°N2)

6. ススキ属短細胞珪酸体(S-1 サツ°N2)

7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(S-1 サツ°N2)

8. ヨシ属機動細胞珪酸体(S-1 サツ°N2)

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 シリーズ名 シリーズ番号 編著者 編集機関 所在地 発行年月日	だざいふ・よしまつちくいせきぐん 1 太宰府・吉松地区遺跡群 1 神ノ前遺跡第2次調査 島本遺跡第1・2次調査 吉松松本遺跡第1次調査 太宰府市の文化財 第77集 井上信正 森若知子 パリノサーヴエィ(株) 太宰府市教育委員会 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号 2005(平成17)年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		座標(国土地標第II系) X Y		調査期間 開始 終了		調査面積 ㎡	調査原因
かみのまといせき 神ノ前遺跡 第2次調査	条坊外	だざいふしおおあざよしまつ 太宰府市大字吉松 字神ノ前458-3、457-394	402214		56760.00	-47200.00	20010716	20011001	366.3	道路改築
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
	窯跡	飛鳥～奈良	須恵器窯3 谷1		須恵器 瓦 中国陶器(緑釉)			7c後半の須恵器窯		
ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		座標(国土地標第II系) X Y		調査期間 開始 終了		調査面積 ㎡	調査原因
しまもといせき 島本遺跡 第1次調査	条坊外	だざいふしおおあざよしまつ 太宰府市大字吉松 字島本379-10、11	402214	210312-001	56850.00	-47050.00	19900502	19900512	36	道路拡幅
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
	集落		溝							
ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		座標(国土地標第II系) X Y		調査期間 開始 終了		調査面積 ㎡	調査原因
しまもといせき 島本遺跡 第2次調査	条坊外	だざいふしおおあざよしまつ 太宰府市大字吉松 字島本379-10外	402214	210312-002	56830.00	-47050.00	19931005	19940117	490	共同住宅建築
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
	道路(官道)	奈良～平安後期	溝4 道路3		須恵器 土師器 木製品 新羅土器			水城西門ルートの官道検出		
ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		座標(国土地標第II系) X Y		調査期間 開始 終了		調査面積 ㎡	調査原因
よしまつちくもといせき 吉松松本遺跡 第1次調査	条坊外	だざいふしおおあざよしまつ 太宰府市大字吉松 字松本203-1、204-1	402214	210329-001	56900.00	-46950.00	19970310	19970331	295	共同住宅建築
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
	自然流路	縄文～平安後期	河川堆積1 小穴2							

太宰府市の文化財 第77集

太宰府・吉松地区遺跡群 1

- －神ノ前遺跡第2次調査－
- －島本遺跡第1・2次調査－
- －吉松松本遺跡第1次調査－

平成17年3月

編集 太宰府市教育委員会
発行 太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 (株)三光 福岡営業所
福岡市博多区山王1-14-4